千八百噸であります。

ところが軍艦の使用期間は、艦齢と言つて、三期に分つてあつて、第一期は七ヶ年これが第一線に立つて戰爭に堪ふる期間であります。第二期は八ヶ年、第三期は九ヶ年で、第三期の時代は練習艦位にしか使はれないさうであります。

二十五ヶ年を經れば軍艦としての使命を終つたものであります。然るに一昨年より昨年に亘つて三ヶ月の間、米國ワシントンに於て世界各國の海軍制限に關する會議が開かれまして、十ヶ年間各國とも主力艦の建造を休止することを約束いたしました。これが有名なる華盛頓會議でありまして、世界平和のために戰爭準備の競爭を止めようと云ふ趣意に出たものであります。即ち我國も此の會議に加つて居りますので十ヶ年間は新に軍艦を造ることはできず今まで造つて居つた軍艦は次第に老朽艦となつて仕舞ふのであります。

この海軍制限會議を主唱した米國の態度はどうであるかと申されますに、實に誠意を缺いた致し方であつて、其後布哇及びフイリツピンを根據として要塞を造り、大海軍の策源地としようとして居ります。一面には他國までも壓迫して海軍の軍備を壓迫して海軍を制限しながら、自國では海軍の擴張を圖つて居るのであります。これのみならず米國では、豫てより三A政策と云つて、アメリカよりアラスカを經て、アジアに進出する方策を講じつつあるのであります。又英國は三C政策と云つて希望峰即ちケープ、オブ、グード、ホープより埃及のカイロを經て印度のカルカツタに進出するの道を講じ、獨逸も亦戰爭前より三B政策と云つて國都ベルリンよりビザンチウーム（コンスタンチノーブルのこと）を經て、バクダツトに進出するの希望を持つてゐたのを、今猶その政策を棄てて居ないと言ふことであります。

斯くの如く我が國は、世界の各國が爭奪の爪牙を逞うせんとして居る間に立つて居るのでありますから、實に油斷も隙もあつてはなりません。常に米英獨の三つのABC三政策を忘れてはならないのであります。所謂「治に居て亂れず」とは古の名言であります、徒らに西洋人のお義理を唱へて居る題目で、表面だけの假面に過ぎないところの「世界平和」と云ふ美名にカブれて大事なる國策を等閑にすることは決して得策ではありません。近頃新聞の報ずる處によりますと、佛蘭西は獨逸に向つて直接行動と云つて軍隊の力を持つて償金の支拂を要求し、支那に於ては土匪と云つて暴民の騒動を鎭壓するもののために、各國は干渉を始めようとして居ると言うことであります。

矢張り實力をつくり、何時にても戰備を整ふることのできる樣にして置く事が必要であります。

古語に「文字あるものは武備あり」と言つてあります通り、一方には文化の進運を圖ると共に一面には國防に對する注意を忘れてはならないのであります。

第二　文に現れたる資料

1、鷲の海

時はいつ、明治三十八年五月二十七日。所は何處、大日本帝國の西端日本海中の一孤島、明治三十八年五月二十七日と云つたら、我が五千萬の同胞は直に記憶を呼び起すであらう、我が聯合艦隊司令長官東郷大將が旗艦三笠の檣頭高く、

「皇國の興廢は此の一戰にあり、各員奮勵努力せよ。」

と云ふ千載不朽の信號旗を揭げて、彼の波羅的艦隊を只一擊の下に全滅せしめた其の日だと云ふことを。

此の日は海が深い霧に閉されて、其の上風が荒く波が高い。島の南の礁等も四五間前は濛々として何處に船が繫いであるやら人が動くやら知れない。

「おい、其處に居るのは誰かい。」「おれぢやい。」

「おれぢや分らねえ、六太どんか。」うむ、お前は吉助どんか。」

「おう、大變な霧ぢやあねえか。こんな時にやあ海軍の人達はどうして居るだらう。全體其の今の波羅的艦隊は何處にぶら〳〵して居るのだらう。此奴を一つやつてのけねば安心が出來ねえな。」

「さうよ。それよりやあ、日本の艦隊は何處に居るんだらう。矢張こんな時にも敵が來るか何うか見張つて居るらだうぢやねえか。何處から浦鹽へ行く積だらうか、それとも此の海を通るのだらうか。」

「アハ、、、。そんなこと氣を揉むにやあ及ばねえ、神樣の樣な日本海軍の軍人に任せて置くが善いわアハ、、、、。」

「ハ、、、、」

此頃の談話と云つたら皆是戰爭の話、殊に波羅的艦隊の來る噂。漁夫までがかう心に懸けて居る。

霧の中の薄墨で描いたやうな磯馴松の下を五六人の兒童が學校へ行く。これも同じく波羅的艦隊の話、

「失敬な日本が負けるものかい。なあ磯村君、縄田君は何時もあんな弱い事ばかり云ふよ」

「なに僕だつて負けるとはいはない。負けはしまいが若しといつたんだ。若し萬一負けたら此の島へも敵が來るだらう。其の時君等は何うする積だと問うたんだ。」

「知れたこつた。子供でも日本男子ぢやないか、敵の二人や三人は此の小刀でも刺してやる。」

「僕だつて一人や二人は切つて見せる。僕の家には鎗が有るよ。」

「蝶さんの家にもあるなあ。」「えゝあつてよ、長い鎗とそれから刀が四五本。」

「蝶さん等は女だから若し敵が此の島へ上つて來たら、わあ〳〵泣いて居るだらう。」

「おういやだ、まさかねえお鈴さ〳〵。」「ええそうよ、あたし小刀でも投げ付けてやるわ。」

此の時一人が軍歌を歌ひだした。すると皆もこれに合はせる。

「多々良濱邊の夷そは何蒙古勢、國難こゝに見る弘安四年夏の頃……」

愛らしい聲は次第に霧の中に消えて行く。

先の二人の漁夫は鍬を拔き乍ら子供の話を聞いて居たが、

「子供までもあれだもの、日本の軍人が强い筈だよ。なあ、吉どん、」

「さう〳〵、露助はずうたいこそ大きいが、膽玉は芥子粒程も無えさうだ。」

二艘の小船は話の主をのせて磯に沿うて去つた。

此の日の午後二時過ぎ、南方遙に遠雷の樣な音がした。次いで其の二三十分頃から千百の雷の一時に落ちる樣な響が續く、海は鳴り、大地は震ふ。

たしかに、大海戰が起つたのである。鎭守の社には蓼々と新頃の大鼓が響く。

午後八時頃砲聲は止んだ。勝利は敵か、味方か。

小學校の生徒は二十人ばかり集つて、先生の下宿を訪ねた。先生は翌日の準備であらう、一心に何やら書いて居る。生徒は挨拶もそこ〳〵に、

「先生今日の戰爭はどっちが勝つたでせう。」と問く。先生は筆を措いて、
「やあ、揃つて來たね。まだ分らないが、そりや日本の勝利に定つてる。」
先生の此の一言は子供に稍安心を與へた。先生は子供を見廻して、
「皆の中で兄さんが海軍に出てゐるのは多田と廣橋と……安田かね。」
「え、さうです。」
と三人は聲を揃へて應へる。他の生徒は羨しさうに三人の顏を見る。先生は
「さうか。屹度手柄をしただらう。皆の中にも軍人志願の者があるだらう大きくなつたらしつかりやれよ。」日常溫和な先生も今夜は語調が强い。
砲聲が再び響き出した。多分水雷艇隊の夜襲であらう。翌日になつた。午前十時頃又も砲聲が起つた。しかも昨日よりは間近に烈しく轟く。
さては日本艦隊が敵艦を取逼したのではあるまいか、若しくは味方の不利ではあるまいかと島人は思ひ煩ふ。
校長は生徒を一室に集めて、むかし元冠の際壹岐對馬の老幼男女が一死國に報じて、美名を後世に殘したことを話した。
午前十一時頃砲聲は止んだ。勝負はまだいづれとも知れぬ、
午後三時半の頃であつた。
「おうい、敵の水兵が船に乘つて來たぞ！」
といふ聲が俄かに海邊に起つた。誰が撞くのか半撞がじやんじやん鳴る。村は大騷ぎである。老人を背負つて走る婦がある。子供の手を引いて駈ける娘がある。
見る間に海岸は人山を築いた。皆手に手に得物を持つて居る。中に最も目立つのは、白髮の老人が籠手、脛當に身を固め、鎗を横へて眞先に立つて居るのである。是は長州奇兵隊の一人柳生秀之丞と云ふ奇人である。
向の岩蔭には小學校の生徒が五六十人群つて居る。いつ用意したのかめい〳〵竹鎗を持つて居る。島は殺氣に滿ち〳〵て居る。
見えたり端艇、露兵凡三十櫓を齊へて漕いで來る。
「來たぞ、來たぞ、上る奴から打ち倒せ」と群集は叫ぶ。
「わつ」と鯨波の聲が起る。
船には手に手に白い布を振る。
「降參の印ぢやあるまいか。」と云ふものもある。
「油斷をさせようとするんだ、ぬかるな！」と云ふものもある。
露兵は怖れて近付かぬ。
此時役場の書記が息せき來て、「日本海軍大勝利、敵の艦隊全滅。今來た公報斯の通り。」
大聲に叫んだ。島民は躍り上つて萬歲を唱へた。
露兵は漸く船を陸に着けて三十四人砂の上に座つた。そして腹を抑へ、首を傾けて泣く眞似をする。言語が通ぜぬので更に意味が分らぬ。
漸く「飢てゐる。食物が欲しい。」と云ふことだと知れたので、握飯を拵へて與へると少し食つて手を振る。「食ひ

惜れぬ彼で食へないんだらう。」

と機轉の利く役場の書記が萩名物の夏橙を與ると、露兵は頭を左右に振つてむしゃ〳〵食べる。

島民は呆れて一人去り二人去り、殘るは村役場の書記と駐在巡査ばかりになつた。

小學校の兒童は學校の運動場に集つて、日本帝國萬歳日本海軍萬歳を三唱して解散した。

嗚呼、國を出て二萬海里の鵬程を越えて來た波羅的艦隊の脆いこと、二十隻は擊沈せられ、五隻は捕獲せられ、或は破壞し、或は沈沒してあへなく全滅に歸したのである。　‖吉岡鄉甫氏著　菊の下水‖

2、日本海の海戰　その一

副直將校宙を飛んで駈來り、「「敵艦見ゆ。」との無線電信がありました。」と告げたるは、正に午前五時十五分。この時早くも出港用意の信號、旗艦の檣頭に揭げらる。何人も待ちに待ちたる敵艦との出會なり。平生には思ひも寄らざる熱心にして迅速なる動作を以て分擔の事業に當り、用意は瞬くうちに整ひたり。

見渡せば各艦の黑煙天に冲し、さなぎだに威風凜々たる我が艦隊は、一層の偉觀を呈して、意氣すでに露國艦隊を呑む。すでにして旗艦三笠を先登とし、敷島、富士、朝日、春日、日進の順序を以て我が陣形を整へ、荒浪を蹴つて對馬海峽の東水道に向かふ。かくて進み行くほどに、和泉よりの無線電信は、時々刻々敵の陣形と針路とを報告し來りしかば、千載一遇の時は來れりと、諸士勇みに勇み、豪氣日頃に百倍せり。

折節南西の風烈しく、怒濤舷側を嚙んで、艦の動搖甚だしく、濛氣四方を鎖して、五海里以上を展望する能はずやがて對馬の北方を過ぎしが、なほ風波の靜まる樣子なければ、水雷艇隊に艦隊を離るべき命あり、同隊は避難所に向かひて航し去りぬ。

午後一時三十六分、敵の艦隊を冲の島の西方に見る。ロゼストウエンスキー長官の坐乘せる旗艦スワロフを先登として、アレキサンダー三世、ボロヂノ以下九隻これに續き、餘は濛氣の爲に見るを得ざれども堂々戰列を整へ鼠色の船體に淡黃色の煙突は、一層その形狀を鮮明ならしむ。舳艫相銜み、黑煙を靡かせて我に向かつて進み來る狀、何ぞそれ勇壯なるや。

艦數に於ては相匹敵し、戰艦及び十二吋主砲の數に於ては彼優り、裝甲巡洋艦及び八吋砲の數に於ては我優れる。日露兩艦隊は、國家の安危をこの一戰に賭して、龍虎相搏つ一大活劇をここに演ぜんとす。

一時四十分、旗艦三笠は敵の前路を扼せん爲、針路を變じて敵艦隊に向かひしが、この時檣頭高く「皇國の興廢この一戰に在り。各員一層奮勵努力せよ。」との信號飜りたり。全艦隊の士氣爲に大いに振ふ。

二時七分、敵まづ砲火を開き、盛に砲彈を放てども、距離遠くして、多くは海中に沒す。我は滿を持して未だ發せず、烈しき敵の砲火に堪へて、前進を續くること約六分、こゝに於て旗艦三笠始めて砲火を開く。これより我が艦隊は適當なる位置を占むることに砲火を注ぎ、かくて幾日月待ちに待ちたる海戰の序幕は開かれたり。

兩軍の砲煙は煤煙と相混じて海上をこめ、水中に落つる砲彈の水柱は空を衝き、西も東も轟々耳も聾せんばかりなり。敵は初陣の悲しさ、氣や顚倒したりけん、訓練や足らざりけん、その砲彈多くは命中せず。これに反して、我が各艦より擊出す砲彈はよく敵艦に命中し、その爆裂の爲に、黑色の煤煙を揚ぐること數知れず。かくて二時四十分、彼我主力の第一戰に於て、勝敗の機はすでに決せり。

三時十七分、我が第一戰隊は、全砲火を再び敵の主力艦隊の先頭に注ぎしに、敵は針路を轉じて我が鋭鋒を避け我はこれを追うて更に砲火を注ぎ、その命中の狀、壯快を極む。

これよりさき、敵艦オスラビヤのすでに海戰の初期に於て火災を起し、聊か前部を海中に沒しつゝ戰列を離るゝを見たり。さてこの第二回の激戰に於て、敵艦隊は全く擊破せられ、三時二十三分、旗艦スワロフも亦大火災を起し、戰列を離れて孤立するに至れり。

3、日本海の海戰　その二

第二回の攻擊終りたる後、敵の主隊はいづれに行きしか、見渡す限り海上は砲煙と煤煙とに包まれ、僅かに旗艦の孤影を殘せるのみ。この時予は艦内を巡視せしに、兵員口を揃へて「副長、御めでたう御座ります。」と述ぶ。誠に然り、天下豈かくの如き大慶事あらんや。祝辭の交換は單にここのみに止らず。上中甲板到る所皆然らざるはなし。宛然これ幾且の光景なり。

四時三十分、我が主戰隊はスワロフに砲火を集注しつゝ通過す。敵はすでに半ば戰鬪力を失へる上に、今また砲火を浴びせ掛けられしことなれば、全體忽ち黑煙に包まれ、焰煙熾に起り、やがて汽罐の破裂したるにや、黑煙蒸氣を交へて昇騰す。その狀、壯絶又凄絶。

五時八分、我が驅逐艦のスワロフ攻擊のため突進するを認む。この不幸なる戰艦は全部黑煙に包まれたれども、なほ砲彈の發射を止めず、或は驅逐艦を防禦し、或は艦隊を砲擊して、飽くまでも抵抗す。その意氣や愛すべく敵ながら歎稱するに堪へたり。

予が艦の砲擊を中止せる時、今は敵艦にたゞ一つ殘れる十二吋砲の一彈我が前橋に的中し、破片司令塔に飛入り數人の死傷者を出したり。司令塔内に在りて操舵に從事しゐたる一等信號兵曹は、この彈片に右肩を貫かれしが毫も屈する色なく、傍なる水雷長に向かひて我が右肩を見て給はれ。」といふ。水雷長顧てこれを探りしに、指を沒するほどの裂傷にして、顏色すでに蒼白となれるに、なほ左手に舵柄を採つて、艦の運動を過たしめず、交代者の來るを待ちて、始めて繃帶所に赴きしは、さてもあつぱれなる働きぶりかな。

かくて我が艦隊はスワロフに大打擊を加へて過ぎ、轉回して再びこれに向かひぬ。途中二檣三煙突なる假裝巡洋艦ウラルの彷徨せるを認め、第一戰隊より全線の砲火を集注したれば、彼は忽ち大火災を起し、焰煙天を覆ふ中に、まづ煙突倒れ、次に一檣失せ、引續きて第二檣より第二、第三煙突まで悉く壞れ去つて、後部より海中に沒し、忽ちにして復艦影を認めざるに至りぬ。その間僅かに五分。沈沒したるは五時五十分なりき。

これより北方に向かひて敵の主隊を搜索せしに、偶々スワロフの北西方に當つて四隻の敵艦を認む。二隻は稍近く、他の二隻は距離甚だ遠し。我が戰隊はまづ近き二隻に向かつて進み、相並びて砲火を交へ、逃ぐるを追うて戰ふこと大約一時間。七時十八分。敵の嚮導艦ボロヂノは後部に大火災を起し、火光天を燒く。

時に我が旗艦三笠は針路を北方に轉じ、他の諸艦もこれに從ふ。その時富士は煙に包まれたるボノヂノに一彈を送りしに、爆裂して黑煙漲り昇る。誠に見事なる命中なり。續いて予が艦より砲火を注ぎしに、聊か前方に落ちたれば、予は距離を注意する中に、ボノヂノ爆發したりと告ぐるものあり。見ればたゞ黑煙を殘すのみにて、終にその沈沒の狀を目擊すること能はず。以ていかに迅速にその海底に急ぎしかを知るに足るべし。これ恐らくは火藥庫の爆發に因りたるならん。時に七時二十三分。

七時二十五分、戰鬪中止の命ありて、我が戰隊は北上す。時に日漸く西に傾き、驅逐艦、水雷艇は敵艦の周圍に集り、各攻擊の位置を擇び、今や遲しと期を待てるものの如し。

嗚呼、二十七日に於ける我等の戰は終りぬ。夕陽すでに天外に落ちて、視界漸く暗し。遙かに南方を顧れば、探

照燈の光は波上に交錯し、砲聲殷々として、遠雷を聞くが如し。これぞ我が驅逐艦、水雷艇の敵艦攻撃に着手せしものと思しく、八時頃より十時頃まで止まざりしが、遠ざかるに隨ひたゞ波の音のみ高し。

＝東郷吉太郎「掃蕩餘風」による＝

4、撃滅

＝小笠原長生＝

「本國より新來の敵艦隊に對しては、誓つてこれを撃滅して、宸襟を安んじ奉ります。」

御下問に對し、聯合艦隊司令長官東郷（平八郎）海軍大將はかう奉答して肅然となつた。列席してゐた山本（權兵衛）海軍大臣・伊東（祐亨）海軍軍令部長は、その餘りに斷定的な奉答振に思はず大將の顏を見詰めたといふ事だ。されば、從令自信があるにもせよ、一些事たりとも苟もしない大將が、かうした思ひ切つた赤答をなすには、勿論それだけの覺悟がなくてはならないが、果してそれはどんな覺悟であらうか。

何時の時代の、何處の戰役においても、苟且にも一方の指揮官たる者で、勝たなくてもよかつたものは一人もない筈だ。が、今度新に露艦隊を邀撃する我が司令長官程責任の重い場合は滅多にあるまい。五分々々の勝負は勿論、七分三分の勝を得たとしても、まだ責任を盡くした事にはならないのだ。見給へ、ウラヂオにゐた僅かに四隻の露艦のためにすら、「そら玄海灘だ。」「そら津輕海峽だ。」「そら東京灣外だ。」と散々苦い經驗をなめさせられたではないか。まして十隻以上の軍艦がウラジオに入つたとしたら、朝鮮海峽は絶えずその脅威を受けて、滿洲に屯する我が軍隊は後方聯絡の安定を得ざるのみならず、露國はまた決して講和の申出はしなかつたらう。かう考へてくると、司令長官であつた東郷大將は、唯敵艦隊を撃滅するを以て、陛下に對する責務と覺悟し、而して之を撃滅し得る自信を持つてゐたに相違ない。開戰の當日、哨艦から敵艦隊出現の警報に接した際、大本營に「直ちに出動これを撃滅せんとす。」と電報したのは、この覺悟と自信とを端的に上奏したものと思はれる。しからば大將はどうしてそれ程までの自信を得られたのであらうか。これは日本海々戰に對し重要な關係を有するものであつた。

先づ第一は、御稜威と臣民の忠誠とに由りて生ずる天祐・神助を確信せられた事である。我々のやうな凡慮を以て淺くこれを見ると、何だか迷信臭くも思はれるが、大將の天祐・神助に對する觀念に決してそんなものでは無い。國家にしても個人にしても、至誠・正義の光は、必ず神明の鏡に映じ、その反射が天祐となり神助となつて人界に下るといふのが、大將の信仰であるやうだ。「天は正義に與し、神は至誠に感ず。」の信條を眞向に振りかざして向はれる所には、拮抗し得る何物も無いのである。

至誠は東郷大將の生命である。十四歳で藩侯に仕へてより以來今日に至るまで、七十年間一貫して變らざるは、至誠の二字で、その東宮御學問所總裁を拜命するや、

おろかなる心につくす誠をば
みそなはしてよ天つちの神

と詠じ、近くは昭和四年五月二十七日には、二萬五千の少年に向つて、

「どんなに智惠があつても力があつても、至誠が缺けてゐては本當の御奉公は出來ません。」と諭されたのである。

第二は、實戰の經驗に、彼我雲泥の差あるを確信せられた事である。大將は嘗てから敎へられた。

「海戰に勝つ秘訣は、平素戰策の攻究を積み置くと共に、實戰の際、機に應じて自在に變化し、以て戰勢を有利に導くにある。但しこれは微妙な問題で、主として實驗より覺り得らるゝものだから、机上の學問許りでは駄目

ぢや。」と。眞に服膺すべき金言である。實戰の經驗のなきこと、これが新來の敵艦隊に取つて最大の弱點であつた。

第三は、逸を以て勞を待つの利を確信せられた事である。大將の愛讀書孫子の軍爭篇に、「近を以て遠を待ち、逸を以て勞を待ち、飽を以て饑を待つ。これ力を治むる者なり。」と說いてあるが、これ程よく當時における彼我の狀況に當嵌つたものはない。露國の新艦隊はその本國より遙々一萬五千浬を航破して來たのであるから、これ程遠方から來る敵は滅多にない。しかのみならず、長い航海であるから、艦底は穢れ、機關は過度の使用に故障を生じがちで、速力は減退する。かうして、その勢力を十分に發揮することは出來ないのが常である。

更に軍需品に至つても、補充の困難から缺乏を來してゐたことは想像に難くない。隨つて、將卒の精神上にも不安が附きまとひ、士氣の振はざるべきも當然である。これに反して、我が艦隊は居ながらにして敵を待つたのであるから、修理も、手入れも思ふ存分に出來てゐたし、軍需品は豐富であつたし、腕には覺えがあつただけ、一段と勇氣も旺盛になつて、忠誠の念益々燃え立つてゐたのであるから、兵家のいはゆる先づ勝つてしかして後に戰ふものであつたことは、東鄕大將の夙に知悉せられた所であらう。

かういふ諸點から必勝の自信を持つてゐられたからこそ、「誓つて之を擊滅し奉る。」と奉答されたに相違ない。名將の一言大いに味ふべきものがあるのである。

5、海戰の前夜　‖小笠原長生‖

明治廿七年七月廿五日も名殘なく暮れて、早初更に近し。余は高千穗の士官室を出でて私室に入り、軍服を寢衣に着替へ、眠に就かんと床上に横たはりぬ。酷暑燒くが如く、流汗背を濡ほして容易に眠をなし難し。

「艦長諸士官を召す、請ふ速に至れ。」數人の從卒、中甲板を走つて士官の私室を呼び廻りぬ。予は直ちに起きて再び軍服を着し、艦長室の戸を排して入れば、衆既に在り。皆椅子に倚つて默然一語なし。時に艦長野村大佐半白の髯を捻り、從容として曰く、「諸君報國の秋いよ〳〵至りぬ。日淸の國交終に破れたり。」と。語は霹靂の如く耳底に徹し、並みゐる諸士は艦長の面を視つめぬ。艦長は語を續けて、「未だ詳報に接せざれども、今日我が吉野・浪速・秋津洲、偶〻豐島沖にて淸艦、濟遠・廣乙・操江及び運送船一隻に逢ふや、濟遠突然我に向つて發砲せり。茲に於て我が三艦も應戰し、戰鬪一時間にして濟遠・廣乙を驅逐し、運送船を沈め、操江を捕獲せりと聞く。艦隊は遠からず北進して敵と一大決戰を試むべし。諸君幸に努力して、以て忠名を竹帛に垂れよ。今日の戰勝はこれを祝せざるべからず。いざ共に一盞を傾けん。」といひ、從卒をしてシャンペンを持ち來らしめたり。乃ち相共に盃を擧げて、天皇陛下萬歲・海軍萬歲を三呼し、一氣に滿を引いて艦長室を出でたり。

舷窓によりて望めば、更けゆく空に銀河長く流れ、星光淋しく瞬き、近き島の夏草に咽ぶ蟲聲聞えて、夜色沈々たり。萬感は胸に溢れて眠らんとして眠る能はず。父君未だ世に在せし時、常に余にいつて曰く、「爾華冑に生ると雖も、元これ武門の裔なり。豈觀月・弄花を事として、碌々一生を終ふべけんや。宜しく自ら進んで筋骨を鍛へ膽力を練り、有事の日一身を國家に致して、以て君恩の萬分の一に報い奉るべし。」と。言猶耳にあり、而して其の人なし。尊靈願はくは照覽あれ、不肖の兒、學業を卒へて士官の列に入つて既に七年なり。然れども、性魯鈍にして一事も成す所なかりしに、計らざりき、今月今日、軍に從つて將に一大決戰に臨まんとすとは。寔にこれ千載の一遇、武人の面目何ものかこれに加へん。縱令身は砲彈に中りて軍艦旗の下に斃れんとも、魂魄は勇みて黃泉なる父の面に進まんと。一念此に至つて、壯心の大いに湧き立つを覺えぬ。頭を回せば、慈母堂にありて、

齡半百に近し。且多く藥石に親しむ。開戰の事を聞き給はば、定めて心を勞し給ふべし。我が高千穗は過ぎし彌生の初旬、命を奉じて南方三千里の布哇に航し、同島に泊すること二閱月なりしが、偶〻韓山不穩の飛報に接して、急航横須賀に歸り、留まる事四日にして再び遠征の途に就きぬ。當時唯一度、邸に歸つて慈顏を拜したりしのみ。軍人陣に臨む、固より生還を期すべからず。いでや、一書を遺して訣別せんと、乃ち燈火の下に二通の書面を認め、其の一を執事某に寄せて後事を託しぬ。＝思出を語る＝

第三　兒童の感想

1、夜行軍

＝西村豐三郎＝

三分間おきに出發

吉野川にそうた長く續く堤防……夜だ……闇だ……聞ゆるものは……靴の音……せきの聲……蛙の聲、堤防をゆく私達には、初夏の風の音が一入身にしむ。

何處をむいても闇だ。全く墨繪の樣だ。ぼんやり見える松林、薄赤く眠つた樣なかがり火。これ等を眺めながら一歩一歩進んでゆく。

浪の音は次第に大きくなつて聞こえる。足は大分疲れて來た。夜の空氣は次第に冷えて來る。

やつと冲州海岸の砂の上に安堵の胸を撫でおろした。

おー自然は壯觀だ。浪はすごくうなる。そして白齒をむく。

空も海も眞黑で見別けはつかぬ。其の中を光つたり消えたりする燈臺の光。

津田口を離れた汽船が南方の闇にすい込まれてゆく。

日本海の海戰。目前に現れたらどんなに勇壯だろう。

壯嚴な宮城遙拜が行はれた。……靜かにうなる松風の音。淋しく鳴く虫の音……益感極まつて來る。

國民體操につづいて福田先生のお話、しばらく休憩。

ます〳〵湯を覺える。けれど水はない。體は疲れてねむたくなつたが我が家は遠い。靴ずれして足は痛くて耐えられない。しかし自ら歩むより外仕方がない。

剛健たれ。日本海々戰を思へ。

何處となく强く叫ばれた。

おゝ、今夜の行事。日本男子の意氣は茲だ。

元氣百倍。足並揃へて歸途についた。

2、夜行軍の所感

＝山田　茂＝

午後七時半、一同は二分隊に編成され、二列縱隊に並んだ。

時間は迫る。愈出發。しかし三分おきに出發するので、我々は最後であるから、まことに待遠しい。

愈自分の順が來た。自分の學級の先頭は、僕と岩田君。後からは唯黑い列がうね〳〵と進んでくる。出來島、前川、助住西町、上助住を通つて古川堤に出た。

おゝ何たる壯快であらう。

四國一と誇る吉野川は長く帶の如く流れてゐる。淡黑き中に白く光つているのは星の映じてゐるためであろう。

この長堤から目的地までは一里餘もある。之を東へ〳〵と進むのである。思へば實に壯擧である。

途中は一切無言を嚴守するために、數間先きに進んでゐる學友の存在をも知らぬ程である。眞の暗夜の行軍はこうも痛快なものかと言う事を味はされた。

路は一筋、路傍の雜草は足にまとひ、所々高低甚だしく、次第に疲れは覺えて來る。顏からは玉の樣な汗が流れ出してきた。

あたりは益々眞の闇となる、今は民家の電燈さへ見えなくなつて來た。しかし、勇氣一倍、一寸の油斷もなく進んだ。全く實戰にでも望んでゐる樣な緊張ぶりである。

時々闇黑の中に巨人のゆくが如き松林に驚かされる。吉野川邊の茅を吹く風の音が何となく物淋しい。遙か東の吉野川の河口に怪し火のもゆるのも見ゆる。

勇氣な吾等も魂を寒からしめた。何、進むに從ひ人聲さへ聞こえて來るので、それに近づいたのを見れば全く漁夫の漁火と知れた。東へ進むこと約一時間、路は益々狹く高低甚し。

前方に當つて遠雷の如き響をきく。その物凄さ、胸をとどろかせた。しかし、今夜の行軍は、何物をも恐れない日本男子の意氣を養ふにあるのが目的だ。臆する場合に非ずと、元氣を出して尙進むに從ひ、響は益々大きくなり而かも斷續律動あり。

目的の沖州海岸に近づいた事が想像されて勇氣百倍し意氣ます〳〵あがる。數町にして漸く海岸に到着した。

我等の眼界は展開された。砂の上に座し遙か沖合を眺むれば、お龜磯の燈臺は遙かの沖合を照し夜の闇黑に一大光明をなげてゐる。

あれ狂ふ怒濤、萬里の太平洋の眞只中より押し寄せて靜寂な夜の空氣を震動してゐる。所々に一群の夜光虫が光つてゐる。一同起立して服裝を調へ、東面して整列した。誠意をこめて宮城を遙拜した。闇黑の海岸、大宇宙の一角に立ち渺茫たる太洋に望み前面に何等の妨害物をも認めず遙拜する其の瞬間、兒童總代の朗讀する。

「吾等一同愼んで皇室の御高恩を感謝し日夜奮鬪し以て日本文化の建設に努力せんことを誓ひます」

の誓文は胸をえぐつてゆく。その崇高なる環境は、この世に生を享けて始めての偉大なる感得であつた。この時の心持こそ眞心と言うべきか。

遙拜後國民體操を爲し休憩した。先生より突如命令があつた。

「德島縣廳前まで四十分以內で强行せよ。」日本海々戰に於ける東鄕總督の命令の如き感をした。時は將に午後十時。約二時間半を要した途を四十分とは……とも考へた。

しかし、茲が男子の意氣だ。「疲れた足よ立て」と自らを勵まして愈々强行の途についた。

闇黑は依然闇黑。時々駈足の音をきくのみ。

一同は西へ西へと驀進した。途中一滴の水もなく寸暇の休憩もなく息をもつかせぬ狀態で急いだ。汗は瀧を爲し足は疲れる。息は苦しくなる。

しかし、一同は夜行軍の趣旨を體得しているから、少しもひるむ者なく漸く縣廳前についた。

一同汗を拭ひ顏を見合せて、その痛快さにほゝ笑んだ。

嗚呼、男性的な此の壯擧。この夜行軍によりて得たる身體的精神的修養は實に偉大なるものである。而して、これは、これに參加したるもののみ味得される偉大な力である。この力を以て今後の生活の上に勇躍せしめたい。

嗚呼女性的男子よ、遊惰に耽る青年よ。惰眠より醒めよ。而して此の擧によつて得た剛健なる精神を君等も體得

せよ。

3、夜間登山所感　＝横手儀一郎＝

二十七日我々一同は、午後八時を期し、夜間登山を試みたり。

僅かな燈明を唯一つの便りとして、嶮岨なる山道に至る。山間靜寂として萬物將にねむる。

頂上に至らんとすれど僅かな燈明は、全道を照らすに乏し。暗黑なる足下は、危險極りなし。

然るに血氣旺盛なる日本男子は、物ともせず漸くにして頂上に達す。一同元氣益々旺盛なり。

「萬歲々々」と思はず起る。全身には、汗流る。

山間の氣膚を洗ふ。その心地よさ形容しがたし。

山麓には、大德島の眠るゝあり。其數の電燈はさながら螢の如し。

かくて一同は、「神安かれ。」と遙か東方を伏し拜み、一場の體操を終へて下山す。

闇の山間は一事の動搖もなし。まことに靜寂にして一聲もなし。

闇の山、之れぞ、他界に見ることのできない望地ならん。

打並ぶ草木眠り電燈の火まだ薄暗き路前下山す。

第七章　時の記念日

【六月十日】

人間一代の時間的生活

墺國ウィン大學ヴイクターホーヘルト教授の調査

七十二年生きた人

◆睡眠	二十三年
◆勤勞	十九年
◆運動娛樂	九年
◆食事	六年
◆旅行	五年
◆病氣	四年
◆衣服取換化粧	一年

第一節　時の記念日の由來

天智天皇は英明な君にあらせられた。各種の事業に御宸襟を惱ませ給うたのである。

就中大化の改新は偉業中の偉業である。文化の進轉に尤も重要なるものは時間の勵行である。

然るに、いまだ、時間の觀念を表示するものなく百官の參朝も區々にして政務を執るに甚だしき支障を來たす事が尠くなかつた。

大化の改新の大業を其の當時皇太子として完成に努力された天皇が茲に御着眼にあらせられて水時計を御發明になり參朝の時刻を正されたのである。

日本書記の第廿七卷、天智天皇の十年の條に

夏四月丁卯朔辛卯置漏剋於新臺始打候時動鐘鼓。始用漏剋者天皇爲皇太子時始親所製造也……云々

とあるによつて知らる。しかし實物は現存せない。

漏剋は所謂水時計であつて、水滴の漏出の分量によつて時間を測定するものである。極めて原始的のものである。今より考えれば實に幼稚なものである。しかし、何等の時間測定の機械のなきときに此の發明は非常に有價値なものであつた事は言うまでもない。

世界に於ける創始は今から四千五百年程前に支那の黃帝の頃であり西洋にては二千三百年程前に發明せられたのである。

水時計の構造は、五つの箱があり、その箱は順次その位置を低下する樣配置し夫々管によつて連結される。第一の箱に水を注ぎ込むと連結されたる管を通つて順次の箱に移り最後の箱に滿る。最後の箱には四十八の刻み目をつけたる矢があつて、箱の中へ水の入るに從つて浮み上りそれを見て時間を知る如く組立てられたるものである。

第二節　施設指導の着眼點

我國の國民は、時間的觀念が極めて薄い。從來の生活が主として個人的であり家庭的であつて、大集團としての生活が必要なかつたからであろう。

生活の樣式が比較的簡單なる際は、それでも間に合う譯である。

しかし、今日の如く、文化が進み、生活が非常に複雜となり大衆的生活に依つて共同的に分業的に

凡ての生活にあたらなければならぬ今日に於ては、何をおいても時間觀念が先きに立たなければならぬ。一分一秒を爭つて相互に連關したる生活に參與しなければならぬ。

かくの如き社會生活組織の變轉に際會しても傳統は容易に改善されるものではない。

今日の學校に於て規則的生活を繰り返して居るものが社會の中堅となる際には、或は現在よりよき時間的に生活しうるであろうが、それとても、傳統の勢力に壓迫さるゝとき、その効果は極めて薄

い。一面には現時の文化を進展せしめる上にも大にその必要と改善を絶叫しなければならない。時の記念日は言うまでもなく、二つの方面の要求から生れたものであろう。

學校としては、一面兒童に時の尊き觀念を堅實に扶植する事は勿論、一方に於ては、鄉土の人々の時間に關する自覺を促す事も又一つの任務としなければならぬ。而して、そうする事によつて、兒童の自覺を一層促進する所以でもある事は言う迄もない。

こつ二點に着眼して施設指導しなければならぬ。

第三節　施設指導の計畫

第一　學級單位の講話

講堂訓話は、統一を作り氣勢をあぐるのはよい場合もあるが一方に於ては、どうも不徹底の嫌がある。殊に、學校が大校であればあるだけ、それだけ徹底力が弱い。

尋常一學年から高等三學年までも一組にして訓話する事は無謀の仕方である。低學年、中學年、高學年と三部制にしても話材によれば不徹底は免れない。

本體は學級講話が一番よい。殊に之を直に實行せしめると言う樣な時の記念日などの講話は學級毎に行うがよい。特に專問家でなければ出來ぬと言う仕事でもないから學級に於て行わしむるものはなるべく具體的にその學年に適したもので、直に實踐を督勵するものでありたい。

材料は便宜上教科主任なりまた此の方面によく研究されたるものに調査して貰つて學級教員は、之を學級に適當したる樣補正してゆく事は便宜の方法である。

本講話は學級毎に行うことを以て適當とする。

第二　標語ポスターの募集

自覺的意識を濃厚にする良手段は、どうしても作爲によるを以て適當とする。精神的作爲は一層その効果がある譯である。

言うまでもなく、標語ポスターは、急速的發展時代としての今日に於て民衆化したものであつて之によつて直覺的に相當の効果を擧ぐる事ができる樣にまで進展して來たものである。

市町村その他の團體に對してかゝる方面の募集があれば、既にも述べておいた樣に、學校としては喜んで之に多數應ぜしめるがよい。

それによつて兒童教育の上にも、また鄉土人教育の上にも極めて有價値であるからからである。

學校としても標語及ポスターを募集して優秀なものに對しては賞を與え、之を學校適當な個處に掲げて直感せしめるがよい。校外より送つて來たものよりどれだけか印象が深いか知れないものである事は言うまでもない。

第三　時間尊重週間の制定

時の記念日即ち六月十日を中心として一週間時間尊重週間と決定して、いろ〳〵の方面に時刻を

勵行せしむるがよい。例へば一定の時刻に學校に來ること、或は、朝會の合圖とともに迅速に所定の場所に集合すること。歸宅の時間を一定すること、或は就寢朝起の時間の勵行を圖ること、自宅學習の時間を一定すること等の協定を爲し、之を正直に記錄に止めしめること。之等を一種の統計に表して見ると反省せしめるらるゝ點が尠くない。

第四　生活時間の調

兒童にしても、また、大人にしても愈自己の生活と言う事を時間的に調査すれば思い半ばに過ぎるものがあろう。終日何等かの仕事に從事している樣でも、實際の活動時間は比較的尠少なものである。

特に兒童の生活は之を計算して見れば、所謂具案的に勉強したり手傳をしたり勤務に從事している時間は尠い。大部分の時間は遊んでいる事が知られる。

この調査は時計を要するので低學年では困難であろう。

五學年以上位で自分の內に時計のあるものは調査ができる。

時間觀念の發達した都會の子供であれば四學年の兒童位でもできない事はない。

調査事項は學年によつてその程度は異るべきである。

1、起　床　時　間　　3、出發するまでの時間

2、朝食までの時間　　4、出發から學校へ到着までの時間

5、始業の間までの時間

6、學校に居りし時間

7、學校に於て學習せし時間

8、學校に於て遊びし時間

9、掃除其他作業に從事せし時間

10、歸宅に要せし時間

11、家庭に於て作業に從事せし時間

12、復習せし時間

13、入浴等に要せし時間

14、歸宅後遊びし時間

15、就　寢　時

16、就寢時間數

これを一週間調査せしめ、之を分類統計せしめる。

1、就寢時間數　　3、勉强時間數

2、起床中の時間數　　5、運動時間數

3、作業時間數　　6、雜談時間數

等學年に應じて項目の多少を斟酌して統計せしめるも面白い方法である。

猶進んでは、之が改善案を研究せしむることもよい。高學年に於ては、適當な勞作である。

第五　時間尊重宣傳

既に述べた如く、今日は急速展開時代である。されば長時間を要して理解せしめると言う樣な計畫は間に合わない。それよりも、何事も直接行動となるものでなければならぬ。

一目瞭然たるもの、語に全意をふくましめたるもの、而かも夫等は、極めて大衆的でなければな

らぬ。極めて濃厚に刺戟するものでなければならぬ。されば、學校兒童が通學區域内を數地方に別つて、數組の宣傳隊が或は國旗に、或は標語を書して大幟に、或は宣傳歌を樂隊に合してなり、種々の方法によつて市町村を練りあるく事は、決してお祭り騒ぎではない。時代の要求に適した有効なる方法である。之を實踐している兒童は勿論、之を見るもの聞くもの父兄に取つては唯一の自覺作用を起す刺戟である。百の說法よりも効果の多いものである。

兒童の自覺ある熱烈なる要求は父兄にとつては多大の情意を動かすものである事は吾等の常に經驗する處である。

猶進みての宣傳方法としては、高學年兒童なれば、交通頻繁なる處、又は何かの集會の場所に於て路傍演說又は室外演說を試ましめるもよい。內容はある程度まで精選せしめておくがよい。經驗によれば通行者は嘲笑し輕侮したりする者はない。極めて同情を以て歡迎して呉れるものである。

第六　生活體驗發表會

體驗せしめたる事は、一度之を整理して發表せしめるがよい。

そのためには、生活に責任が生じてくるし、また發表するために之をそのまゝ等閑にせずして整理する。

整理するためには、過去の生活の內省が行われて今後の生活に對する發奮を促す事ができる。

實行せした事は、常に何等かの形に於て整理せしめ題材によつては生活體驗として學級中心、又學年中心、學校中心として發表せしめるがよい。他のものは、之を聞く事によつて自己の生活を批判し、進みては、暗示を受けて將來の生活に一層の進展を見せしめる事ができる。

第四節　施設指導の實際例

一、目　的　時の記念日を好機會として、兒童の時間觀念を一層濃厚ならしめ、併せて時間尊遊の良習慣を涵養するにある。

二、方　法

(一)學　級　行　事

1、各學級に於て記念日の趣旨及之が實踐に就ての講話をなすこと

2、時間尊重週間の計畫實踐をなすこと

3、ポスター、標語の募集に應ずること

(二)學　校　行　事

1、ポスター、圖案の募集、審査、發表　各學級に於て標語は綴方の時間、ポスターは圖畫の時間に畫かしめ各學級に於て嚴選し所定の數を提出せしめること、之を學校審査に附して等級を決定して發表すること

2、ポスター、標語の掲示　學校の募集によつて當選したものは、夫々堪能なるものに清記せしめ、校内の要所に之を掲示すると同時に、市町村の當局と協定して、之を市町村の要所へ掲示し、宣傳を爲すこと

3、時間尊重週間行事

(1) 低　學　年（一週間）

イ、遲刻早過をしない事　ロ、放課後居殘りをしない事

ハ、通學に要する時間を測定すること

(2) 高　學　年（一週間）

生活調査

イ、睡眠時間　ロ、覺醒時間

ハ、學校に於ける勉强時間　ニ、自宅に於ける勉强時間

ホ、學校に於ける作業時間　ヘ、自宅其他に於ける作業時間

ト、食事(三度)に要する時間の總計　チ、體育に要したる時間

リ、趣味のために要したる時間

以上數種の百分比　一週間の累計及百分比

今後の改善方案

◎參考

時間尊重週間兒童生活狀況調

1、學級に於て計畫實行したるもの

第〇學級　第〇學級

計畫事項	實行狀況
一、通學時間の測定	一、每日(週間中)の自宅より學校まで通學に要する時間を記錄せしめ、其終りに平均せしめ通學時間の測定をなさしむ。
二、標語	二、標語を作らしめ教室内に掲示し時の尊重すべきことを暗示會得せしむ
三、ポスター	三、右同樣ポスターの作製をなす。
四、週間の體驗日記	四、週間の時間尊重體驗記錄を爲さしめる。
五、右同發表會	五、週間終了後體驗誌の發表會を行ふ。
六、學級雜誌の發行	六、右ポスター、標語、週間體驗記錄、同發表を一纏として學級雜誌の臨時號を發行す。
七、授業時の時間尊重	始業、修業、集合等を尤も嚴重にし時の尊重すべき所以を一層自覺せしめる。

2、全校的に行ひたるもの

計畫事項	實行狀況
遲刻早退をしないこと	遲刻者　九名 早退者　二名
通學所要時間測定	最長　四十分間　住所　安宅町　樫本茂 最短　二分間　西新町　森武
居殘りをなさず直ちに歸宅すること	大體に於て精神を了解せるためか居殘れるものなし

第五節　參考資料

第一、訓話資料

1、時間を惜しめ

＝下田次郎＝

一臺の輪轉機は一分間に新聞三四百枚を刷り出し、活動寫眞機は一分間に四十五呎、七百五十枚の映畫を撮影し、自動電話は一分間に八百語を送信し、速い飛行機は一分間に二哩半を飛ぶと言ふ。

世間の事は多く非常な速さで進んでゐる。私達がちよつと無駄話をしてゐる間に、新聞はもう何千枚と刷り上つてゐるのである。私達がちよつといたづらをしてゐる間に、汽車に乘つた旅人は、もう行先へ着いてしまつてゐるのである。これを思へば、私達は到底時間について平氣ではゐられない。

若い人達ほど記憶力が强い。若い時に見聞きしたことは、一生忘れることはない。學問の方からいへば、この頃ほど貴い時はない。後年になれば心を使ふ事が多くなつて來て、勉强の時間はあるかないかになり、その上身體も弱り、記憶も衰へるから、骨を折つただけ覺えられない。後悔すまいと思へば、今が力の入れ時である。いつもひまの多い人に、えらい人はないものである。

時間を惜しめと言つたとて、朝から晩まで机によりすがつて、本を讀んでゐよと言ふのではない。その本も學校できまつてゐる外の本なら尙更である。仕事をするだけしてあとは休む時は休み、遊ぶときは遊ぶのは、固よりよいことである。働くでもなく、休むでもなく、遊ぶでもなく、勸めるでもないといふやうな、ぼんやりした、意味のない時間の使ひ方をするなといふのである。

これには、毎日の仕事に順序を立てゝ一つ一つ規律正しく片附けて行くやうにするのが、最も良い方法である。遊ぶ時には我を忘れて遊ぶがよい。そのかはり、勉强や仕事をする時には、それこそ新聞印刷の輪轉機と一しよに廻轉し、汽車と一しよに疾走する位の意氣込みで、一分をも無駄にすまいと勵まなければならぬ。この意氣込は若い人達だけが抱き得るところのものであり又實際にその功を擧げ得られるものでもある。

2、時は金よりも貴し

＝村山咸一郎＝

天文學者の說く處によれば、大陽は年々冷却收縮すると云ふことであります。この話を聞いたものは誰しも心細い類付をします。又地質學の示す處によれば、石炭や石油は其の量に限りがあるので、それが無くなつたら後はどうなるであらうかと心配するものがあります。

然し、これ等は現在生活して居る私達には關係がない先きの先きの事に屬します。でも矢張り氣懸りでありますが、これにも增してうつかりされないのは私達の生命でありまして、若い時代は實に一瞬間であります。支那の朱文公と云ふ學者の詩に、

青年易老學難成　一寸光陰不可輕
未覺池塘春草夢　階前梧葉既秋聲

と云ふのがあります。これは青年老い易く學成り難し、一寸の光陰輕んずべからず。未だ覺めず池塘春草の夢、階前の梧葉既に秋聲。と讀みまして、私達は安閑として居られぬことを諭されてゐるのでございます。實に若い時代は春のやうなもので新綠の如く生々として居りますが、何日の間にか年老いて秋の木の葉の凋落するやうになるのであります。私達は刻一刻の貴きを考へて、無駄の時間を費さない樣に、ボンヤリ時間を送らない樣に注意せねばなりません。私達が一日の事柄を反省して見ましたら、無駄の時間の多いのには驚くでありませう。

第二勞力の不經濟をせない樣に心掛けねばなりません。折角爲た仕事も無駄な事は何にもならず、エネルギー即ち精力の損耗となると同時に時間の不經濟ともなります。

又學生としては差當りどんなことに注意すればよろしいかと申しますれば、第一に教室内に於ける時間の經濟を努めなければなりません。授業上に上の空で聞いたり、外の事を考へて居たり、私語をしたり、居睡りをしたりして居つてはなりません。なるべく緊張して業を受けて居れば、時間に於ても多い事を收得するのであります。

第二には家庭に於ても時間の經濟を謀らねばなりません。豫習をするにも復習をするにも緊張して熱心にやれば短い時間に仕舞ふことができます。その餘りの時間で運動したり家事の手傳をしたりすれば眞に時間の節約ができます。

第三に仕事の順序を定めておかねばなりません。仕事片手に考へる樣な事をせず、豫め順序を定めておいて、一旦着手したら敏活に仕遂げねばなりません。自らの使用する器物自らの所有する物品を整理しておくこと、仕事の最中に探し廻るやうなことがなくて時間の節約ができます。

第四は、時間の利用をする事を心掛けねばなりません。人を待ち合せたり汽車を待つ間等に何かを讀むとか、歩行して行く途中、慢然と行き過ぎない樣に、よくすべての事物を觀察する等は利用することになります。

第五に他人に時間を空費させない樣に氣をつけなければなりません。それには人と約束した時刻を堅く守る事や人を訪問したときは無用な長話をせないことなどは大切であります。

世間には「時は金なり」「時は金よりも貴し」など言ひもし、聞いても居りながら、矢張り時間を不經濟に費すものが多いのであります。又僅か　分か十分の零細な時間を勉强しても甲斐はないと言つて無駄に何事もせないで過すものがありますが、そんな人はそれだけ自分の生命を削り捨てる樣なものであります。如何に少くても度重ればやがて多くの時間となるのであります。伊太利のローラ女史は家政の傍、僅少の時間を利用して高尙なる學問を修むること三十八年、後には博識の名高く、大學の講師とまでなつたと云ふことであります。フランクリン氏が言つた語に「汝生命を愛するか、さらば時間を徒勞することなかれ、汝の生命は汝の時間より成ればなり」と誠に至言と言はねばなりません。又廣瀨淡窓自叙錄に「書を看る一日二十葉、十年積んで七萬二千葉を得べし、文を作る一日百言、十年積んで三十六萬言を得べし。詩を作日兩日一首、十年積んで千八百首を得べし、東坡曰く徐々として之を爲す、十年の後何事か立たざると、眞に格言なり。」とありますが、よく玩味すべき名言であ

ります。

さて時間を空費するなと申しましても、決して遊んではならない。休んではならないと言ふ譯ではありません。遊戯、休息は決して空費では有りません。身心を爽かにし、疲勞を醫する爲めには必要であります。作業能率の增進は實に適度の休息遊戯を中間に挾んで元氣の回復を謀ることが大切であります。今申しました能率と云ふ語は、一定の時間内に仕事の結果を出來るだけ有効に發揮する割合を云ふのであります。テーラー氏と云ふ人の研究によりますれば、塊鐵の運搬に休息五割七分、勞働四割九分とした場合に、續けて働いた時よりも能率を四倍以上に增進したと言ふことであります。然るに如何に休息が有効であると言つても、餘り休み過ぎてもよくない結果を持ち來たすもので、或工場で三組に分ち、一時間半の仕事をさせるに、十分間休息させる組と、二十分間休ませる組とにしたところが、五分間休む組が一番仕事の能率を擧げたと云ふことで、五分間の休は疲勞の六十パーセントを恢復するが、十分以休上めば作業の惰力を失ひ却つて能率が下ることが分つたさうであります。

又獨逸の地理學者ペンクは五分、十分の休息時間にも吶聲を出して眠るがよろしい、休の間に頭を使ふはよくないと言つて居ります。

勉强は要するに努力すればできますが、この努力は思慮の加えられた眞正の努力でなければならない事は勿論であります。例へば机に對して只長時間机にかぢりついてゐるばかりでは、眞正の努力ではありません。よく車中で教科書を開いて見てゐる人がありますが、あれは視神經を勞して近視となることで、ほんとうの勉强にはなりません。

淡窓先生は「心に無用の望を思はず、口に無用の言を吐かず、身に無用の事を無さず、生を養ひ業を勤むる皆此を以て要と爲すと言はれてゐます。

以上の事をあなた方學生の身にあてはめて實行するには、

一、日課表を定めて、なるべく豫定通り勉强を遂行すること。

二、一日中の勉强時間を略一定すること。

三、勉强にかゝつて居る間は專念すること。

四、勉强の委勢に十分注意すること

など必要であります。

墺國ウイン大學ヴイクター、ホーヘルト教授の調べた所によりますれば、假りに七十二年生きたとして、二十三ケ年睡眠に要し、十九年は勤勞し、九ケ年は運動娛樂に要し、六ケ年は食事に、五ケ年は旅行、四ケ年は病氣、一ケ年は衣服の取換や化粧にかゝる割合で結局ねて暮す時間が人生の三分の一で働く時間は僅かに四分の一にすぎない人生五十とすれば、勤勞するのは僅かに十二年に過ぎないことゝなります。私達はなるべく規律正しく生活をして時間を尊重したいものであります。

六月十日は今より千二百五十六年前に天智天皇が漏刻即ち水時計を用ひ給ひ、初めて報時のことを行はせられた日であります。生活改善同盟ではこの由緒ある日を時の記念日と定めて大正九年以來、年々奉告祭其他の事を行ひ、專ら時間尊重、定時勵行の美風を奬勵して居ります。

本校に於ても毎年この日を記念する行事をつゞけて居ります。＝後略＝

第七章　時の記念日

第二、兒童の感想

1、前週の反省

＝平岡公子＝

六月十日より一週間、時間尊重週間であつた。私等の學級の自治會で次の事を協議決定した。

起床五時半、就寢九時であつた。

その時私は決心した。明日からは五時頃に起き庭をはいたりお飯をたいたりして母を喜ばさうと思つた。

始めての日は、豫定の通りできた。朝早く起きて庭をはいたり炊事をしたり用事をしたが、日が過ぎるに從つて、時間尊重の念が次第に薄らいでしまつて、朝寢をしたり用事をせなかつたりなまける事も尠くなかつた。

私は、その時、時間尊重週間といふ事を唯その時だけに、時間を大切にするのではなく、毎日續けなければならぬと思つた。

私の前週の樣に、唯始の日だけして、少したつと忘れてしまふ樣な弱い心掛を持つてはならぬと反省した。

2、時間尊重週間

＝香川富貴子＝

六月十一日から一週間まで時間尊重週間でありました。私は、皆が自治會で申合せた通り、朝は五時に起き夜は九時に寢ました。

朝は、讀方の書取を一課づゝ書いて先生に見ていただく事になつて居りました。それは私の組の申合せでした。

私は、家へ歸つては時間をむだにせずに何でもいひつけられた仕事は、せつせと立働きましたので、私がこれだけをきめた時間よりも、いつも三四分早く出來て居りましたから、いつもかうゆう時には、きつと誰れかに賞められました。

時間尊重週間後も何も時間を大切にしたいと思ひます。

3、阿波時間

＝小綿喜美榮＝

昔から「阿波時間」、「阿波時間」と言つて、傳つて來たこの阿波の國、今日は宴會午後八時開會と言つても八時半九時にもなつて漸く始まる位である。

此惡い習慣例をあぐれば、言ひ知れぬ程澤山ある。

約束を守らぬ事、時間を無駄にする事は言うまでもなく惡い事である。

十日より十六日までの時間尊重週間に、遲刻早退せぬ事の勵行ができた事はよい事である。

私達は之から後が大切である。せつかく努力した此の一週間の氣持を忘れず、時間尊重週間に努力した氣持をいつ迄も保持して、世の中に云はれてゐる「阿波時間」「阿波時間」と傳つて來た阿波の不名譽を一日も早く取消す事に努力しなければならぬ。

標語　阿波時間みんなで努めて消しませう

第三、實施指導資料

1、天智天皇報告祭

天智天皇の御陵は山科陵と申しまして、現に京都府宇治郡山科村大字山陵にあります。

高さ三十四尺廣さ四十六間四方であります。古は兆域が十四町四方もありまして、陵戸が六尺つけてありました。

今は陵墓守長陵墓守都をおいてあります。

滋賀縣滋賀郡膳所町の石坐神社及同縣野洲河西村の皇小津神社は天智天皇を奉祀する御宮である。

毎年六月十日の記念日には右御陵と御壯で報告祭が行はれます。

2、鐘鼓汽笛の鳴し方

時の記念日に於ては正午を期し寺院工場等で鐘鼓汽笛を鳴らす事になつて居るが其方法は左の通りである。

鐘鼓は正午三分前より豫報(鐘は捨鐘三點、太鼓は適宜)し、正午に至りて鳴らし始め、十二點を打つ。

汽笛の類は正午三分前より鳴らし始め正午に終る。

3、時に關する改善事項

生活改善同盟會で調査改定した改善事項中時間尊重定時勵行に關するものは左の如くである。

訪問客送迎に關する事項

○訪問は早朝食の前出勤前就寢時等他人の迷惑する時刻を避けるようにしたい。公休日はなるべく之を避けるがよい。

○面會の定めなき人の訪問は豫め電話郵便等にて時間の打合を行ふようにしたい。

○面會時間はなるべく、之を定める樣にして之を定めた場合に出來るだけ之を知らしめるような方法を講ぜられたい。

○簡單な用件は玄關先の立話で濟ます樣にしたい。但し此場合には外套手袋等は脱ぐに及ばぬこと。

○用事の訪問は挨拶よりも用件を主とし、なるべく速に切りあげるようにしたい。

○來客は待たせぬやうにし、且つ接待を簡略にし、用談の報告はなるべくこれを速かに濟ます樣にしたい。

○停車場の見送りは近親者に限る樣したい。

公衆作法に關する事項

○集會の時刻は多數者の都合を考へて、開會の時刻に掛値をせず、且つ時刻に遲れぬこと。

寢食及執務に關する事項

○寢起の時間を正しくし之を勵行すること。

○食事の時間を定め之を勵行すること。

○日々一定の修養運動の時間を定めおくこと。

○出勤及退出の時間を勵行すること。

○勤務と休息の時を區別し時間を空費せぬこと。

○取引約束の期限を違へぬこと。

時計所有者の心得

一、時間を尊重し定時を勵行せんと欲せば先づ以て正確な時計を所持しなければならぬ。時計は人類に取つて最も有益なる發明品の一つである。

而して之を正しき方法によりて取扱ふことは最も肝要である。時計は一の機械であるが、天然自然の法則に依りて始めて充分に動くことを忘却してはならぬ。

二、時計機械に寶石を用ひて製造する理由は、樞軸に起る摩擦を防禦する爲めである。

又整齊を一段毎に施す理由は、氣候寒暖並に位置等により生ずる變動の結果に打勝つ爲である。

三、時計の選擇に際しては、機械の堅牢、精確を主とし、外形裝飾は從とすべきである。

隨て銀側でもニツケル側でも構ひません。若し偖り輕き時計側を用ひて機械の運動が完全無缺ならん事を期す

る事も亦到底不可能の事であります。綿密に注意して製造された時計側は鹿埃は勿論凡ての外部よりの破損を防禦する。

四、正確に時を指示し常に誤りなく機械が動く時計を求めんとせば、信用ある確かな時計店において之を買ひ求めるがよい。

五、時計は一定した時間に於て捲くべし、夜間に捲くより朝卷く方がよろしい、其の理由は、日中に時計が携帶せらるゝに當り、發條よりの全動力を充分に傳播せしむる事ができるからである。

六、鎖は單に時計を安全に携帶する効があるのみならず、他にも有益なる効用がある。ポケットの内に入れて携帶せらるゝに當り、時計を絶えず直立の位置を保つことができるから、一定不變の速度によりて、時計機械が動き得るからである。

七、若し時計が歪うことがあつたら之を自分で直さんと試むべからず、充分に經驗ある時計師に一任するが最善の策である。障碍が起つた原因を明かにせざれば之を正確に修理することも出來ざる事を記憶せられよ。總て時計は單に緩急針を動かすことのみで正しく時を整齊し得られるものでない。

八、掛時計や時辰儀も時計の如く屢々歪を起すものである。されば自分の所持してゐる時計が誤りなく時を報じつゝあるや否を見出すには他に正確な時計の報ずる時と自分の時計が指示する時とを比較するに非ざれば決して正確に之を見出し得るものではない。

九、時計機械の一部に破損の箇所を發見するときは、必ず眞正の材料を以て完全なる修理を時計師に依頼すべし決して手細工品又は模擬品を以て一時的に修理せざる事は堅牢正確なる時計機械の實質を破壞し其の壽命をも自然に短縮するものである。

一〇、時計機械に注油する時計油の有効期間は凡そ十八ヶ月を限度として有る。少くとも一ヶ年一回位は油さしと機械の分解掃除とを怠つてはならぬ。‖徳島縣社會課‖

第四、文に表れた資料

1、時間節重　‖小西重直‖

一、考へて見ると、人の命は僅か五十年、宇宙の宏大、永遠なのに比べると、非常にはかないものである。この點から言へば、時ほど早く消え去るものはない。かげろふと言ふ虫は朝生れて夕べに死ぬものである。これに比べると人の一生は五十年であるから、一、八二五〇日もあつて非常に永い感じがする。見方によつては中々長いゆつくりした感じもするが、また見方によれば光陰は矢の如く、早く消失する。

二、時は一度過去ると再び繰り返すことが出來ない。金錢は大切であるが、一度失つても、再び之をまうけることは必ずも不可能ではない。寶玉珍品も再び買求めることが出來ないわけではない。しかし時は決して再び來ない。滿十四歳の青春期は我々の一生に再び有るわけはない。

今日の一日が暮れると生命が一日減じたわけである。金錢は再び得ることもできるから、時は金錢以上に貴いものである。いかなる人も自分の生命を金で賣る人はない。

生命の一部たる時は金錢以上に貴いわけである。だから一寸の光陰も輕ずる事ができないのである。

昔支那に禹といふ聖人があつた。禹は聖人であるけれども寸陰をも惜しんで國のために働いた。　凡夫はまさに分陰を惜しまなければなるまいと言つた人がある。時は寸・分と計るものでないから、寸陰も分陰も共に

僅かな時を指すのであるが、大禹さへ僅かの時を惜んでゐた。我々はこれ以上、時を大切にしなければならぬといふ意味であらう。

昔加賀に有名な茶人があつた。江戸へ行く道中も茶道具を離さず、道々の宿屋々々でも茶を立てゝゐた。人があつて「いかに茶がすきでも、あまり甚だしいではないか」と言つたら、その茶人は「この旅が一生の外ならば茶をやめてもよろしいが、一生の内だから僅かの暇も惜しいのでさ」と答へたといふ。

二、「善は急げ」といふ諺がある。妄りに目的や仕事を轉換することはよくないけれども、よく思案を廻らして、今行つてゐる事今定めてゐる目的より、眞にかつ遙かに良い仕事、目的であるならば、いさぎよく今の仕事を棄てゝ目的を改めて善い方へ向ふのがよい。一日の中、一時の中でも多くの事が起る時、その中で、少しでも勝れた事を選んで、これに努力を集注しその外の事を打捨てて大事な事を急ぐべきである。どれもこれも捨てまいと思へば一事も成効しないであらう。たとへば、東京にゐる人が品川へ用事があつて假りに行きついても板橋の方の用事が更に必要だと思へば、すぐ引返して板橋へ行くべきである。こゝまで來たから先づ品川の用事をすまして、次に板橋へ行かうなど思つてゐると、結局一生は雜用に蔽はれてしまふ。一時の油斷は一生の怠りである。學者になり、或は政治家にならうと志してゐながら、成功せずして一生を無爲に終るのは、心にかけながらのんきに怠り、先ずさしあたつた事にのみまぎれて日を送るから、結局目的を達せずに終る。後悔しても取返しうる命でないから、走つて坂を下る車輪のやうに老い衰へる。或目的を達しようとすればわき目もふらす、その方へと進まなければならぬ。

鎌倉時代の話である。京都で或數人が集まつての話の席に「薄にますほの薄、まそほの薄といふ區別がある。渡邊(今の大阪市)の聖がこの事を傳へ知つてゐるさうだ」と或一人が言つた。登蓮といふ法師が、その場にゐたが、折ふし雨が降つてゐるのに「簑笠がありますか、貸して下さい。薄の事を習ひに渡邊へ行かう」と言つた。「あまり忙しすぎるせめて雨が止んでからにしたら」と人が止めたが、「人の命は雨の晴間を待つものですか。我れも死に、聖も死なれたら、尋ねることが出來ないから急ぐのです」と言つて、走つて習ひに行つたといふ。

2、三人の時計

甲、乙、丙の三人が或所へ行かうと思つて、その時間を相談しました。

甲「一時半の汽車にしよう」と甲がいひました。

乙「よろしい。しかし今は何時だらう」と乙がいひました。

丙「一時十分前だ」と自分の時計を出して見て、丙がいひました。

乙「君の時計は合つてゐるのか」と乙が聞きました。

丙「あゝ、僕の時計は正しいドンに合はせたのだから」と丙が答へました。

甲「いつ合はせたのだ」と甲が聞きました。

丙「三日前だ」と丙が答へました。

乙「それでも君の時計が後れる質なら、君の時計はもっ正しくはないだらう」と乙がいひました。

丙「そんな事はない、僕は僕の時計を信ずる」

丙は又きつぱりかう答へたあとで、甲に聞きました。

丙「君の時計は何時だ」

甲「一時十分過だ」

丙「隨分進んでゐるね」と丙が笑ひました。

甲「あゝ、僕の時計はあてにならない」と甲がいひました。

乙「それでも君は君の時計をいつドンに合はせたのだ」と乙が甲に聞きました。

甲「きのふだ」と甲が答へました。

乙「きのふ、そんなら二三日前にドンに合はせた丙の時計よりはあてになるかも知れないぢやないか」

甲「うん、しかし僕には僕の時計は信ぜれない。なんだか違つてゐさうな氣がする」と甲が俯いて答へました。

丙「そんなあてにならない時計を持つてゐても、仕方がないぢやないか」と丙が罵つていひました。

甲「君のが合つてゐるなら、君の時計に合はせよう」甲はかういつて、自分の時計を丙の時計に合はせました。

丙「君の時計は何時だ」丙は又乙に聞きました。

乙「かつきり一時だ」

「いつドンに合はせたのだ」

「をとゝひだ」と答へました。

丙「ばやり進む質だね」

乙「いいや、僕の時計はどちらかといふと、少し後れる質なのだ、だから多分今は一時五分過ぐらゐだらう」と乙がいひました。

丙「そんなことがあるものか。それは違つてゐるよ」と丙が笑つていひました。

乙「うん、少しは違つてゐるかも知れない、しかし大した違はないはずだ、ここから停車場までは、どのくらゐかゝるだらう」

丙「二十分あれば十分だ、だからまだゆつくりしてゐていい」と丙がいひました。

乙「しかし今が一時五分過とすれば、あと二十分しかないのだから僕は一足先に出かけるよ。停車場でいづれ會はう」

乙はかういつて出て行きました。

丙甲「氣の早い奴だ」

丙と甲はかういつて笑ひました。

しかしそれから暫くたつて、甲と丙が停車場へ行つた時、乙は二人にいひました。

「汽車はもう出てしまつた。僕は間に合つたのだが、君たちを待つてゐたのだ」

甲と丙は驚いて顏を見合はせました。

「それでは僕の時計は違つてゐたのかな」と丙が顏を赤くしていひました。

「さうだ。君の時計は二十分後れてゐたのだ僕の時計は十分後れてゐた。甲の時計が合つてゐたのだ」

甲「さうかなあ」と甲がぼんやりしていひました。

「して見ると、君が一番利口だつたわけだね」

「さうだ。自分を知つてゐるものが一番利口だ。時計は信ずる爲に在るものだ。信じなければ、それは何の役

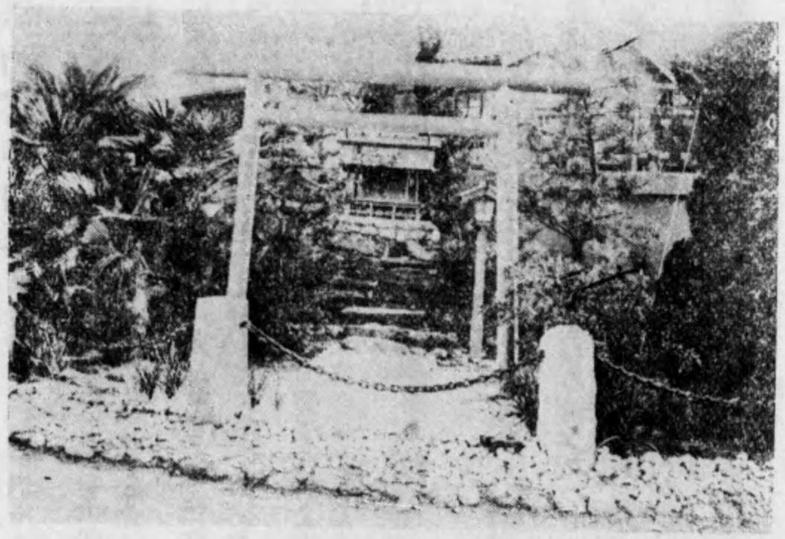
にも立ちばしない。間違つた時計を持つてゐて、それを信ずるのはもとより惡いが、又どんな正しい時計を持つてゐても、それを信じなければ間違つた時計を持つてゐると同じことだ。又何も持たないと同じことだ。間違つた時計を信ずるものも、正しい時計を信じないものも、ともに汽車に乘ることが出來ない。それは兩方ともばかであるからだ。自分を知つて信ずべきものを信ずるものだけ　汽車に乘ることが出來るのだ」

乙ばかういひました。‖長與善郎の文による‖

第八章

伊勢神宮崇敬會

【六月十七日】



……學校前庭の伊勢神宮遙拜所……

第一節　伊勢神宮の由來

伊勢神宮は改めて說明するまでもなくない事であるが、順序としてその大要を記せば、同神宮は伊勢の國度會郡宇治山田市に鎭まりまします宮である。

その宮殿は二ヶ所にあつて、一を皇太神宮、一を豐受大神宮と申し奉る。皇太神宮はまた內宮とも稱し奉り宇治の鄕五鈴川の川上にあつて、天照大神を奉祀したる宮である。

豐受大神宮はまた外宮とも稱し奉り、沼木の鄕山田原にあつて豐受大神を奉祀したる宮である。この二た宮を併せて伊勢神宮と稱え奉るのである。

皇太神宮の御神體は、大神の嘗て天岩窟に幽り給ひしとき思兼命の發議によりて石凝姥神に命じて鑄させ給える八咫鏡を奉安せしめ給うものである。

崇神天皇六年皇女豐鍬入姫の命に命じて始めて之を大和笠縫村に移し奉り、後、垂仁天皇の三十五年皇女倭姫命に命じて宇治五十鈴川の上流今の地に創始せしめ給うたのである。

本宮は言うまでもなく皇室の大祖になるを以て皇室の御尊崇は言うも更なり我々臣民も一生に一度は必ず參拜するを常とす。

本殿は二十年毎に替造して上古の風をそのまゝに存ずる事となつている。

本宮の祭典は、六月十七日、九月十七日、十二月十七日の三節祭であつて尤も嚴重に行わせ給う。

第二節　施設指導の着眼點

昔から伊勢參りと稱して、一生に一度は必ず參拜することや、何處の家でも神棚を設けて大麻を奉祀し、朝夕敬虔感謝の念を捧げている事は言うまでもない。こは到底外國に於て見られぬうるわしい點である。

しかし、之を教育的に考察するなれば、果して、その實生活上本質的自覺的のものであるか否かはいまだ遺憾のないものとは言えないであろう。

皇室と神宮との關係、臣民との關係、國體の尊嚴、建國の精神、等を充分に理解し、眞に敬虔、感恩、報謝の念の奧底より表現されたるものでありたいものである事は言うまでもない。

本格的のものに達するまでには傳統的のまゝでは免されない。

教育施設としては、一面に於て充分なる理解を促進する事が先づ第一である。次は崇敬の情操を喚起觸發する事である。

進みては、單に理解し情發するのみならず、之を本質的に表現するの方法と習慣とを養わねばならぬ。

我國はあくまで皇室中心の國である。そこに今日の如き我國の發展興隆がある譯である。之が施設指導にあたつてはこの精神を充分に領會せしめ、進んでは神道に歸依するその本格的な信仰精神を

掌握せしめなければならない。

第三節　施設指導の計畫

第一　早天遙拜

早朝學校に集合し伊勢神宮を遙拜する。

遙拜所はなるべく高所であつて、前面何等の障害物がなく、遠く地平線を望む事のできる場所がよい。

地方にもよるが日の出を見る事のできる地方は、そうした位置が尤もよい。勿論往復の時間とも考え合して、出來うるだけ教育的に直觀的印象的の場所を選定するがよい。

遙拜の時刻は、旭日を拜むことの出來る場所は、日の出の時刻を選ぶがよい。旭日の光を透して伊勢神宮を拜するとき、兒童の頭腦に印象される宗教の念は一層深きを覺える。

かゝる催の際は、是非鄕土の青年團、女子青年團其他一般有志の參加を求めるがよい。教育は其處まで及ばさなければならぬ。

既に小學校に在學中に斯る場合には喜んで學校の行事に參加する樣指導しておかねばならぬ。また反對に、青年團、女子青年團等に何等かの催しがある際には、つとめて兒童をして參加せしめるがよい。從來の如く學科萬能の教育は何時まで經つても鄕土人をつくる所以ではない。同樣に昭和の日本人をつくる所以ではない。

第二　默禱

神に歸依する事は、神の遺志を實現すると言う事に外ならない。だから絶對的のものである。自己以上に超越したものであり、自己以上に超越することでもある。何等の疑惑も何等の祈願も何等の慾求もなきものであつて、全く自己を無にする事である。

自己を無にすると言うても自己を墮落せしめるの謂ではない。全く自己を無にして神に融合するの謂である。自己を無にし自己を神に融合するとき既に敬神であり、信仰であり、人格の向上であり、神の救援であるのである。

之が實現の一方法は默禱にしくものはない。默禱は自己の全心靈を絶對歸依の姿においた象である。けれども精神の伴わない處の默禱は何等の價値を持たない。

その象の根本に於てその精神の啓培を努力すると言う指導施設が大切である。

しかしまた、一面に於て、そうした形象行爲によつて本格的な精神が促進啓培されてゆく事も事實である。

教育的施設としては心形兩面の相關的な指導によつて、默禱の本質を味得せしめて、通俗的な信心と言う樣な自利的の念願を漸次改進してゆきたいものである。

瞑目して一切の雜念を去り、呼吸の整調、心身の安靜、無我の幽境に安住すると言うことは中々

訓練を要するものである。他の施設の協援を求めることもまた大切な事である。

小學校時代からこうした鍛練をしておくことは、今後の國民をつくる上に極めて大切なことである。

第三　敬神式執行

敬虔心崇敬心感謝心の養成は、その施設もまた、できるだけ敬虔的崇敬的なものでありたい。兒童が歡喜に滿ちて、手の舞い足のふむ處を知らなかつたり、勇躍自ら机を擊つて扼腕するとか、感窮まつて號泣袖をぬらすとか、言つた樣な態の啓培指導であつてはならぬ。

何處までも兒童をして襟を正しつゝましい態度となり、吾知らず跪き額き、いつとはなく一切の雜念は雲散し曲れる心はいつの間にか直き姿となつて來る處の施設指導でなければならぬ。

されば當日はなるべく崇嚴なる儀式を行うがよい。

そのためには、矢張神官を招聘して簡單なる祭典を行い、またなるべく神官に一場の講話を願う方がよい。既にもたび〳〵述べて來た樣に、印象を深め感激を强めるためには、時々教師以外にこうした方々の講和を願う事がよい。而して講語は聞き流しをせず、その後に於て、それについての淨書を求め、又は所感を求め、夫等を題目として綴方を爲さしめる等、適當の方法によつて徹底を期する事が大切である。

場所は、講堂でもよい。しかし、次に述べる處の神宮奉祀所又は神宮遙拜所皇陵遙拜所等の場所があれば其處が尤も適當である。

第四　神宮遙拜所の創設

各學級を一戸の家として國旗の揭揚をなすことの適當なる事は既に述べた處である。この意味に於て各學級の清淨なる箇所に神棚を設け神殿をしつらえて大麻を拜受して崇敬することがよい。

また學校の校地の清淨な處に神宮の遙拜所又は神宮奉祀所を設けて常に兒童をして奉贊崇敬せしめるがよい。而して之が創設は何等かの記念事業として兒童の實行したものならば猶更よい。

德島高等小學校々庭に創設されたものは、高等二學年自治會の事業として校門に隣つた清淨の地に創設されたもので、前揭寫眞の通りである。構造は神殿古式を擬したもので、土臺はすべて兒童の奉仕作業によつたものである。神殿には毎年奉拜する處の大麻を收めてある。毎朝毎夕學校の昇降に際して、その遙拜所を透して默禱が實行されている。＝創設には管理者、監督廳の諾許を要する＝

神宮敬神式はかゝる處で行う事が尤も適している。

未設の學校に於ては、當日の記念事業として創設されるならば猶更意義が深い。

第五　伊勢神宮代參

卒業記念として伊勢神宮參拜旅行は到る處に企てられている、誠に卒業記念として相應しいものである。

之が計畫にあたつては、單に卒業記念と言うことにして、その意味を目的とする事は、あながち惡い事ではないが、今少し教育的意味を持たせるがよい。それは卒業生が全生徒の代表となつて參拜する組織にしておくがよい。市町村の補助もその意味に於て支出するのがよい。

この計劃によれば、卒業間際に修學旅行するよりも、矢張り少々氣候から言えば、都合惡いが六月十七日前後に參拜する事が大に意義がある。九月十七日は氣候は大分よくなるが、運動會の計畫等がある學校が尠くない。

何れにしても學校の事情に應じて、大祭を中心にする日時を選定するがよい。

出發前に講話を爲し代參の趣旨を明にし、殘留生より代表を依頼し猶無事歸校を祈る送別の辭をのべ、代參者は、代參の任務を全うすること及留守中の萬事を依托する旨を述べる。當日は村境或は停車場まで見送りを爲し袂別する。

歸校に際しては、見送り同樣出迎を爲し報告式を爲し、代參の狀況、途中の新事實、感想等を述べ殘留生より感謝の辭を述べる等、常に學校を一大家庭として、社會人を造る組織施設とし、一方神宮參拜旅行をして、一層有意義にしたいものである。

高學年生が如何なる目的で、何れの地方へ、如何なる順路と日數を費して、何日出發したか、何日歸るかも知らぬ樣な從來の社會人教育を無視した教育では、從來の美風の學國一致の精神も次第に薄らいでしまふ譯である。

第四節　施設指導の實際例

第一　神宮遙拜式

一、目的　皇室が如何に伊勢神宮を御尊崇遊ばされているか、我國體が如何に尊嚴であるかを理解せしめ、同時に臣民の關係を領會せしめ、一方に於ては神に歸依する處の本格的方法を體得せしめんとするにある。

二、方法

(一)神宮遙拜

1、午前五時學校集合

2、眉山登山(皇陵遙拜所)

3、遙拜式擧行

(1)　敬禮

(2)　唱歌　君が代

(3)　伊勢神宮遙拜(最敬禮)

(4)　默禱(瞑目、無想、無我)三分間

(5)　誓詞(代表者)

6) 講　話（十分間）
(7) 敬　禮
4、眉山下山
5、敬神式擧行
(1) 時間　午前八時より
(2 場所　神宮遙拜所
(3) 兒童　全　員
(4) 神官職員兒童參列
イ、敬　禮　ロ、修　祓　ハ、降　神
ニ、供　饌　ホ、祝　詞　ヘ、敬神の辭、校長、兒童代表
ト、玉串奉奠　チ、講　話（神官）　リ、昇　降
ヌ、撤　饌　ル、敬　禮　ヲ、退　場

第二　神社中心の日本教育の實際

校庭に皇大神宮奉齋

＝德島縣市場尋常高等小學校＝

一、奉齋式概況　日本教育の雄々しい誕生に敎兒一體專念しつゝある德島縣阿波郡市場小學校にては、昭和五年度卒業生の自發的決議により、日の神としての皇祖天照大神を奉齋すべく出資し、本町在住の特志請負業者吉田氏の犧牲的奉仕により、講堂横國旗揭揚塔下に立派な奉齋殿建設の工なり、四月十五日午前十時より之が奉齋式を嚴肅に擧行した。

浦上神宮の修祓に始り神事型の如く進行し富澤校長の

一千二百の敎へ兒に幸多く、敎育の進展、本町の發展、皇威の隆昌を永久に祈り、今日以後神の御敎に從ひ、善美な日本人となることを御誓ひ致します。

の祭辭に來賓一同參拜、それより校長・兒童總代・松永收入役・近藤町議・大石巡査部長・神職の順に玉串の奉呈あり。坂東訓導の工事報告、富澤校長の誨告、撤饌と春麗かな校庭に古風ゆかしい神事が營まれ、全校兒童に對し精神敎育の尊いアルモノが感受された。

當日は警察・役場・校醫・請負師・其他町會議員多數參列實に有意義な敎育行事で、今後同校が神社を中心として今より以上、日本敎育の歩みに精進されることを一般に喜ばれてゐる。

二、奉齋の目的　時代の風潮は國家觀念を一層深刻化すべく要求されてゐるにかゝはらず、我校に皇祖天照大神の奉齋殿なきは、御眞影奉安庫があり、國旗揭揚塔の出來た今日最も遺憾とする處である。我ら卒業生一同は母校への報恩感謝の印として皇大神宮奉齋殿を建設したいのである。

とは五年度卒業生自治會の聯合決議であつた。そして尋六・高二女・高三・補習科生の出資金に職員及地方特志家坂東・松永兩氏の寄附金を合して七拾圓、こゝに人造石二重臺の社殿に廻らせる人造玉垣、正門には皇威隆昌・敎育進展の金文字が奉齋の目的を如實に表示してゐる。

我等は神に對しては宮本武藏の言葉神を敬して神に賴らず
を信ずる者である。神宮奉齋も期する目的は、
1、皇祖の御盛德を稱へたい。
2、神社奉仕の精神を涵養したい。
3、信仰敬虔の念を啓發したい。
4、我國體の理解につとめたい。
5、日本人として强く活かしたい。
と定め大に之が實行につとめたいと思つてゐるが、要は神の心を心として國家に奉仕する善美な日本人が一人でも多く作りたいのである。

三、奉仕計畫

イ、奉仕精神　中心より神を敬し自然の發露として善良な慣習を作り、神に恥ぢざる足跡を認め行ずるの心の養成。

ロ、奉仕行事

a、毎日―毎朝―毎夕の禮拜　兒童、生徒、職員の登校退校の際禮拜

b、毎週月曜日の禮拜　次の如き行事のもとに一同禮拜

(1) 國旗揭揚　君が代合唱

(2) 神宮禮拜　誓詞と奉齋歌合唱

(3) 御眞影禮拜

(4) 勅語奉讀

c、毎月の禮拜　一日と十五日には特に毎月祭として誓詞を述べ奉齋歌を合唱し神に對する訓話をなす。

d、春と秋の學校祭　四月十五日奉齋記念日　十月十四日秋季學校祭　此春秋二回の學校祭には、お話會、展覽會、競技會、音樂會等を神事として行ひ農業實習の穀菜の献饌をなす。

ハ、奉仕訓練

a、神社訓話　皇大神宮を中心とし神に對す觀念、敬神思想の普及、我神國の歷史及び兒童の神に對する生活につき適當に訓話す。

b、誓詞の貫徹　私たちは神の御敎に從ひ益々立派な日本人となることに努めます。

c、奉齋歌の實踐

1、學びの庭に齋きます　皇祖の神のみ敎を
とはに守りて仕へまし　我らは强く生ひ立たん。

2、神威四海に輝きて　學びの窓に光あり
我皇國の御榮えを　我らは共に祈らなん。

d、美化作業　當番を設けず自發的に美化奉仕に從事せしむる奉仕精神の喚起につとめたい。

四、奉齋後の影響

イ、兒童文に表れた皇大神宮

皇大神宮を奉齋して　高一　松永爲子

私達昭和五年度卒業生の記念、それは校庭の職員室前にお祭してある皇大神宮であります。我國は神國であるにもかゝはらず、神を敬ふ心が次第に乏しくなつて來たので、高等三年生が自治會に問題を提出し皇大神宮の奉齋を圖りました。私達は何で不賛成がありませう。皆喜んで出金を約しました。そして私達は拾錢以上、高等科補習生は二拾錢以上ときめて直に校長先生に申出ました。校長先生も大そうお喜びになつていろ〳〵と設計し、コンクリートの立派な皇大神宮が出來上りました。

奉齋式の當日は神官二人と來賓がたくさんおみえになつて、最も嚴に順序正しく終りました。

毎週月曜日と毎月十五日、一日の月祭には、神宮を祭る歌を歌ひ、兒童長が皇大神宮の前にいつて恭しく

「私達は神の御教に從ひ益々立派な日本人となることに努めます」

の誓詞を述べます。

私達は神々しい皇大神宮の前で、一生懸命に勉強や運動が出來ることを幸福に思ひます。そしてなまけたり、いたずらをするやうな心がしても、すぐ皇大神宮にはずかしいやうな感じがします。私たちはかうして皇大神宮に恥ぢないりつぱな日本人となつて、我校の發展をはかるといふ望みをいだいて進まなければなりません。之が私達國民の務であります。

いたずらをする子供達を訓誡するのも神樣にといつた調子で、神前訓戒も加へて其効のあがることを喜びます。

自治會の前には決議の實行を神に誓ふため團體で拜禮してゐます。之も大に効果ある成績を感じてゐます。

父兄母姉も學校に來たら必ず禮拜して共に神宮に對する奉仕の念を厚くしてゐます。

かうして我皇大神宮の教育が昭和の現代、否無窮の我國に建國と其發展に根源して愈々新日本の行進が根强く運ばれることを喜ぶのである。

第五節　施設指導上の注意

一、敬神の念は、既に述べた如く、衷心より溢れ出でたる誠意至順の至情から、國民的祖先である。皇祖皇宗を敬い、忠良賢哲の路を慕い、祖先の宏業懿德を頌し、之を繼承して、更に大成を期せんとする精神の實現であるが故に、形式よりもその心情を尊ぶべきである。

故に精神の發現が形式となつて表われ形式的の施設によつて、より精神の成長を圖る樣しなければならぬ。

二、皇室の御敬神について、充分知悉せしめ、我等臣民にその範を示し給える事を憶い、臣民とし

て此點に感激して、一層敬神の實を擧げる事が必要である。

三、宗教としての神社も、道德としての神社とが混同され易い。學校としては、その施設の上に指導の上に留意するばかりでなしに、よくその根本精神を體得せしめる事が肝要である。

四、陶冶である以上、教師は特に神社に對して、濃厚な而かも正しい信念と敬虔の念がなければならぬ。これが内になければ、どうも情操陶冶ができない。大抵な施設は形式化されてしまう。自己を反省しこの信念と情操を充分に養わなければならぬ。

五、祖先崇敬と神社參拜とは、其根元に於て一致するもので、從つて忠君愛國とも其根元に於いて一なることをも味得せしめなければならぬ。

第六節　參考資料

第一　根本的參考資料

1、神道

現在神として祭られている人々は、その當時に於て國家の經營に、偉人傑士として威德の發揚に努力した方である。換言すれば天祖天照大神の御精神を皇の精神として、この發現に努力した人々である。日本民族の出現と共に、この神道の實現があつたのである。神道に歸依すると言う事は、全く祖先の遺志を繼いで國家發展の爲めに努力している事である。

廣義に解釋すれば、祖先の遺志を繼いで國家の發展の爲に努力していると言う事は神の道を實踐していると言う事に外ならない。

神道は神の創め賜いて之を繼續して來た事實そのものである。その集積である。その事實集積こそ一つの軌範である。事實に即した規範なるが故に一層その崇さを感ずるものである。

國民は、天祖の神勅の尊さに歸依し、その精神を實現せんと努力する。その努力は現實に於ては、忠君であり愛國である。

現今の神道は二つに分つ事ができる。一は國體神道とも言うべきもので、皇室を中心として、踐祚式、即位式、大嘗祭、その他、國家の儀式はすべて、この部に屬するものである。

第二は、宗派神道と名付けて十三派ある。主なるものをあぐれば、純神道、山王一實神道、兩部習會神道、三教調和神道、垂加神道、復古神道、宗教的神道などである。

第三は、神社神道である。之は國體神道と同一歩調をとるものである。而して我國成立經營發展と密接なる關係をもつ。

2、神社神道と教育

宗教局は文部省にあつて、神社局は内務省にある。而して、夫等の管轄範圍が宗教局は第二の宗派神道に屬する部分であつて、宗教として認めている神道である。

第三の神社神道は内務省の神社局が之を取扱う。故に、官幣社、國幣社、縣社、鄉社、村社等にいたる分は内務省の管轄である。猶玆で明かにしておきたい事は、神道を分つて崇祖神道と自然神道と二つに別れる事である。

崇祖神道は、人を神とせるもので、祖先崇拜と同一義のものである。自然神道は自然物を神とせるものであつて自然崇拜と同一義である。自然神道の中には、自然そのものを神とせるものと、自然の中に哲理を見出し、その哲理を神とせるものとある。

また自然と神とを結合して神とせるものもあつて、判然せぬものもある。

また儒教佛教の影響をうけた俗神道と言わるゝ本地垂迹說や垂加神道と、何等の一切の影響を受けていない。古來から傳つている神道そのまゝの古神道と言わるゝものとがある。

小學校に於て、敬神の念の養成をして崇敬するものは、神社神道であつて、內務省神社局に取扱つている神社に對してである。

政府の行政上、現今までは、十三派だけを宗教と認めている。天理教も最近に宗教として認められたものである。之等に對して學校教育を關係づける事は、今日の場合、信教の自由を免されている以上、面倒な問題が起つて來ますから觸れないのがよい。

3、神社神道と宗教

宗教には、第一共同的に行う儀式がなければならない。神社は一の儀式が具わつている。第二は共同儀式を行う場所が必要である。寺院は、會堂と言う樣なものである。

社は之に當るものである。――勿論社は全然儀式をのみ行う場所でない事は言うまでもない。

第三は開祖が必要である。凡ての宗教には、開祖があつて、その顯現によつて布教されたものである。然るに玆に至つては、必ずしも同一でない。しかし、神社神道は、だれが開いたと言う事はない。民族の共同意識の自然の現れである。すべてが開祖であり、すべてが宗徒である。

玆にまた文化宗教として、尊い處があるかと思われる。以上の要素を持つているが故に、神社も宗教と言う點に於ては同樣である。概觀的に見れば、靈的のもので、自己より優越なるものを尊信するのが宗教である。故に之を崇拜歸依する人から言えば神社神道も宗教である。

神社神道は、宗教學から言えば神人教である。人と神との間に判然たる區別を認めないものである。神は人として表象せらるゝし人は神の系統をひいている神の子孫である。

4、神社神道と學校

以上述べたる如く、神社神道は、宗教としての性質を充分に具えているものである。然るに我が國の行政上の政策として宗教から離して內務省の神社局で取扱い道德の對象として祭祀を行うてゐる。

之は今日國家として信教の自由を免してあるし、又一方に於ては國家組織の上から之を重視しなければならぬ點などの事情に起因するものなるが故に、學校としても、道德の對象として取扱うより外ない。

神社は、實に道德の對象としての性質も充分に具えていると共に、一方には、宗教としての性質を充分に具えて居るものである。故に現在の一般社會の實態は、一面には道德の對象として奉仕し、一面には宗教の對象として歸依している。學校が取扱つているものは前者である。故に神社は兒童又は職員として學校より參拜するときは道德の對象として奉仕するものである。平素個人として參拜したるときは、その個人が宗教心が旺盛であつて信仰によつて歸依したとき、それはその人にとつては、宗教としての態度である。それは個人の信者の自由であるから、學校としては何等壓迫も奬勵もあるべき筋合ではない。

第二　文に現れたる資料

1、伊勢神宮

伊勢神宮には內外の二宮がある。內宮は皇大神宮と申し奉り畏くも皇祖天照大神を齋きまつり、御靈代は三種の神器の一たる八咫鏡である。

外宮は豐受大神宮と申し奉り、豐受大神を齋きまつる。參宮線山田驛に下車すれば、外宮の神城まで僅かに數町である。

神殿の造りざま、御屋根は萱葺で檜木の白木造、丹青の飾のないところに、神代の質素なさまも想はれてこの上もなく尊い。

外宮に參拜して內宮に參る。間の山を越えて五十町の道程である。五十鈴川に架けた宇治橋を渡り、神路山の森を仰いで神苑にはいる。廣い芝生に若松の綠新しく、掃ひ淸められた道には塵一つない。何といふ心持のよいことであらう。愈く進めば生茂つた古い杉、古い檜木、人間の世を離れたやうに思はれて、神威の尊さがしみ〴〵と身にしむ。一の御鳥居を潛つて左へ曲り、二の御鳥居を通つて御垣の下に跪く。飾らぬ彫らぬ白木造の御宮、神々しといふより外はない。昔芭蕉がここに詣でて、

何の木の花とも知らず匂かな

と詠んだのも憶ひ出され、しばし瞑想をこらす中我が國體の尊さを思ふ心が油然と湧出るのである。

神宮は古來皇室の御尊奉最も厚く、久しい間皇女が齋宮としてお仕へ遊ばされる例であつて、數百年間續いたが後醍醐天皇の御代からその事は絕えた。今は祭主には皇族が任ぜられるので、久邇宮多嘉王殿下が今の祭主宮であらせられる。＝帝國新讀本＝

2、伊勢參宮　＝五十嵐　力＝

俄に參宮を思ひ立つて、きのふの夕八時に東京を立ち、けさ十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に內宮を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に內宮の畏さは言語につくせません。五十鈴川の淸き流に水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく口をすゝいで、それから頭上の木の枝の鮮かな綠を仰ぎ、名も知らぬ鳥の奧深く啼く音に耳を澄ましつつ、綠靑色の苔に寂びた神杉の太い幹が天を支へる柱のやうに立並んでゐる間をたどつて暫く進むと、やがて木立の奧、塀の彼方に、千木・堅魚木の金色が拜まれます。更に進んで塀の內に入ると、正面の御門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に搖られ、その奧に疎に立つた神杉に護られて、御白色のぎつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さい祈を捧げました。さうして傍に並んでゐた老爺や老婆が、拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聽入りながら、現の間に西行法師が、忝さに涙をこぼして額づいた、敬虔な姿を思ひ浮べました。

直き淸き强き心をあらはして
すくすく立てりたふと神杉

大廟は單純といふものの偉大さを極度に表現したやうに拜まれます。さうしてこの御社の神杉は、樹木の神々しさを極度に表したもののやうに思はれます。

私共は內宮の御後の神杉の根本から、一片の苔を採つて、押藏いて懷にし、御手洗川に口をすゝいで、なりしも聞える笙・篳篥の幽寂な雅樂の音に送られて、この神境を辭しました。さうして、かへりみかへり宇治橋を渡つて

照憲皇太后の愛で聞し召したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから車を命じて、田圃路の五十九町を志摩壇の名山朝熊山に走らせました。

御社のうしろの
御門をろがみて
ひとかけの苔
いただき歸る

神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥される田圃路を車に搖られながら、私はこの神境が大神の大御心にかなつた謂はれを考へました。大神宮儀式帳に、

度會の國は朝日の來むかふ國、夕日の來むかふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と大御意鎭ります國と悦び給ひて、大宮定めまつりき。

とあるのを見れば、第一には山水の景色のたぐひなきを愛でさせられたのであらう。第二には、地勢・氣候・風土のうるはしきを愛でさせられたのであらう。第三には、この土地に永久な平和の可能性あることを愛でさせられたのであらう。最後には、一切の消極的煩累に煩はされずして、皇御孫に率ゐられる大和民族の積極的光明的發展を見そなはすに都合のよい、氣の落着く境と思はせられたのであらうなどと考へながら、をり〳〵車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中に、いつか朝熊山の麓に着きました。

第三　施設指導參考資料

1、神宮參拜旅行案　‖徳島高等小學校‖

一、目　的

(一)中心目的　伊勢神宮參拜

建國の大精神は、皇大神宮の大御前に於て顯づいた時に於て眞に領會ができる。

神宮の大御前に於て、その崇高なる其敬虔的なる神靈に誠を捧げる時そこに吾等の靈性の感謝は國家を措いて何物もないであらう。

兒童をして此境地にあらしめる事によつて神に對する敬虔的態度と國民としての國家愛の大精神とを感激振起せしめ、國民たる本務遂行の自覺領會を爲さしむ。

(二)副次目的

1、地理國史的研究を爲さしめ我國土の優秀と先人の文化創造に對する努力とを領會せしめ以て文化向上に對する信念を養う。

2、都會人の生活、殊に公民的職業的生活の實際を見聞せしめ都會人としての文化生活改善の參考資料とせしめる。

3、兒童の旅行生活を自治的になさしめ平素の教育の社會的實生活的試練の機會となさしめる。

二、日　程(省略)

三、旅行兒童指導計畫

(一)學年訓話要項

1、皇室及神宮に關する御事に就ては愼重なる態度を持し終始敬虔的なるべきこと。

2、代參の趣旨を明にし、之が實現につとむべきこと。
3、參拜旅行の目的を自覺し之が達成につとむること。
4、日常生活の實際的試練なること。
5、相互扶助の精神の修練の機會なること。
6、旅行一般の心得につきて。

(二)旅行團自治會

1、自治會を開かしめ、旅行中の自治生活について協議し實行を期せしめる。
2、學級自治會を開き役員、班別、其他旅行上の注意事項につき協議せしめる。

(三)兒童の豫備研究

伊勢神宮に關する事項及旅行地沿線に於ける各種事項等、各自に參考資料に基きて豫め研究を爲さしめる。

四、旅行中の指導

1、常に日常生活の試練時として行動せしめる。
2、神宮に於ては充分無言敬虔の態度を味得せしめる。
3、學年訓話、學級自治會、旅行生自治會等の協議を徹底的に實踐せしめる。
4、衛生看護に注意し遺漏なきを期する。
5、地理的歷史的事項に就て說明指導をする。
6、殘留兒童に對しては每日詳細なる通信を爲さしめ代參の趣旨を徹底せしめる。
7、每日精細なる記錄をつくらしめ一生の記念として長く保存せしめる。

五、旅行後の指導

1、代參報告會を開く
2、旅行展覽會並に殘留兒童學習發表會を開催す
3、旅行記錄及感想文の提出
4、旅行記念雜誌の發行

六、旅行兒童の心得　＝約四十ヶ條に亘る詳細なるものであるが省略する＝

七、事務分掌　＝詳細省略＝

1、庶務係　2、交涉係　3、會計係　4、引卒係
5、衛生監護係　6、記錄係　7、談話係

八、不參加兒童指導

1、不參加兒童係　2、不參加兒童指導案　＝省略＝

九、經費　＝省略＝

第四　兒童の參拜感想

1、友に　＝第二信＝

杉。杉。杉。
冷た、露がふりあふぐ眼鏡のガラスに一滴……二滴……

濃い綠の十重二十重から、蒼い空と苔蒸した檜皮葺の屋根がちら、ほら。
杉。杉。杉。

—五十鈴川のほとりにて—

何故いらつしやらなかつたの？　つて言ひ度くなります。

‖清　水　五　郎‖

2、內宮參拜の感想

內宮は杉の木が生え茂つて、日がその枝にさえぎられ晝でも夜明前の樣です。明るく晴れた空でもどんより曇つている樣に思はれる位である。

杉の木はどれも三四十米もあらうと思はれるほどの木ばかりである。その間を鷄が、ちよこ〳〵と餌をさがしてゐる。あたりは、一面小じやりが敷きつめられてある。社夫が杉の小枝のおちたのを集めてゐゝのは全く繪の樣である。

神殿にぬかづくと社の屋根の樣な恰好をした門があつて、その入口には一ばいの大きさで白木綿をはりつめてある。土間には一間四方ぐらいのかこいがしてある。其の土間を白木綿でしきつめてある。そして賽錢が其處へ納められる樣になつてゐる。

次に其奥をうかがへば御本殿であるらしい全く丸木造の御殿である。前庭は、拳位の石でしきつめられてある。其處は一般人は絶對に入る事ができない相である。屋根の上にはかつを木が飾られてある。神殿の前に立つと。自然に頭が下る。おごそかなる事は、とても言葉にも筆にも言ひ表はす事ができない。

3、伊勢神宮に參拜して

‖高　岡　萬　太　郎‖

今日は內宮の參拜だ。身も心も特に淨めた。

午前八時宿を出發した。やがて向ふに見ゆるが宇治橋だ。流れも清き五十鈴川にかけられたる御橋だ。代參の使命を果たし、我國體の尊嚴を自覺し、民族的感激に浸たらう。

先づ五十鈴川にて手を洗ひ口をそそぎ心を淸めた。列を正して進むことしばし。

小じやりをふみしめる音、進むにしたがひ、步調がいつの間にか一致してくる。

やがて神前にぬかづき赤誠をこめて奉拜する。

生れて始めての參拜。最敬禮の內につく〳〵天照大神の御神德に感激した。

神前を離れる事に心を殘して立ち去る事の止むを得なかつた。

それから、神苑內を廻つた。老杉の林、紅葉の群、何れを見ても壯嚴の感に打たれぬものはない。

心を殘して宇治橋を渡る。再三再四神宮をふりかへつた。

4、伊勢神宮日記の一節

‖川　崎　清　吾‖

—前略—　第三日

朝五時頃目をさました。顏を洗つて天候を見ると、小雨がボト〳〵降つてゐる。緊張してゐた心持も一時にぬけてしまつた。しかし仕方がない。朝食後雨の中を大津驛へと向ふ。これより山田まで東海道線、草津線、參宮線と隨分長い。

四時間餘にして漸く山田驛に到着する。全く滿員だ。しかたなしに立つてゐたが、數驛を通過した後漸く腰を卸す事ができた。次第に退屈を感じて來た。持合せの本を讀み始めた。いつの間にか眠つてしまつた。友達にゆり起されて始めて目をさました。晝食だが氣分のすすまぬまゝそのまゝにした。十二時七分山田驛についた。

今迄ふつてゐた雨はすつかり止んだ。空がからりと晴れた。

荷物を宿に預けて外宮を參拜した。神殿の尊嚴實に私の十幾年の生活に於て始めて味った尊い體驗であった。百穀の成長を掌る神樣だ。思へば自分の家の職業が農である事を思ひ合してその參拜は殊の外意義深かった。

終って電車にて二見が海へ到着した。二見の景を賞し土產物を求めた。

午後四時內宮附近の大橋旅館へ投宿。外出の許可を得て谷中君などと町を歩いた。淋しい町だ。明日は愈〻內宮參拜だと思ふと何だか心がざわ〳〵する。

一同寐についた。幾らか疲れてゐる樣だ。

第四日

荷物はすべて旅館に預けおき內宮參拜へと向ふ。

境內は壯嚴なる綠樹鬱蒼として五十鈴川その邊を流る。

玆にて一同手を洗ひ老杉にかくまれたる參道を歩む。處には美しき鶴の二三羽睦しげに遊べるもたのもし。

我等の此神前に額きうる光榮、この幸福、遷宮式終りて間もなき壯美なるこの神宮、玆に赤心をこめて、我が德島高等小學校の代參として國民の一人として眞實の祈禱をした。

之こそ神に對する心持だと言う事を味得した。學校で行ってゐる遙拜式の際は形式的になってゐると言う事を自分ながら悲しく思った。そして今後は、この神前に額づいた時の態度をそのまゝにしたいと心に誓った。

夫より境內を巡覽した。一本の植樹にも壯嚴が含まれてゐる。

宿に歸って荷物を持って山田驛へと急いだ。一路濱町へ向って午後四時半すぎ到着した。＝後略＝

第九章　七夕會

【七月七日】

天の川

＝野口雨情＝

竹に短册たん〳〵たん
たん〳〵たんの
七夕に
夜はお空に
天の川
天の川へ
かささぎが
板をならべて
橋をかけ
たん〳〵わたれ
たんわたれ
七夕さまもおはたりだ
たん〳〵わたれ　たんわたれ

＝幼年倶樂部＝

第一節　七夕の由來

七月七日は七夕として人口に膾炙したる行事である。

恐らく文明の東漸とともに支那から傳つたものであろう。

南北に走れる天の河の星の集團を一つの河と見立て、陰暦の七月七日の夕には上弦の月がその天の河の下流にかゝるとき、その天の河の兩岸に接して特に明るく見えて相對する二つの星を牛飼樣と織姫樣と見立てて、この良夜に相會わんとするとき鵲はこの河に並びて橋を架すると言うのである。若しも雨一粒にても降るときはこの河の水が溢るゝために會うことができないとの事である。即七月七日は二星會合の夕を憧憬した風習である。

古來女子は五色の糸を金銀の針に貫き織女に祈れば裁ち縫いの技術が上達すると言うので念願したものである。後轉化して芋の葉に五色の糸をかけ之を祭れば思う事叶うと言う事になつた。之等の憧憬がいろ〳〵と分化して、地力によつていろ〳〵と言ひ傳えられている。この頃では、五色の糸が短冊に代り、之を笹の葉に吊し、或は夕の窓に吊しその數の多きを誇り、或は太き竹の上部の笹を殘し、それに吊し之を庭前又は屋上に建ててその高さを競う風習もある。

この日は、昔は索餅即ち「ムグナハ」と言つて、小麥粉と米粉とをねり混ぜて繩の樣にねじたものを長さ二三寸程として祭つたものである。

現今は處によつて異るが、反物や細工物などをはじめとして、瓜、茄子、十八豆等の新鮮なる野菜團子等を祭る所が多い。

第二節　施設指導の着眼點

此の傳說としての七夕も之を今日の純理的科學に照合すれば恐らく附會の甚しい物語であろう。科學者の研究に從えば、天の河は二兆四千億里の空間に約十億以上の恒星の集積であるそうである。殊に、その中に存在する牽牛星は大陽の十四倍、織女星は九十五倍の光力を有する恒星である。而かも肉眼で見れば、相互の距離が尤も近い樣に見えるが實は非常な遠距離で、一方の星の發したる光が他の方に達するには十六年を要すると言う。かくの如き恒星なれば永久に相會うこと無きは言うまでもない。

しかし、七夕の價値は、その樣な處にあるのではない。何處までも純情に立還る處にある天文學の教うる處を超越して思を遠き遙かの彼方に馳せてゆく處に價値が生れる。

星の世界に對する純情憧憬は人間の生活の稍もすれば濁りやすき處を洗い去る。

利害得失の有限に即した混濁の生活から離脫して、これ等の有限を超越した無限の域に彷徨せしめるそのものは詩の世界の生活であり信の世界の生活である。

殊に低學年兒童の想像の生活をしては一層滿足せしめてその純情をよりよく啓培したい一面平素の

學習の應用として實地の練習を爲さしめることも一つの目標にする事が出來る。

低學年の施設並に高學年でも女子の施設としては教育上見のがす事のできないものである。

地方の事情に即して計畫するがよい。今日は、七夕の如き純情を養う日本行事がすたれてゆく樣に日本人全體の精神が物質的に巧利的に傾いて行く樣である。まことに遺憾な事である。

單に迷信を養う傳習だとして退ける事はよろしくない。之を教育的に考察し施設し指導して無限への憧憬心を啓培したいものである。

第三節　施設指導の計畫

第一　家庭に祭る短尺作り

教育は、將來兒童の生活の實際をも考慮の中に入れたるものでなければならぬ。

單なる家庭傳統に放任せず、將來第二世によつて作らるべき理想生活を豫想して指導しなければならぬ。殊に兒童に相應しい家庭行事は、學校がその部分に喰ひ込んで行かなければならぬ。

教室教育から街頭教育に出て家庭教育に這入つて行かなければならぬ。その仕事としては尤もふさわしい行事の一つである。

家庭に祭るべき短尺を學校に於て作らすことである。

之が實際に就てはいろ〳〵注意警戒しなければならぬ點は多々あろう。地方の事情、兒童の發達等を顧慮すべきは勿論である。

例えば、短尺の分量は家庭によつて異つている。それを一ケ所で作製する事となれば、兒童の蒐集本能や名譽本能などをそゝる場合もできて來る。

しかしそこが教育で單に數の多いと言う事だけが價値のあるものでなくして精神的に實行するとき始めて價値のあるものであることを指導する等、却つて教育指導の好機會に轉ずる等の注意を要する。手工圖畫その他の時間を割いて製作する。

製作の趣旨方法等を充分に研究意識せしめ、之に要する道具は極めて清潔に洗わしめる等清淨を中心として指導する。

短尺に書する語句詩歌は、學年の程度に應じて兒童にも作らして教師も之を示して、できるだけ淨書せしめる。

笹につけしめるのは持つて歸つて家庭に於て爲さしめるがよい。

一面に於ては、家庭に於て兄弟姉妹が打寄り一家團欒の中に於て製作することも有情を養う上に大切なる事である。その點から言えば、學校で製作するのは、學校に於て指導する意味に於て、その半を學校に於て製作せしめてもよい。鄉土の事情を中心に考慮すればよい。

第二　學級星祭り

學級毎にその學級の程度に應じての星祭りを行う。夫等は出來るだけ學級自治會の協議に基き、

教師が之を指導するがよい。教室の清淨なる處へ祭壇を設けて、持ち寄つた新鮮な野菜、菓子などを供える。共同で短尺を作製し之を笹に結びつけて祭る。

自治會長星祭の辭をのべる。

第三　學級お話し會

學級毎にお星樣に關係したお話し會をする。

純情を養うのが目的だからなるべく科學めいた事はない方がよい。

しかし、學年の進むに從つてそれでは滿足しないからだん〳〵と科學を織り込んでゆく方がよい。

而して指導者によつて、その科學を超越した純情即物質を精神的に意義づける貴い處まで導いて行かなくてはならぬ。

人間は一つの花を科學的にも考察できれば、道德的に行爲する事もできる。藝術的に鑑賞する事もできれば、宗教的に信仰する事もできる。一つの花を科學的にのみ直觀し得ないなら人間の生活は誠に干乾びてしまうであろう。

教育は其處に着眼しなければならぬ。この行事を科學的にのみしか導き得ない教師ならば、到底眞の教育はできない人であつて、また非常に危險なる教師であると言わねはならぬ。

第四　地方自治團主催七夕會

何れの學校でも此際は校外指導に留意していないのはない。

しかし、まだ〳〵眞にその効果を擧げている處は尠い。只形式に止まつている場合が尠くない。言う迄もなく、一般の頭が教室に於て行われるもののみが教育である如く、考えられていることもその原因の一つであろう。のみならず、教育者の中にもまだその頭の去らないものもあるからである。かくして校外教育の重要性を自覺しないもの、又は自覺していても努力を拂わぬものなどのあるからである。

こうゆう機會には是非この方面の教育として尤も相應しいものであろう。只年一回の奬勵會を地方別にして優等生の專賣出演も大切であるが、また常に年中數回機會を求めて、順次多數のものに出演せしめる事も大切である。

殊に、從來の發表會はあまりにも兒童の實力以上に重荷を負わしている。そして聞くものに見るものにアット言わせて滿足していたものである。それも時には必要かも知れぬがそれ以上に必要なのは實力を父兄に紹介することが重要ではあるまいか。一部の優等生に數日仕込んだものよりも一般の兒童の平素の成績を見せたいものである。子を持つ私としては常にそう希望して止まない。計畫は從來の樣に教師がお膳立ばかりしてはよくない。地方自治團の計畫に任かすがよい。

そして何れその記別には教師が配屬している事であるからその教師が指導すればよい。

場所は各記別で寺院、集會所、又は普通民家を借るがよい。

準備はなるべく大仕掛けでないのがよい。要は兒童の實際の平素の力と言う事を中心とする。

談話は學年に應じて參考資料を提供してやつてもよい。

高學年はできるだけ自ら蒐集せしめるがよい。

時間は夜がよい。或は午後五時位から始めて夕暮れに終る樣してもよい。

父兄母姉の來會を求める。そして一つは學校と家庭との接近をはかり一つには、七夕行事によつて鄉土人教育をすることである。

觀測を指導する。星に關しての觀測力は一般のものもその程度が低い。殊に兒童は猶更である。

講話は星に關したものをするがよい。できるだけ傳說を結びつけて爲すのがよい。純科學的に講話する事はよくない。

第四節　施設指導の實際例

一、目的　鄉土民間行事としての七夕會の計畫實踐にあたらしめ、それによつて兒童の純眞性を培養伸展せしめ、併せて日本民族に膾炙したる行事を一層教育的に創造するの能力を養わんとするにある。

二、方法

（一）學級指導

1、短尺の作製　材料は購買部に於て一定のものを揃えることとする。勿論本行事は家庭的團欒を意味するものなる故、之を學校に沒收してしまうことが本旨ではない。家庭的行事の指導をする意味に於てその一部を學校に於て爲さしめる。されば家庭用として持ち歸らす分は、その地方の普通一戸に用うる三分の一位を以て適當とする。學級に於て使用する分をも併せ作製する。

圖畫と手工或は書方の時間等を便宜變更してなさしめる。

單に短尺のみたず、學年に應じて或は折紙、切拔、等手工を應用したるものを作製すること。

詩歌その他は學年に應じて指導すること。

用具は尤も清潔にし、之が作製は、精神的にあたらしめる。

家庭用の分は丁寧に持ち歸らしめ學校用の分は共同蒐集を爲しおく。

2、環境整理　低學年は教師兒童協同相談の上整理し中學年以上は兒童の學級自治會の協議を基礎とし教師學年に應じて幾何の指導を加えてなさしめる。

始業前、晝食休、放課後等に當らしめるがよい。

多數を要しない時は常に分團を作つておいて交代でなさしめてもよい。

標準としては教室前面の清淨なる一隅に祭壇を設け短尺を吊し供物をするに適する樣構造する。

3、星祭り　星祭りは、地方によると七月六日の夕方にする處と七月七日の朝にする處とある。學校としては六日の第一時にするがよい。順序は、學級の程度に應じて斟酌する。

◆參考　＝中學年＝

(1)敬　禮　(2)挨　拶(自治會長)　(3)お　供　物(幹事)
(4)星祭のことば(學級長)　(5)默　禱　(6)七　夕　の　歌(一同合唱)
(7)敬　禮

4、學級發表會　約一時間の豫定を以て計畫せしめるがよい。夕方の地方自治團の發表會もあるからその下準備位の程度にすればよい。

これも學年學級に應じて計畫なさしめるがよい。

◆參　考　＝低　學　年＝

(1)敬　禮　(2)開くことば(代表)　(3)朗讀　お　星　樣
(4)唱歌　星　(5)教室劇　親星小星　(6)童話　星　と　兎
(7)唱歌　星　と　花　(8)おしまいのことば(代表)　(9)敬　禮

5、地方自治團主催七夕會

計畫の處に於て述べた如く各地方別に集會一週間位前から計畫せしめる。

材料の選擇、練習、會場の借入、父兄への案內狀の準備等上級生の手によつて準備せしめ、指導教師之を助成補導す。

期日　七月七日午後五時より約二時間(日暮解散の豫定)

講話　教師及鄕土人の講話を加う。

準備　準備係を上級生より選定し教師附添のもとに會場に至り開會前萬端遺漏なく準備すること

會場に於ける仕事に就ては大體兒童の協議に一任するが、書方圖畫の展覽を併せて行う樣指導するがよい。

◆參　考

發表會プログラム

(1)開　會　の　辭　(地方自治會長)　(2)感想　昨日の短尺かざり(低　學　年)
(3)研究　七夕の由來(中　學　年)　(4)研究　太陽と地球と星(高　學　年)
(5)童話　七夕のおはなし(低　學　年)　(6)希望　星の國へ行きたい(中　學　年)
(7)感想　星と信仰(高　學　年)　(8)朗讀　七　夕　祭(低　學　年)
(9)童話　星　の　國(中　學　年)　(10)朗讀　七夕の空を仰ぎて(高　學　年)
(11)講　話　(教　師)　(12)閉　會　の　辭　(地方自治會長)

第五節　參　考　資　料

第一　文に現われたる參考資料　＝吉田紘二郎＝

1、七　夕　祭

七夕祭は田舍の少年・少女にとつては樂しい年中行事の一つである。

夜毎に銀河が近く、はつきりと見えるやうになつて來ると少年・少女の頭には笹に吊した色紙が浮かんで來るのである。

野天に焚かれてゐる田舍の風呂の中で、私たちは父親から牽牛星や織女星を指さして敎へられた事があつた。

何といふ星であらうか、銀河から少し南西に寄つて三角形を作つた星群がある。そして頂點をなした中央の星だけが紅く見えるのである。

「眞中の星さまが紅いだらう。あれは左右の星さまを擔いでるからだ。右と左の星は秋の收穫だ。だから豐年になればなるほど右と左の星が重くなるので、眞中の星さまの顏が紅くなる。」

といふやうな父の話を、私たちは野天風呂の湯を、ばちやばちやさせながら聽いたものであつた。

雨が一粒でも降れば天の川が溢れるので、牽牛星と織女星は逢ふことが出來ないといふやうな話も聽かされた。」

「かはいさうにまた雨が降つて來た。」

と言つて牽牛星や織女星の不運を悲しんでやる女たちもあつた。

七夕の夜は全く雨になることが多かつた。

私たちは三日も前から紅・白・綠・黃・淺黃・青・黑などの色紙を買つて來て、短册を拵へては朝早く起きて、運や稻の實の露を集めて墨を磨つて、それに字を書いた。六日の朝は山から大きな男が葉のついた男竹を擔いで賣りに來るのであつた。

他家の竹よりも自家の竹が大きくて丈が高いといふのが子供心にも誇りであつた。

姉や妹たちは五色の紙で着物を裁つて星にさゝげるのであつた。

少年・少女達の身になると、七夕の宵に雨が降るといふことは、牽牛星や織女星のためよりも、むしろ自分等の七夕棹が濡れることのために悲しかつたのであつた。

私たちが雨に濡らすまいと思つて、七夕棹をどうかしようとする。親たちは、

「雨が降つてゐても七夕さまは短册を見て下さるから……」

と言つて私たちの手をとめた。

雨は大抵嵐をつれてゐたので、笹に結へつけられた色紙は自由に飛んで、茄子畑だの黍畑だのへ散つて行つた。

あの頃のやうな素直な心は失はれてしまつた。

七夕祭だの灌佛會だのがだん〳〵忘れられて行くやうに、自分の心も年々がさつなかたくななものになつて行くやうな氣がしてならぬ。‖小鳥の來る日‖

2、七夕の空を仰いで　‖新城新藏‖

天文に關する古傳說は、東西とも其の數に乏しくないが、其の中でも牽牛・織女の物語は特に異彩を放つて居る。この話は、少くとも今より約三千年の昔に、支那に起つたものであらう。やがて文明の東漸と共に我が國にも傳はつたもので、爾來和漢の文學を美はしく彩つて居り、普く人口にも膾炙して居る。

陰曆七月七日の夕べ、上弦の月は南方天の河の下流にかゝつて居る。仰いで天空を望めば、薄明るく南北に走れる天の河の兩岸に接して、二つの大星が靑白い光を放つて相對して居る。我の心を以て彼を推せば、天上の二星も亦この良夜に當り、河を渡りて相會せんと欲して居るのであらうと思はれる。此の心神に通じ、折柄飛び來れる鵲は群をなして河を塡め、忽ちにして橋を成したと見たのがこの話の始であらう。

萬葉集の歌は素樸にしてよく古傳說の趣を傳へて居る。

秋風のさやけき夕べ天の河
船こぎわたる月人男
天の河霧立ちのぼる棚ばたの
雲の衣のかへる袖かも

この話を正面より見れば、荒唐無稽の物語に過ぎざることは言ふまでもない。牽牛星と織女星とは共に恒星であつて、肉眼に見ゆる程度に於ては、永久其の相互の位置を變ずることがない。牽牛星は我が太陽の十四倍、織女星は九十五倍の光を發し、其の間の距離は一方より散したる光が他の一方に達するまでに約十六年を要する程である。斯の如き恒星が其の數約十億以上、廣袤約一萬光年の空間に相集つて、我が星辰界を形成して居るので、所謂天の河といふのは、この星辰を其の遠く廣がれる方向に面して見た光の集積に外ならぬ。

併しながら牽牛星・織女星は人に非ず、天の河は川に非ざるが故に、この物語は一顆の値なき架空談なりとして排斥し去るのは餘りに無情であると云はなければならぬ。我が邦の文學に精通し、廣くこれを世界に紹介したるラフカヂオ・ハーン氏は、其の「銀河ローマンス」といふ小册子に於て、萬葉集にある七夕の歌を集めて、之を飜譯し、解說して居るが、更に其の優麗なる才筆を以て深く是等の歌人に共鳴し、我々と雖も、一たび塵界の喧騷を離れて星斗燦然たる天空に對し、遠く思を天外に馳すれば、いつしか現代天文學の敎ふる所を超越し、天の河を漕ぎ行く船の櫂の零に聞き惚れるに至るであらう」と述べて居る。これは誠に同感であるが、私は更に一歩進めて、この物語に現代天文學より見たる新生命を與へて見たいと思ふ。

天に見ゆる無數の星は、皆一つ〳〵我が太陽に比類すべき程のもので、其の數約十億以上も集つて、天の河の方面に扁平狀に廣がれる所謂銀河系といふ一の集團をなして居るのであるが、この集團は決して偶然雜居せる烏合の衆ではない。相互の間には常に强大な引力が作用してゐるので、この相互引力のために、我が星辰界は永久崩れざる一の恒久的團體をなして居るのである。

我々に光と熱とを與へ、地上に於ける殆ど一切の活動の根源となつて居る太陽のエネルギーも、其の起りは宇宙引力のための密集である。一つ一つ我が太陽と比類すべき無數の恒星の光も亦同樣である。要するに、天地・宇宙の成立して崩れざるものも、又其間に光明あり活動があるのも、皆すべて宇宙引力のためである。星辰の大集團を以て人間の社會的集團に比し、天體間の相互引力を以て人間相互の愛に比するのは、必ずしも無理な比較ではあるまい。牽牛・織女の物語は、天地・宇宙の成立の基礎なる宇宙引力の存在を語るものとは解し得ないであらうか。我が天地・宇宙が如何にして成立するに至つたか、天地宇宙の始りは如何と云ふ問題に就いては、古來種々の說があつて、未だ一定するに至らないが、私の考では、これも亦全く宇宙引力の賜に外ならぬ。我が太陽系の如きは其の始め幾億萬となき無數の流星より成れる尨大なる集團であつたものが、內部相互の引力のために、次第々々に密集し、中央に大なる集團を成せるものは太陽となり、少しく離れて局部的集團をなせるものが木星や地球となつたものである。太陽は大なる集團なるが故に發生せる熱量も多く、非常に高溫度の瓦斯體狀のものとなり、多量の光熱を四方に發散し、光明赫耀として居るが、地球の如きは小なる集團なるが故に發生せる熱も少く、出來始めには全部液體である溫度であつたらうが、早く既に冷却して、其の表面は生物の發展するに適する樣になつてゐるのである。

斯くの如き系統の出來始めには、太陽のまはりに、或は右廻りのもの、左廻りのもの、或は彗星的軌道を畫くものなど、種々雜多の運動をなし、從つて衝突や干渉などは頻繁にあつたことは勿論であらうが、其の間にも各個體の間には常に强大なる相互引力が働いて居つたがために、永き時の間に是等の運動は次第に整頓し、今日見る如き秩序整然たる太陽系となつたものである。

我が太陽や太陽系に比類すべき多數の恒星や恒星系の成立するに至つたのも、同樣のことと考へられる。

要するに我々が現に見る如き天地宇宙が成立するに至つた根本の動機は、宇宙引力のためである。畢竟嘗に相集來せんとするのは物質根本の性質で、この性質あるがために萬物は存在し、天地・宇宙も存在するに至つたと云ふべきである。

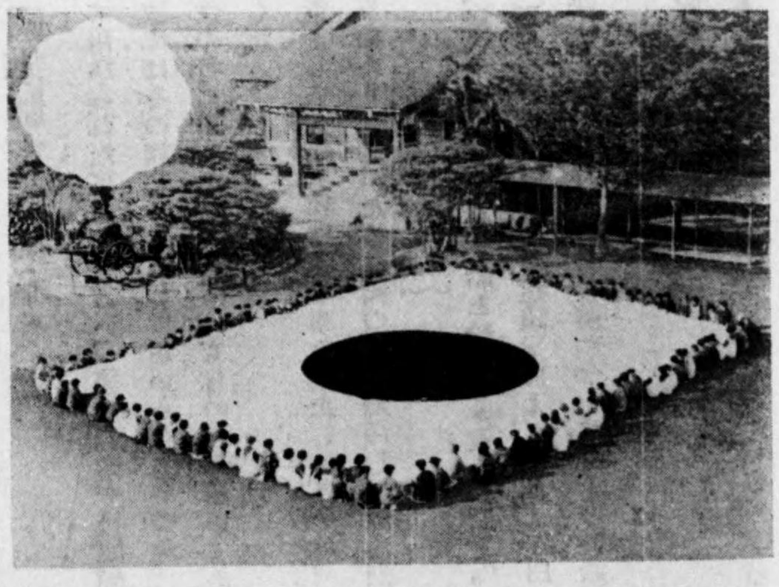
思ふに仁と云ひ、愛と云ひ、慈悲と云ふ、此の心は人間本來の性情であつて、これあるがために、大小種々の人間社會は、現在の如くに成立するに至つたであらう。進化の道程に於ては、或る利害の相反する所、衝突鬪爭の頻發するのも固より止むを得ないことであらうが、永き時の間には相互仁愛の念の導く所により、遂に圓滿無礙の整然たる理想鄉に向つて進化するのではあるまいか。

古の人は、人の心を以て物を推し、牽牛星と織女星とをして相引かしめんとしたが、現代の天文學より見れば、我が天地宇宙は引力によつて成立して居るが故に、かゝる法則を認むる人の心と心とは相引くものでなければならぬと云へる。畢竟物心不二、悉く皆永遠の平和を期して進化し行くものであらう。

三千年前の素樸なる古傳說は、星を以て人とし、人を以て星とし、天地を包容せる人間の大理想を語るものと解釋し得るではあるまいか。＝科學知識＝

第十章　日の丸會

【七月十一日】



「アマ　ズキブンン大キイ國旗デハ有リマセンカ。コノ國旗ハ東京
日祝ヲ市外世田ケ谷町ノ國士館中學校ニアツテ四大節ヤ其ノホカオ
タ供子マイ。スデサ太ノ位柱信電ナキ大ハ捧ルテタ。スマテ立ニ
チガ百三十人モカカツテヤトヒロゲマシタ……」幼年倶樂部

第一節　國旗制定の由來

日の丸の旗を、旗じるしとして用ひられた事は隨分古い。後鳥羽帝や後醍醐帝が賊軍討伐のために臣下にお下しになつた錦の御旗にはその旗じるしとして用いられてあつた。

加藤清正や小西行長が朝鮮征伐の折に用ひた船の旗印にも日の丸を用いてあつた。その外日の丸を旗印として用いられた例は尠くない。

さて、從來德川幕府は一の政策として大船を建造する事を禁止してあつた。然るに、嘉永六年米艦四隻浦賀に來航し交通を求むる處あり、之がために國の上下驚愕し、水戸烈公の議を用い遂に大船建造の禁を解いた。

之によつて大船建造盛となり、隨つて他國船と日本船と紛わしき事となつた。之が船印の必要起り幾多の曲折を經、安政元年七月一日水戸烈公の再度の建議案によりいよ〳〵白地に中赤の日の丸を以て日本の總船印とすることに決定して、七月十一日各藩に令して日本の總船印として用いさせた。

其後安政六年に至り、

「白地に日の丸の旗を以て御國總印となす」

と云う命を出して始めて國旗としての制が定まつた。

明治三年十月三日正式に國旗及び諸旗章の制が定まり、五年三月には祝祭日に一般國民に之を掲揚せしめる事となつた。

第二節　施設指導の着眼點

大戰以來とかく日本人の一般の思想過激となり、一日〳〵と日本精神を沒却したる言動を爲すものが往々にして著しくなつて來たことは甚遺憾なる事である。

今後學校教育の上に一般社會指導の上にこの點に向つて各種の施設經營をなし新興日本の大使命を益發揮せしめなければならない。

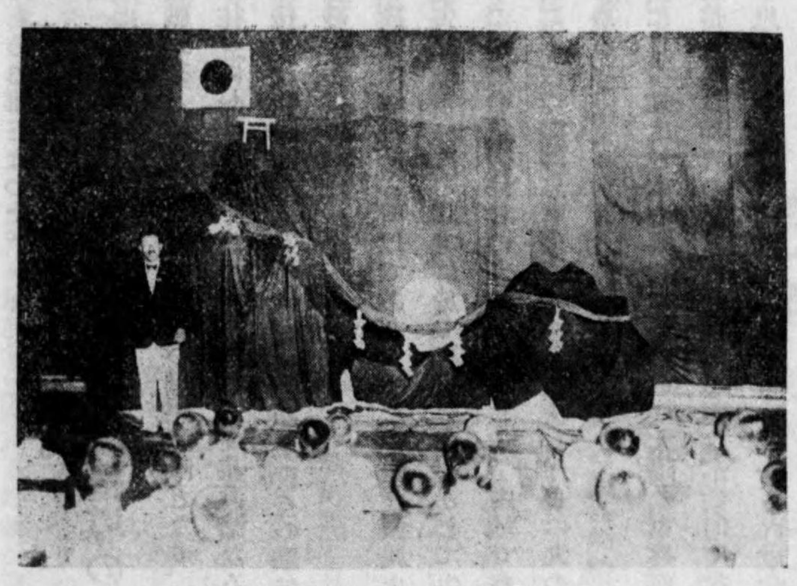
我國家の尊嚴なる所以であり、また、生々發展止まる處を知らない所以は一にして、皇室を中心にして組織されたる國家に於て皇室を中心として生活する處にある。

この精神の象徴は日の丸の國旗である。白地である事は純潔即平和精神を意味し、日の丸が紅であることは赤誠即忠君愛國精神を意味し、日の丸の圓形なることは自他無別即仁愛の精神を示すものである。

更に日の丸は日本の國號にかない、太陽の東昇西沒恰かも我國の新使命を思わしめ、國運の隆昌さながら旭日昇天の勢あらしむる等國旗が如何に尊嚴にして如何に成長の上に活力を與えつゝあるかを思ふとき教育の施設はこの國旗に統一され社會施設はこの國旗に淵源を求めなければならぬ。

されば教育施設の一として旗の日會をなし國旗に內在している日本精神の體得と實踐に努めしめな

ければならぬ。



=講堂に於ける造物と講話=

第三節　施設指導の計畫

【一】教室裝飾

彼等の作爲に訴える處に教育の價値がある。前日各學級の自治會に於て協議せしめて學級を國旗其他を以て裝飾せしめる。材料は學校から貸與してもよし、また學級にて製作蒐集せしめるならば猶更よい。その間に教育的効果が殘されて行く。發表板等には、國旗に關する繪畫文章詩歌等の自由發表又は分擔發表を爲さしめる。入口には大國旗を交叉する。これは既に述べた如く一教室を一家と見る點に於て、學級毎に平素備付けて置かねばならぬ。

【二】造り物

學校又はある學年に命じて國旗に關する造り物をしてもよい。また學級毎に各創作工夫をなし技を競わしてもよい。學科の時間を徒費すると考えてはならぬ。それによつて各學科の綜合實地練習ができる。殊に一つの造り物を爲す事によつて眞の共同精神即社會心が啓培される。そうする事によつて平素の學科學習の能率の向上增進がある。常にかゝる事によつて創作心を練つておく。やらして見れば兒童は存外創作心の所有者である事が知られる。

【三】小國旗佩用

學校から徽章用の小國旗を渡し當日胸間に佩用せしめ、自他共に國旗に關する明確なる觀念と敬愛の情操とを濃厚ならしむ。

【四】國旗高揚式

國旗高揚式は平常に於ても定規的に行われている處が多い。甚だ喜ばしい事である。しかし、當日は平素の行事としての高揚式よりも一層壯嚴に一層壯重にしたいものである。高揚式の場合のみに限らず野外に於て諸式を爲す場合は、常に樂隊を必要とする。擧式をして一層壯重に、或は壯快に或は壯痛ならしめるのは是非とも必要である。單に運動會のみに使用させ

るのが本體ではない。殊に他から雇つて來たりしたのでは何等の意味を爲さない。兒童の中から選手を選んで平素指導する。それによつて充分成効する。成効しないのは指導の努力が足りないからである。

【五】講演會　發表會

一堂に集めて國旗に關する兒童の發表會を爲し教師の講演會を開いてもよい。その場所としての講堂は國旗を以て裝飾するがよい。

【六】國旗敬重宣傳行列

國旗に對する意識はまだ〳〵民衆的でない地方が尠くない。

地方によつては、學校なり青年團なりの督勵によつたり、又は戸主會婦人會等の申合せ等によつて國旗精神の理解及之が揭揚又は取扱い等に就て徹底している處もある。

不徹底なる地方に於ては、當日半日位を費して、通學區域内を適當に分擔して數組の旗行列を爲し國旗に對する自覺を促進するのがよい。

地方によつては、單なる旗行列では意義を爲さぬ處もあろう。鄕土の狀況に應じて、或は辻演說によつて、その目的を達し或は「國旗を愛しませう」とか「日の丸の旗の精神を知りませう」とか「祝祭日には必ず樹てませう」とかの宣傳旗を押し立てる等によつて目的を達する樣考案しなければならぬ。勿論宣傳行列と言つても本質的目的は、自己を他處にしてのものではなく、各自をして爲す事によつて自己の意識を濃厚ならしめるにある事を忘れてはならぬ。

【七】記念事業としての國旗高揚塔

國旗の高揚塔は近時各學校に施設されている處が多くなつた。

皇室中心の教育は旗の教育を忘れてはならない。其ために高揚塔を是非建設したいものである。

いまだ設けてない學校には、當日の記念事業として創設されるならば猶更よい。事業計劃して竣功しても、落成式だけは、當日に延しておくがよい。それが尤も意義深い。

また新しく創設される協議は當日にその發起會を開くとか申合會を開くとか、又は最後の決定を爲す事も意義ある事である。

高揚塔の構造は、その精神に於ては之が高低、廣狹、優劣のあるべきものではない。しかし自然の影響感化を尙ぶ施設としては國旗のなるべく大を望み、揭揚の高きを望まなければならぬし、その高揚塔は之に應ずるだけの高さを有し、堅固を要し、猶その上に美的であることとこそ望ましいものである。

竹一本、丸木一本でも差支はないが、右の趣旨から言つて殊に危險があつてはならぬものとすれば、相當な經費を以て完全を期しておくがよい。

いまだ、之によつて不祥事を起した例はない樣であるが、愼重を重ねておくがよい。

第四節　施設指導の實際例

一、目的　我建國の精神を具現し我民族の志操を表徴したる日章旗の尊嚴を領會せしめ、以て、日章旗を敬重せしめ、進んでこの國旗に內在せる民族精神の體得と實現に努力せしめんとするにある。

二、日時　六月十一日午前中。

三、方法

(一)學級に於て行うもの

1、教室を裝飾　2、國旗の交叉

3、造り物　4、小國旗徽章佩用

(二)學校として行うもの

1、國旗高揚式

(1)集合(高揚塔前)　(2)敬禮　(3)唱歌君が代

(4)國旗高揚　(5)最敬禮　(6)國旗敬仰の辭(兒童代表者)

(7)萬歲奉唱

2、講話　引續き國旗に關する講話を爲す(約卅分)

3、宣傳行列　數組に分つて國旗行列を爲す。國旗尊重宣傳歌を奏し、要所に於て路傍發表を爲す。正午終了の豫定。

第五節　施設參考資料

國旗高揚塔建設奉仕の實際

一、學年自治會決議事項—會議の實際省略—

=自治會記錄拔粹=

1、目的　國旗の本質を明かならしめ、その精神の體得實現を期し、併せて卒業の記念とする。

2、方法

イ、金額　總見積貳百五十圓

ロ、塔の高さ　五十尺(地下四尺)屋根より十二尺

ハ、土臺　鐵筋コンクリー

=國旗高揚塔落成式=

ト

ニ、國旗　大國旗　毛織物　金九圓五十三錢　落成式招待費

ホ、揭揚方法　宮城遙拜（每月一日）、神社參拜當日（每月十五日）及祝祭日に揭揚する。　金貳圓十三錢　獻物費

ヘ、各學級祝賀會開催　金四圓　樂隊費

ト、學年發表會開催　金貳圓　雜費

3、經費大要

金貳百七十五圓三十一錢

內譯

金貳百四十五圓　工事費

金參圓六十五錢　裝飾費

金六圓　神官謝禮

金參圓　設計費

4、落成式の大要

式次

イ、入場　ロ、敬禮　ハ、修祓

ニ、降神　ホ、獻供　ヘ、國旗揭揚（唱歌君が代）

ト、齋主祝詞　敬禮　チ、祭主祭文　玉串拜禮　兒童代表者）敬礼

リ、校長祝詞　玉串拜禮　ヌ、來賓祝詞　玉串拜禮　ル、工事者玉串拜禮

ヲ、齋主玉串拜禮　カ、昇神　敬禮　ヲ、撤供

タ、敬禮　レ、退場

5、齋主祝詞

此乃廣庭乎掃清米菅薦乎伊豆乃莚登彌淸敷伎招奉里座奉留天照皇大神乃大御前又此所乎守里給布大神乃御前爾神職畏美〳〵毛白左久八十日日波有禮抒毛今日乎生日乃足目止撰比定米豆此所爾大國旗高揚塔乎造里建設介奉里志事乎告奉留登志氐稱言意奉良久波干早振違伎神代天照皇大御神磨多乃御名袁日乃御神登言布其乃御德太陽如天地袁照志育久美永遠仁並布物乃奈久用羅伎止德爾與里豆現波禮給布建國乃大皇謨加天照其大神其禮御自體爾座志給布大御神波直知爾大陽爾太陽止同志久遠伎古與里涯知禮奴未來迄天地乃人々仁君臨座未須御意爾有里多禮婆此乃尊伎大御心子曾日乃丸乃旗爾現波禮給比我日本乃建國乃御心雨座志〳〵豆明治三年正月二十七日乃布告第五七號仁與理豆始米豆日章旗乃制式加布達勢禮實仁帝國乃國旗波定未良禮給比志隨仁國民波皇大神乃御德袁仰伎尊比奉里國祝仁波家每仁揭揚志奉里千年萬年乎言祝奉里祝奉里今日奈毛明治節乃日仁當里奴禮婆此乃美波志伎大國旗揭揚塔設立留神事仕奉里奴仰毛此乃大國旗揭揚塔波去年乃頃與里西田爲次等波燒鎌乃敏心振起志文學布傍西爾東爾暑伎日毛寒伎日毛弛事毛久數多乃忠實人乎誘導語勸米道乃心有留友乃助仁教師乃許袁得豆今日奈毛竣成乃御祭仕奉良牟止志豆奉留幣帛波色毛變良ぬ五百枝榮樹

留木棉取乘天御饌波和稻甫荒稻波御乃酒波瓶乃上高知利瓶乃腹滿天竝ゝ山野乃物波 甘菜辛菜青海原乃物波鰭廣物鰭狹物澳津藻菜邊津藻菜爾至良萬傳机代爾置足志豆奉久乎平介久安介久 所聞食天自今後波雨降風吹止毛崩體損布事无久傾久事无久青空高久日乃御神立榮志米常盤爾堅盤爾世爾立行

技氏學生等仁此高尊伎御德伎仰加勢給比又此事起豆勤志牟人等加心乃柱乎太久堅久 固米志米 彌畧々仁嚴乃雄心振起志勤米締里豆怠留事奈久漫牟事无久學生等乃心毛安久精神乃與留可伎柱止奈良志米給比寄支譽有留愛國心乃原支者多仁出佐勢給比遠久普久護給比氐幸乃 高加良牟事波築立留柱彌高其御惠廣良牟事波塔乎建上志校庭塔乃彌廣爾遠久悠久立榮志米給閉登畏美畏美毛白須

6、祭　主　祭　文

（自治會長・西田爲次）

維時昭和戊辰十一月三日德島市立德島高等小學校本年度卒業生二百五十名、恭しく壇を天神地祇の御靈の前に設け、淸酌庶羞の奠を具し謹み畏み申し上げます。

大國旗高揚塔建設の工事茲に竣行、本日の佳辰をトして落成式をあげらる。洵に私達一同慶賀に堪えません。

抑も私達が此の事業を計畫いたしました理由は團體愛護と國旗敬仰の國民的信念の發揚の外ありません。由來我國は明治の中興以來日進の勢を以て進み今や世界三大强國として宇宙に雄飛する狀態となりました。然るに淺薄なる文明の餘弊漸く崩して建國の歷史や國民文化の特長を無視するに至りました。而して輕佻詭激の思想を抱くもの或ば浮華放縱に陷るものなど擧世混屯たらんとしてゐます。

畏くも先帝陛下には時勢を御憂慮のあまり大詔の煥發となりました。

我國文化の紹復、國力の振興は國民精神の涵養振作に待つ旨を仰せ出されました。私達國民としては誠に恐懼措く所を知りません。只管聖訓に恪遵して忠良なる臣民となり醇厚なる子孫たらんことを期するのみであります。

斯の道は、蓋し國民としての情操を健確にし道念を崇高にして國體觀念を涵養し世界の文化の長所を學ぶと共に我が國體の精華たる淳風美俗を發揮する事に精進して大和民族としての特異の文化を創造し增進し世界の精神的文明の發達に向つて、一大光明たらんことを期さねばなりません。

惟ふに國旗は即ち我が建國の歷史も我民族の精神も打つて一丸とし表したものであります。國旗を尊重する精神はやがて其の國家に對する愛敬の念に外なりません。

私達本年度卒業生自治會が、この見地からして世を擧げて御大典に奉仕せる秋に際し榮ある卒業記念として大國旗高揚塔建設の儀を十月四日滿場一致を以て決議いたしました。幸に恩師各位の私達の微衷を贊して頂き、熱誠なる御指導を爲し下さつた結果、今日かくの如く完全に美的に竣工した次第であります。

因より私等微力のいたす處規模の小なることは今更申すまでもありません。しかし乍ら私達が今後實社會に出て活動するに際しそも靑空に翩翻としてひるがへる此の大國旗を見るごとに私達の同窓が夙起して宮城を遙拜し、或は神社に參拜して祈願をこめられてゐる事を思ふとき、私達の胸に大なる鞭撻を加へてくれるでせう。かくして私達は自己の人格を完全することによつて國民文化を充實し、また國民文化を充實することによつて人類文化の進歩を圖る機緣としたいのであります。

茲に赤誠を披瀝して私達の衷情をのべ天地神明にお誓ひいたします。

7、學校長祝詞

第十章　日の丸會

天高く氣澄むこの十一月三日明治先帝の御德を偲び奉るべき今日の佳き日を選ばれまして玆に大國旗高揚塔の落成式が擧行されました。不肖その席末に列するの光榮を擔いました事を深く感謝いたします。

この大國旗高揚塔の建設が明年の三月卒業せらるゝ諸子の卒業記念事業として自發的に自計的に生れましたことについて特にその感を深くする次第でございます。

顧みまするに今日我國民の狀勢が稍もすれば古來よりの日本精神を沒却し剩へ新興日本人の大使命に反するが如き精神態度に出づるものさへあるやの事を耳にいたします誠に遺憾に堪えぬ次第で御座います。

かくの如き渦中に立ちまして專心研鑽の業に樂しむ諸子の手によりまして日本精神の尊嚴なる象徵であり、大日本帝國の神聖なる代表であるべき國旗の揭揚さるゝ高塔が建設されました。諸子が美しき善き尊き御旗精神の體得に資せられんとするは勿論、之を仰ぐ凡ての國民にこの念願を頒たんとの希求の爲めに生れました。

この大國旗高揚塔は今後永久に一大光明と一大暗示とを我々日本人になげかけて、日本精神をして一大飛躍なさしめる事でありませう。玆に諸子の着眼とその努力とその價値の偉大であり、尊嚴である事を思いまして共鳴感謝歡喜措く所を知らない次第であります。

申すまでもなく國旗は、いろ〳〵の方面からその內面に存在する生命を把握する事ができませう。今玆に其の一二を考察して見たいと考へます。國旗が白地である事は純潔なる精神即ち平和を意味するものであります。日の丸の圓形である事は圓滿なる精神即ち自他無別を以て誇とする東洋の君子國としての仁愛を意味するものであります。

進んで考えて見ますと日の丸を畫ける國旗は日本の國號にかない大陽の東昇西沒は恰も我國の新使命を思わしめ更に國運の隆昌さながら旭日昇天の勢ある感を深くせしめています。

畏くも先帝陛下には時勢の狀勢を御憂慮のあまり大詔の煥發となり、我國文化の復興、國力の振興は國民精神の涵養振作に待つ旨仰せ出されました。

私達國民として誠に恐懼措く所を知りません。只管聖訓に格遵して忠良なる臣民となり順孝なる子孫とならん事を期するのみであります。

その道は蓋し國民としての情操を健確にし眞念を崇高にし國體觀念を涵養し世界の文化の長所を學ぶと共に我が國體の精華たる淳風美俗を發揮することに精進して大和民族としての特異の文化を創造し世界の精神的文明の發展に向つて一大光明たらん事を期すべきであります。

惟ふに、國旗の表象であり燦として、かゞやく日章旗は、即ち我が建國の歷史も我民族の精神も打つて一丸として表はしたものであります。國旗を尊重する精神猶大陽の常住永久に貴踐の高下美醜の區別なく森羅萬象に對して成長の活力を與えつゝありますことは我皇室が萬世一系天壤無窮にして我等臣民に對して無限の恩惠を垂れさせ給うに異ならないのであります。

かく國旗に內在している精神こそ日本精神とも申すべきでありまして今後我國民の日夜胸裡から離してならないものであります。諸子はすでに國旗に內在している日本精神の體得者であります。本日の機會を今後益々全衆に先んじて我が國旗の正しき揭揚法の實現と國旗の尊嚴に對する一大信仰の體得と其の深奧なる精神の表現に努力せられまして全衆が協和し日の丸の旗下に於て全一活動をいたします事によつて新興昭和新日本の一大使命を果しまして以て世界の平和と幸福の爲に寄與貢獻せられん事を切に切にお願いいたします。

世界的國家的大意義をもつ本日の式典に際しまして感ずる處を述べまして諸子の覺悟を促す次第であります。

兒童觀想

‖青山信一‖

1、大國旗高揚塔に就いて

私等卒業生一同の計畫によりまして玆に高揚塔が設立されました。

抑も我が國は明治維新以後實に長足の進歩を遂げ國富は俄かに偉大なる巨額に達し、それがために國民は安逸遊惰そのものに流れ華を好み實に就く事を嫌ふ樣になりました。

この樣な浮華放縱生活を營みしため我が帝國の道德は廢れ遂には帝國の國體を輕視するが如き傾向が國民の間に表れて來ました。

現在の如き狀態を以てこの大御代を過すことは到底出來ない事であります。

この弊風を一掃して國家を安泰におき益々國威の發揚につとめるためには、何處までも、日本精神を發揮する事に努力せなければならないのであります。これが私等卒業生が國旗高揚塔を建設した所以であります。

抑々帝國の國旗は純白の地に眞紅の日の丸であつて、白は平和沈靜を表し、赤は熱烈活動を示す。何れの列國に於ても國旗の制なき處はない。然れども我國の國旗の如く邦家の歷史、國民の理想を率直に物語るものはない風に飜る國旗を望めば極めて鮮明にして純一、端正にして雄大なるは他にその類例を見ないのであります。

我等はこの大高揚塔に揭揚されたる國旗を敬仰する事によつて我等の使命の大なる事の自覺をうながされます。

現在よりも將來社會の一員となりたるときこの高揚塔上の國旗を仰ぐ事によつて、どれ位日本人としての生活に意義あらしめる事ができるかを思ふと誠に頼もしい事であります。同時に、現在並に將來本校に教をうくるものは之を俯仰して如何なる精神的教育が受け得られる事であるか、誠に尊い使命を持つ國旗高揚塔であります。

2、感　想

‖相村トメ‖

今日思想界は徒らに西洋思想に幻惑されてゐる。我國體の本義歷史の特色を忘れてゐる。その思想を打開するには、我が日本國を象徴してゐる國旗、大和民族性を象徴してゐる國旗を尊ぶ事が第一である。

それで愛國心を旺盛ならしめることを目的として我等三學年一同は卒業記念事業として國旗高揚塔を建設するの計畫をしたのである。

世界の何れの國にも國旗がある。國旗は無意味に制定されたのではない。必ず國民の性情や趣味がその基調となつてのものである。

我が國旗は世界各國の國旗に比して最も威勢よく又高尙である。而して我國民の氣象と國運とを表してゐる。而して旗の地色は純白で我國民性の淸廉潔白で一點の汚れもない事を表わし、日の丸の眞紅は熱烈なる氣象を表わしたものであつて、而かも希望に滿ちみちた日の出の樣が思はれる。

白地に赤く日の丸染めて
あゝ美しや日本の旗は
朝日ののぼる勢見せて
あゝ美しや日本の旗は

とは、その眞を穿つてゐる。その尊敬すべき日章旗をふりかざし、熱烈勇壯な氣象を以て國威を海外にかがやかし父祖の代より受けついだこの日本をして益々强大な帝國となす責任は我々である。

校舍の一隅に建設されてゐる國旗高揚塔、その上に飜る日の丸の大國旗、何處から見ても高く聳えて見る事ができる。これを眺めて見る人々の胸には强く〳〵大和魂が燃え立つ事であろう。

あゝ尊い大國旗高揚塔

第六節　參考資料

（一）講話資料

1、國旗に關する講演

‖堀　賢　雄‖

□國旗と寺島外務卿の意氣

明治七八年の頃、帝國政府を訪れた某國大官がある。

「國旗（日章旗）を五萬圓に購入したし、余が國流血の惨を見ると雖も貴國の如き立派なる國旗の制定をなす能はず、何卒權利を賣却されたし」と。

明治新政府となりて日尚淺し、國費膨張財源なし、時に五百萬圓垂涎萬丈但し時の外務卿寺島氏には、我大日本の血潮が湧き返つてゐた。純然たる大和魂の持主であつた。

「御相談もものによるでござらう」と卓を叩いて立ち上つて、某國大官其意氣におそれ鼠々として退出したと。

此一事誠に痛快千萬。我また日本國民はこの一挿話を聞いても我日章旗に對する愛着の念を深うするものである。

× × ×

□乃木將軍の村人に對する國旗觀念啓培

それは、將軍が奈須野に陰退して芋作りや茄子の栽培や鷄の飼養などに悠々閑日月を送られてゐる時であつた。

此頃將軍と村人とは次第に接近し、將軍が東京へ出られるといつも村人のために土產を買つて歸られた。

「乃木さんは東京へ出られたさうだ、何の土產を下さるかな」

そんな話が諄朴な村人たちの仕事休の折に出る。

乃木さんの此度のお土產は二尺に三尺の日の丸の旗でそれに金貳拾錢也を添へられてあつた。

「おや旗を下さつたぞ」

「お金まで添へて下さつた」

しかし、此金二十錢也は忽ち村人の問題となつた。

「この二十錢は何に使へと言うのだろう」

いづれの人々の頭にも疑問となつて殘つたが結局有志の會議まで開いて旗竿を買ふことに一決した。

將來のお邸には國旗の高揚塔がある。そして、國家的祝祭日には必ず國旗を揭揚される。翩飜とひらめく乃木將軍邸の國旗を見ては村人は何を置いても國旗を軒に出した。かくして將軍は無言の中に村人を敎化して行つたのである。

將軍は色々の場合各所に招待される事が多かつた。其門に國旗が出されてあるといつも微笑を含んで這入られたが、若し國旗が出されてない場合は其のまゝ歸つて來られたさうである。

將軍の國旗尊重の念は誠に高いものであつたと言わねばならぬ。

× × × ×

諸子は本日日の丸會によつて我國旗の尊嚴なること、又世界多くの國旗中我國の國旗が國民性にも國號にも合致してゐる事を十分領會された事と思ふ。

どうか本日の此習を記念として將來民衆に先んじて國旗を尊重し併せて國家的國民的行事の際は必らず各戸に掲揚して民族精神の發揮につとめられたい。

2、國旗の意義と各國の國旗

國旗はその國の國章である。國旗の存する處その國の誇りを表し責任を表して居る。世界の各國で苟も獨立せる國家には何れも國旗がある。而して夫等は、單に無意義なものではなく、夫々其國にとつては由來あり、歴史あるものである。今その主なるものをあぐれば、

（イ）英吉利

英吉利の國旗はユニオンジャックと呼ばれており、中央の十字の赤はイングランドの守護聖たる聖ジョージ記章X形の白十字はスコツトランドの守護聖たる聖アンドリューの記章、其白十字の上に重ぬた赤十字はアイルランドの守護聖たる聖パトリツチの記章である。

（ロ）佛蘭西

佛蘭西の國旗は、度々變遷を見て定まる處がなかつた。現今のは一七八九年佛蘭西革命の際巴里の市民が青色の二色の帽子をつけて自由、博愛、平等の心を表したので此色をとつたとのことで、中の白は當時王家の色として用ひられてゐたので、つまり巴里市民と王家との和解を示すものとも云われて居るが說は區々である。

（ハ）伊太利

此旗は一八四八年の制である。中の白地の王冠を載せた十字の記章は現王宮サボア家の紋章である。これを除くと、一寸佛蘭西の國旗に似て居るのは、ナポレオンが伊太利を征服した時一八〇五年に赤白緣の三色旗を制定したのを、後イタリヤ統一黨がこれにサボア家の紋章を加えたのである。

（ニ）獨逸

帝國時代のものは、横に黑白赤の三條が並んで居たが、共和國となつてからは、黑赤金の三色旗となつた。これは米國南北戰爭の時奴隷開放の自由の象徴として用ひられたものである。しかし、今も尙以前の國旗を掲げ祝祭日には新舊の國旗が混合して立てられて居るとの事である。

（ホ）アメリカ合象國

横の七條の赤と六條の色とは獨立當時の十三州を表したので、隅の白く星を出したのは聯邦各州を表し新州の增す互に之を加へ、初めは十三であつたのが今は四十八になつて居る。

3、日章旗の由來

太陽を崇拜して神とする事とする事は我國古來の習慣であり、天照大神は日の神であり、皇室の方々は日の御子と申し奉り、皇位を天津日嗣と呼んで居る。

其後日を象つて種々の徽章とする事は普く流行し、古來錦旗を初め、軍扇器物などにも之を表した。

德川時代には之を朱の丸と稱して、御用船の印とし幕末外國船が我近海に出沒するや彼我の船舶の區別をするの必要生じ、薩州藩主の島津齊彬は幕府の許可を得て日の丸をつけんと欲し、之を制定して差出した所、幕府でも

調査詮議の結果、我國の船々之をつけさす樣布告した。

安政六年には、陸上にも之を用うるの令が發せられ、明治三年には國旗の制定にあたり、愈〻日の丸を其日章とするに定め、明治五年十一月には、全國に布告して祝祭日には人民一般に國旗を揭揚すべきこと並に開港場にある縣廳には常に之を揭ぐべきことを命ぜられた。

我國は國號が日の本であり、地球上の位置より云ふも、東洋であり、しかも其東にある國として一日中の始めにある國である。此日章旗は實にふさわしい。

4、日章旗の精神

東洋、日本、日の神の御國として日章旗、それは實に榮えゆく國の象徴として美しい意味のものである。

日は世界を照し、萬國に其慈光を投じて居る。我國も建國以來三千年、國威隆々として今日に至り、今や世界の强國として國威四海に輝いてゐる。

しかし我大和民族は將來一層文化の發展を圖り、その大理想を實現して、世界各國の先驅となり、指導者となり、天地の公道によりて惡を懲して弱を救い、無邊の光を投ずるの時を作るべき象徴とも見られる。

而して、國旗の地の白色は一點の汚れなき潔白純美の國民性を表したるものであり、赤の日の丸は赤誠燃ゆる大和心を表したものであるとも見られる。

我國の國旗は恐らく世界各國の國旗中最簡明なものであろう。しかもこれ程純美にして意義尊き象徴のものはない。我等は日章旗を見る度に云ひ知れぬ懷しさと、そして誇らしさと强よ味とを感ずるであろう。

我等は此尊き日章旗の益々赫然として、地球の各方面に飜るべく期する所がなくてはならぬ。

5、國家の慶弔と國旗

國家に慶弔ある毎に、國民は國旗を立て、其情を表す。三大節祝日等に立てるのは國民としての喜びを表す爲めである。

皇室の御慶事や、高貴の方々の奉送迎や、戰捷、出征、凱旋等に之を立てるのは矢張り國家的精神を表す國民の衷情である。

學校の開校卒業式等に用うる事はやはり國民としての意識の表れである。國旗のある所國家意識は勃然として漲る。尙、國家の凶事の際には弔旗を揭げる事がある。これは、竿球は黑布を以て蔽い、旗竿の上部に黑布を附することである。

しかして國旗は、國家的精神を表したものであるから、輕々しく立てたりしてはならぬ。

6、船艦と國旗

艦船が外國の港に入る時は、其の國の國旗を揭揚すべき事になつている。外國在留のものが、一日海岸を望んで居る時、日章旗を立てた船が勇ましく入港するのを見たとき、云い知れぬ懷しさと心强さとを感ずる相である。

さもあるべきことであらう。其他外國にある大使館、公使館、領事館等にも國旗を揭げる。

7、國旗と感激

1、外國を一人で旅行して居るとき、言葉も風俗も全く知らぬ外國人ばかりで、ほんとに云ひ知れぬ淋しさと心細さに襲われるときがある。

そんなとき何處かの町はづれ等で、領事館などがあつて其上に飜つて居る日章旗を見出したとき、もう全く蘇

生の思いをして急に元氣づく。

2、異國の港に住んで居るとき、日の丸を立てた船が這入つて來ると、急に强い心になつて、其港が全部我物になつた樣な氣がする相である。

やがて氣船が出てゆく時は、忙しい仕事も止めて、何處までも〳〵國旗や船の姿の見えなくなるまで靜乎と見送るのが常だそうです。

3、委任統治の南洋島では、毎日校庭の竿頭高く日章旗を揭げる式がある。旗が竿頭の半まで揭げられたとき、土人の小學兒童は一齊に最敬禮をする。その時は云ひ知れぬ嚴肅さと國旗の有難さが味わされる。

4、滿洲を旅行したときの或人の話に、「途中或日の夕方一隊の馬賊に襲われたので、こちらは、支那人の道案内の二人を伴れたばかりですから、どうする事もできません。それで最後の思出の積りで、持つていた日の丸を出して竿の先につけ、高く揭げた。所が馬賊は一齊に射擊をやめて何處ともなく退散してしまつた。日章旗の權威、つまり日本の力のありがたさをつく〴〵味つた。そして云い知れぬ感謝の涙を止めどもなく流れ出たのでした」と。

5、また或人の感激に、「私は紀元節の日公使館の三階に集りました。此市に在住のもの十七人は全部集合しました。其の室は日の丸の旗で裝飾してありました。皆は今日は特別晴やかな顏をしています。風に飜る館上の日章旗はいつもよりも一層輝しく見えます。……やがて「君が代の奏樂が終つた時、皆の目には云い知れぬ感激の涙が光つていました」と。

（二）文に現はれたる資料

1、日章旗と水戸烈公

＝木宮泰彦＝

凡そ國旗は國家の標號であるから、その國の歷史を語り、その國の國體を表し、その國の國民精神の理想を示すものでなくてはならぬ。世界いづれの國と雖も、國旗の制のない國はないが、我が日章旗のやうに鮮明で純一、端正で雄大なものはない。

しかし我が日章旗が國旗として制定ぜられるまでには、幾多の曲折があつたもので、それに就いても思ひ出されるのは、水戸烈公の功績である。

嘉永六年六月米艦四雙が浦賀に來つて交通を求めた時、我が國の上下驚愕して爲すところを知らず、幕府は水戸の烈公を起して事に與らしめた。その年の九月幕府は烈公の議を用ひ、始めて大船製造の禁を解いた。一度大船建造の禁を解いたのであるから、各藩に於ても、大きな船が漸次建造せられ、中には蒸氣船すら造るものもあつた。隨つて我が國に於ても、外國船と紛れない爲に、國旗を制定して船印とする必要が起つた。當時これを國旗とはいはず、總船印と稱してゐた。そこで幕府は有司に命を下し、意見を奉らしめたところ、評定衆は旭日を以て總船印となすべしと論じ、大目付、目付等は中黑を用ふべしと主張し、衆議紛々として、何等決するところがなくて終つた。

翌安政元年五月再び國旗制定の論が起つて、大目付、目付等は總船印には中黑を用ひ、幕府の旗には日の丸を用ふべしと主張した。當時烈公はこれに反對して、中黑は新田の中黑など稱して、古來源氏の旗印であるのに、これを大日本帝國の標號たる總船印に用ひ、日の丸を以て幕府の旗印とするのは、大小輕重を顚倒したもので、その當を得ぬ。苟も國意を代表して威を萬國に輝かす國旗には、日の丸でなくてはならぬ。幕府は中黑を以て印と

すべしと論じて、その旨を幕府に建議せられた。けれども大目付、目付等は前議を固執して動かない。そこで烈公は七月一日再び建議案を奉り、中黒を以て國旗とするの不可を論じ、日章旗の圖まで添へて寳見を述べられたので、幕府も遂に烈公の議を用ひ、衆議を排して、七月十一日次の如き發令があつた。

大船製造につきては、異國船に不レ紛樣、日本總船印は白地日の丸幟相用候樣、被二仰出一候。且又公儀御船の儀は、白紺布交の吹貫、帆中柱に相建て、帆の儀は白地中黒に被二仰出一候條、諸家に於ても白地は不二相用一、遠方にても見分り候帆印、銘々勝手次第相用可レ申候。尤も帆印、その家の船印にても、かぬて書出し置樣可レ被レ致候。右大船の儀、平常廻米外運送に相用候儀、勝手次第に候へども、出來の上は、乘組人數並びに海路乘筋運送方等、猶取調可レ被二相伺一候。右之通可レ被二相觸一候。

かくの如く烈公の努力によつて、我が國旗は光榮ある日章旗と定まつたのである。

後數年を經て安政七年、外國奉行新見正興等が北米合衆國に使し、條約の批准交換を行つた。この時始めて堂々日章旗を飜して彼の國に行つたのであるが、彼の國人はその壯烈な意匠を見て、驚嘆したといふことである。

國旗の制定はかくの如くであるが、その紋章の由つて來つたところは甚だ遼遠である。長くも皇祖の御名は天照大神、又は大日雲貴と申し奉り、大神一たび天の岩戸に隱れさせ給へば、天地爲に晦冥になつたといふのは、天日とその德を等しくし給へることを物語るのである。隨つて天皇の御位を天つ日嗣と申し、皇子を日嗣の御子日並皇子など申し奉つてゐる。聖德太子が小野妹子を隋に遣はし給ふや、その國書にいはく、「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す。」と。又いはく、「東天皇敬みて西皇帝に白す。」と。げにや我が國はアジヤの東方に位し、日出づるところの國である。旭日の輝々たる光は烈然活動のさまを示し、その眞紅の色は皓潔至誠の情を示してゐる。我が日本の標號とするに、日章を措いて他に何があらう。—おもしろい日の歴史の話—

2、日　章　旗

‖中　西　悟　堂‖

秋日の朝の町を私はゆく。
日章旗のひるがへる町を、
晴々しい祝日の町を、
私は心爽やかにあるいてゆく。
日章旗の何といふ純潔さ、
何といふ明朗さ、
私は祝日の國旗の美しさに心奪はれて、
皇子のやうに町をあるく。
町並のうしろになびくあをぞら、
あをぞらにひるがへる日章旗、
何といふ博大な心を示し、
何といふ光明の心を表してゐるのであらう。
あゝ晴やかに、麗はしく、
日章旗は町にひるがへる。
りう〳〵と流れる朝風にひるがへる。

私は日章旗が語る心を始めて知り、
その光輝に心奪はれ、
その單純さ、正しさに心奪はれ、
嬉々として爽やかに、
朝の町をあるいてゆく。
光榮の旗よ、
譽の國旗よ、
あゝ、樹々のみどりと、あをぞらと、
明るい人々の顏と、
燦々たる日章旗とに飾られた祝日の町を、
感動に溢れあふれて、
私は颯爽とあるいてゆく。

3、國　旗

―現代日本詩選―

‖尋三　增田　豐‖

今朝の朝會でありました。今日は月曜日であるから國旗けいやうがある。藤島先生の「右むけ右！」のごうれいで右へむいた。
五學級の級長、副級長が前へ出て國旗をのぼしはじめた。それと一しよに君が代の歌を歌つた。國旗が風にゆら〳〵とひらめいてゐる。唱歌がおはると國旗に最敬禮をした。そのとき又風が吹いて來て國旗のかげが土地の上をでゆら〳〵とうごゐた。朝會がすんで教室にはいりました。前の庭にはだれもいないが國旗のかげが土地の上をひとりあそんでゐました。

4、明　治　大　帝

‖石　黑　忠　惠‖

（1）梅醋で染めた日の丸の旗

明治二十七年十月二十五日に、戰地を一巡して來いといふ仰せを受けて、野戰衛生長官であつた私は、廣島を立つて朝鮮に向ひ、十一月二日に朝鮮の漁隱島を出帆して、三日には兵站司令部がある兀浦についた、司令官は陸軍少佐山縣俊信君であつた。私は其處の巡視を終り他に向けて出發しようとすると、司令官が、
「閣下、暫く御待ち下さい。實は今日天長の佳節に、閣下が此所へお出で下さつたことは非常に喜ばしく存じます。現在此所に居るものは、將校・下士卒・軍夫まで凡そ八十三人でありますが、正午には全部殘らず山の上に登り、盃を擧げて陛下の萬歲を祝し奉らうと存じます。閣下どうぞ此の音頭取をして下さい。」
といふ。私も大いに喜んで、
「それは結構ぢや。此方から願つても致したい。」
と馬を休ませて、頭のつかへるやうな厩舍へもぐり込んで、時の來るのを待つて居つた。其の内十一時になつた。司令官と山の上に登つて見ると兵站部で用意した酒が一樽、鏡が拔いてあり、又燒鰯を裂いて笊に堆く盛つてあつた。唯それ切りで、外には何も無い。すると山縣司令官があわたゞしく、
「どうも困つた事が出來ました。是迄用意は致しましたが肝心の酒を飲む盃がありません。」
と如何にも困つたといふ顏だ。なるほどそれは困つたと私も思つてゐると、司令官は俄に手を拍つて喜び出した。

「天佑々々、濱邊へ行くと牡蠣の貝が澤山ある。――閣下屈竟の盃が見つかりました。」

直ぐと從卒に命じて牡蠣殼を拾ひにやつた。暫くたつて二人の從卒が笊に一杯づつの牡蠣殼を拾つて、きれいに洗つて持つて來た。

時計はもう十二時に近い。皆山上に整列した。すると山の下から一人の人夫が駈け上つて來た。

「お待ち下さい、お待ち下さい。」

見れば手に日の丸の旗を持つてゐる。どうしたのだらうと一同の視線はその人夫に集注した。やがて人夫は私の前に立つて其の日の丸の紙旗を差出した。

「閣下、これを以て音頭を取つて下さい。」

といつて旗を私にくれた。私は直ぐにそれを受取つて、高く捧げつゝ、日本の方に向つて謹んで「天皇陛下萬歳」を三唱した。皆がこれに和した。それから皆飲め〳〵といふので牡蠣の貝で盛んに飲んだ。

其の時振つた旗を取つてよく見ると驚いた、半紙へ梅醋で紅く日の丸を染めたので、處々に未だ紫蘇の葉が附いてゐる。その紙を微粒で細い竹に張りつけたのであつた。私は其の牡蠣の貝と梅醋の旗とを鞄の内に入れて持ち歸つた。

大本營に於て、御前で此の事を奏上して、右の二品を出して御覽に入れた。すると大帝はぢつとそれを御覽遊ばされてゐられたが、そのうちに長れ多くも御眼に涙を御催し遊ばされた。それを拜して御前に立つてゐた私は勿論川上も寺内も野田も岡澤も皆感極まつて泣いた。

（32）　大尉の名を十八年間も

是等の事を奏上し終ると、

「其の司令官の山縣といふのは、あの十年役の山縣か。」

といふ御下問である。

「いかにも仰せの如く十年役に殊勳のありました山縣俊信で御座います。」

と申し上げた。是はどういふ事であるかといふに、明治十年の役に勳功のあつたものに對して、翌十一年にそれ〳〵行賞があつた。これが我が國で勳章の創制されて、軍人が武功によつて勳章を賜つた始であるが、當時尉官は最上勳五等、佐官が勳三等といふことであつた。即ち大尉以下は勳五等に止つたのであるが、中に殊勳によつて特に勳四等に敘せられたのが、此の山縣俊信唯一人であつた。

爾來春風秋雨こゝに十八年、當人は既に休退したのをこの戰役で召集されて、兵站司令官となつて出征したのである。

然るに大帝は今や率然として、「それは十年役の山縣か。」との御下問なのであり。恐れ入り驚き奉らざるを得ないではないか。幾ら軍功があつたにもせよ、一大尉の名を十八年間も御記憶遊ばされて、仰せ出でになるといふ事は何といふ有難い事であらう。何といふ長れ多い事であらう。其の晩、私は山縣に長々と手紙を書いた。此の君恩の忝さを特に謹んで御傳へ申すと書き添へた。

數日の後、山縣から返事が來た。

「十八年の久しきに及んで、賤名を至尊の御記憶に留めさせ給ふとは、實に何とも申しやうなき光榮の至りで、感激に身も戦く心地が致します。此の君恩に對する御報効は必ず私一生の内に致す覺悟であります。」

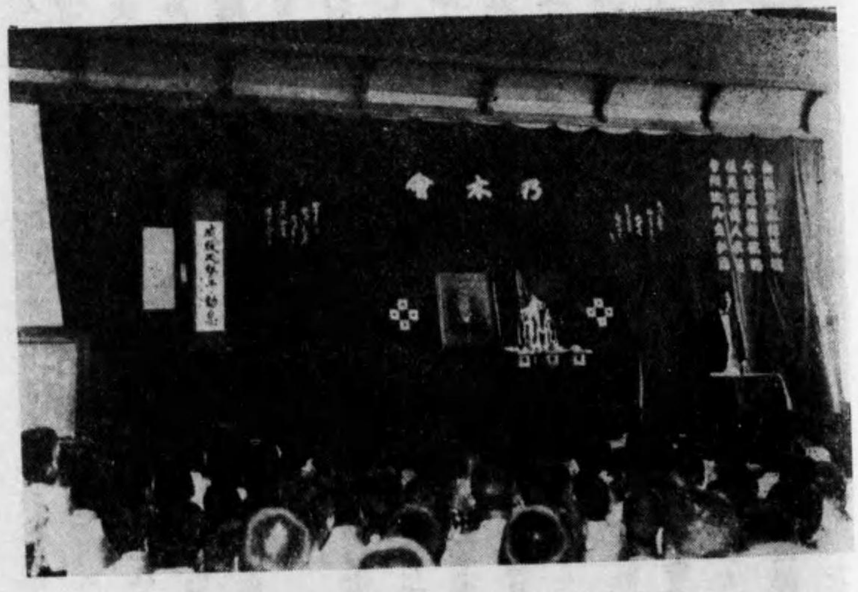
行事教育の實際

といふ意味であつた。

日露戰役に於ける常陸丸の最期は悲痛壯烈このものであつた。その誰に殉じたものの中に聯隊長須知中佐と竝んで近衛後備第一大隊長山縣俊信のあつたことは知る人ぞ知るであらう。山縣は此の樣に再び召集されて近來に入り遂にこの悲壯なる最後を遂げたのである。恐らく山縣が死ぬ時には天皇陛下が十八年間我が名を御記憶遊ばされたといふことを思ひ出し、感激に滿ちて陛下の萬歳を叫びつゝ安心して瞑んだであろうと、私は信じてゐる。—明治大帝—

第十一章
乃木會

【九月十三日】



……乃木會に於けるる參考物展覽及講話會……

第一節　乃木大將の略歷

乃木大將は長府藩士乃木十郎希次の第三子で嘉永二年十一月江戸の屋敷に生れたのである。大將の家は高百石の小身であつた。始め江戸に藩邸があつたが、後長府の町はづれに僅か六疊と二疊の二間に起臥して貧しい淋しい日を送つていた。

大將の父は子女の教育に尤も意を注がれた。

大將が十歳のある朝非常に寒かつたので、「おゝ寒む」と呟いたのであつた。父の希次は之を聞き咎めて、「そんなに寒いなら溫かくしてやろう」と、ゆうなり、大將をはだかにして、寒さにふるえる大將の頭の上から氷の樣な冷たい水を浴せかけたと言う位嚴格に教育したのであつた。

十歳まで江戸麻布の藩邸に育つたが、父が長府に歸る事となつたので、二十幾日を費し徒步鄕里に歸り、十六歳の時から叔父玉木文之進のもとで教を受けた。

玉木文之進は松下村塾を築いた人で儉素剛健古武士の型があつた。

十七歳の時、長州征伐があつた。そのとき大將は高杉晉作の手下となつて、小倉方面の敵と戰つた。之が大將の初陣でそのとき足に敵彈をうけた。

その後我國には、たび〳〵小さい內亂があつた。そのたび每に參戰して次第に昇進して行つた。

西南戰爭のあつた頃には、大將は中佐に昇進して小倉第十四聯隊長となつていた。そして高瀨・植木方面の敵と戰つたが、頗る苦戰を重ねた。そのとき聯隊旗手河原林少尉不幸にして敵彈に斃れ、亂戰の中遂に軍旗を敵に奪われてしまつた。あくまで責任觀念の强い處の大將は、一生その事を忘れなかつた。而して、如何にして其罪を謝せんかと終始大將の念頭から離れなかつた。

至仁至慈なる明治天皇は、大將の今日までの戰功を愛で給い、更に聯隊旗をお下しにならせられた。

十八年には陸軍少將に任ぜられ、步兵第十一旅團長に補せられ、十九年には歐洲見學、二十二年より二十五年の間には、近衞、第二、第五、第一の各旅團長に歷任した。

後臺灣から歸國されてから西那須野の別莊に退いて農事に從い土民と相親しんで暮した。三十二年再び召されて第十一師團長となり、その統卒指導にあたつたが、再び三十五年那須野の田舍に退いて暮した。

明治三十八年日本が露國と戰端を交うるや、留守近衞師團長となり、更に第三軍司令官として旅順攻圍の重任を仰せつかつた。

戰功多く明治天皇より勳一等旭日桐花大綬章及功一級金鵄勳章を授け給い軍事參議官の要職に任じ從二位に叙し、伯爵に陞爵させられた。猶凱旋の折御目錄に添えて少からぬ封金を賜つた。しかし大將は之を悉く幕僚に頒つて少しも身につけなかつた。

明治天皇は深く大將の高潔な人格に信賴し給い、明治四十一年學習院長をお命じにならせられた。

大將は常に衣服は概ね軍服で、食事は一汁一菜で煙草は朝日を常用とし外出は大抵馬、電車、若く

は辻車で用を辨ぜられた。

明治四十五年七月明治天皇御惱重らせ給うや、憂懼殊に甚だしく、崩御せらせられてからは殊の外哀慟いとも哀れに見えたが、九月十三日御大葬の當夜、御あと慕つて殉死し奉つた。

大將の高德を追慕するもの伏見御陵の下に一社を建てて乃木神社と稱して祭る。

第二節　施設指導の着眼點

乃木大將夫妻の人格の高くして國民の凡てから敬仰されている事はあまりにも明白である。

著者が小學校に於て兒童の崇敬人物を調査したときにも乃木大將が第一位を占めていた。

單に小學生に崇敬されているばかりでなく、德島縣の或郡に於て壯丁檢査をしたその際、彼等壯丁の崇敬人物を調査したその統計によると、

乃木大將	五〇	若槻首相	一〇
濱口雄幸	一二	豐臣秀吉	一〇
西郷隆盛	一一	楠木正成	八
東郷元帥	一〇	其他	

であつた相である。その崇敬されている程度が想像する事ができる。

言うまでもなく少年青年のみならず國民凡てのものの崇敬の的となつて乃木神社の創建となり神として永久に祭らるゝに至つたのである。

この忠烈にして武士道の權化である乃木大將及貞淑の典型たる靜子婦人殉死の日を乃木會として大將夫妻の人格を敬仰禮讃し以て誠忠純潔及貞淑節操等の高德に薫化せしめる事に着眼しなければならぬ。

第三節　施設指導の計畫

第一　乃木祭執行

既に度々述べて來た樣に感化教育に於ては特に環境の整理を必要とする。大將夫妻の感化を十二分に受けしめんためには、その準備がなければならぬ。その一つとしては簡易な祭式を執行するがよい。

寫眞を掲げ點燈し供饌をなし玉串を捧げて祭辭を述べる。

我國の神道の態度は言うまでもなく眼前に居ますが如き心持を捧げるのを以て本體とする。

よくその趣旨を明かにして常に誠意を以て行事にあたらしめる樣訓練づけなければならぬ。

第二　乃木神社參拜

附近に乃木神社のある處は參拜するがよい。

一日往復のできる處では、參拜遠足をする。

第三　參考物展覽會

大仕掛けでなくともよい。兒童の持合せるものを持ち來らしめ、職員の持ち合せるものを借り集め猶特別なものは有者から借りる。

書籍などは一時的のものでないから、一週間位文庫に殘しおいて休憩時に讀ますのがよい。

第四　演奏會

（1）蓄音機の演奏

近時は、隨分精巧な板も出來て來たから豫め教育的なものを多數選擇蒐集して聞かすがよい。一度聞いたものでも差支ない。度重るほど將軍夫妻の人格が益々光つて來る。

（2）琵琶歌彈奏

適當な人が得られるならば、その感化力もまた强い。

第五　發表會

將軍夫妻に關する兒童の發表會を催すもよい。

その場合は高學年、中學年、低學年と三部位に分つのがよい。

第四節　施設指導の實際例

一、目的　武士道の權化貞淑の典型たる大將夫妻殉死の日の記念として、その人格德操を敬仰せしめ、その感化を受けしめんとするにある。

二、時期　九月十三日第一時より。

三、方法

（一）乃木祭執行

講堂に祭壇を設け前面には乃木大將夫妻二子の寫眞を掲げて點燈する。神官の修祓に始まり降神供饌玉串拜禮、敬仰の辭、昇神撤饌に終る。

できるだけ環境を壯嚴に準備をなす。

（二）發表會

順序

イ、入場　ロ、敬禮
ハ、開會之辭—兒童代表者　ニ、兒童發表
ホ、講演　ヘ、演奏
ト、閉會之辭　チ、敬禮

◆參考

（1）發表會プログラム（男子部）

1、忠烈乃木大將　木内忠義
2、面影　大野正道
3、乃木將軍　米田源太郎
4、乃木祭　住田重雄
5、乃木大將の孝行　金崎清
6、乃木將軍を敬仰して　佐藤正雄

(2)發表プログラム(女子部)

1、乃木夫人の平常生活　藤重ヤスエ
2、三越の丁稚を驚かした夫人　本橋トモ子
4、靜子夫人のみかんの皮　高木さわり
5、經濟上明るい夫人　須藤信
6、旅順攻撃の際の夫人　橋野好枝
7、平生の御生活を忍んで　小川カツ

(3)閉會之辭

1、乃木會開會の辭　＝女子部自治會長＝

九月十三日。本日はまことに意義深い日であります。日露戰爭の際に於て自己の生命と財産も忘れて、只管國家の爲に全心身を投げ出して國威を國の内外に輝かす事を念願としたる乃木大將。今日はその大將夫妻が、明治天皇の御葬儀の日に殉死したのを記念として、これを追憶敬仰せんとするのであります。

乃木大將夫妻が如何なる人格の人であるかは、さまで必要のない事でありませう。だが、今日は皆さんの乃木靜子婦人の生活事實についてお話しをしていただき、私達の將來の修養としての參考資料といたしたいものであります。

今日の教育の中心眼目は世の文化におくれない事であります。進んでは新しき文化を創り出す事であります。女子と雖もこの進運に掉して良風美俗を創り出さなければなりません。

平素質素儉約に德操を磨き將來母となつた時は子女の教育に注意し國家に有用なる人物を創り出す樣、乃木靜子夫人を横範として修養して頂きたいのであります。

以上の詞を述べて開會の辭といたしておきます。

2、乃木會閉會の辭　＝女子部自治會副會長＝

日本の凡ての人々から尊敬され敬慕されてゐる乃木將軍及夫人の命日であります。本日、本會が催されまして何等のよどみなく玆に終了いたしました事は誠に喜ばしい事であります。只今皆樣が發表して下さつた樣に貞淑の點に於て又處世養育の點に於て何一つとして、世の母なり私達なりの手本とならぬものは有りません。

殊に質素儉約を生活の唯一の信條として經營なさいました靜子夫人の如き婦人が多く出る事によつて今日の日本國家の經濟國難が容易に打解される事と信じます。どうか皆さん之を機會に靜子婦人の心を鑑とし修養の上に一般の努力を拂はうではありませんか。

(三)參考物展覽

兒童その他より集めて之を講堂に展覽し各學級に於てこの趣旨を兒童に傳導し之が提出及陳列に當らしめる。

之が觀覽は各兒童をして展覽中隨時數回に亘りて參觀せしめる。說明を要するものは學級每に團體として集合實地に就て說明を爲す。蒐集したる參考品の一部の例を擧ぐれば、

1、乃木大將のイロハ敎訓
2、乃木將軍寫眞畫報
3、明治卅七八年戰爭
4、陸軍寫眞畫報
5、乃木大將夫人繪葉書
6、乃木大將の書
7、乃木大將の畫
8、乃木大將繪葉書
9、乃木大將の寫眞帳
10、乃木大將の屛風
11、乃木大將畫本
12、乃木大將實傳
13、乃木大將寫眞畫報
14、乃木大將書の敎育勅語
15、乃木大將繪葉書
16、乃木大將眞筆掛軸
17、乃木大將一代記
18、乃木將軍と東鄕大將
19、乃木大將寫眞帳
20、乃木大將殉死當時の新聞綴
21、馬上の乃木大將
22、乃木大將の銅像
23、乃木將軍木像
24、乃木將軍傳
25、乃木大將の書
26、乃木大將夫人の像
27、乃木大將夫人の辭世の歌

=以下省略=

(四)乃木忠魂堂參拜

眉に中腹にある乃木忠魂堂を參拜して花を供え洗米、鹽、淨水を祭り獻燈する。

各學級每に團拜を爲す。

第五節　參考資料

第一、兒童發表參考資料

1、乃木將軍の忠義　=木內忠義=

明治十年彼の名高い西南戰爭に殘念にも乃木少佐は敵の爲めに聯隊旗を奪はれました。聯隊旗を奪はれた事は軍人として此上もない不名譽である。聯隊長心得としての面目が相立たぬ。陛下への申譯

だ。最早之までであると無念の眼をカッと光らせ、敵の方をにらめつけながら腹十文字にかき切つて自刄しようとしました。其の間一髪、「乃木少佐殿早まつた事をなさいますな、今左樣な事をなすべき時ではありません。」と一人の伍長がその手を捉えました。

「いや、私は申譯の爲に死ぬのです。」

「死んで申譯が立ちますか、聯隊旗を奪ひ返さなければなりません。」

と、言はれて乃木少佐も、「あゝさうだつた、このまゝ死んでは君に對して却つて不忠の至りだ、聯隊旗を取り返すまで陛下に捧げた命は自分で預かつて居やうと決心し、それより苦戰苦鬪遂に聯隊旗を奪ひ返す事ができました。

しかし、乃木少佐は既に負傷し病院へ送られる身となつてゐました。久留米の病院に送られた乃木少佐は身に少からぬ傷を負ひながらも、もう全快したから早く戰地へ出して呉れと言ふのでありました。「いけません。傷がすつかり治るまで病院に居なければならない。」と言つて、病院では無理に引留めておいたのでありました。

然るに、いつの間にか乃木少佐の姿が見えぬ樣になりました。連日の苦戰を思ひ今頃自分の部下達が苦しみながら戰ひを續けてゐるだろうと考える時、乃木少佐は、もうじつと病院に居られなくなつたので、人目を忍んで病院をぬけ出したのでありました。

こちら病院では、乃木少佐が居ないと言うので大騒ぎに騒ぎ立てて居る頃、乃木少佐は、「進め！」と云ふ號令の聲勇ましく指揮刀を揮つて戰地をかけ廻つてゐました。

之から乃木少佐は脫走將軍として名高くなつたのであります。其の後木の葉、王名、高瀨などに目覺しい戰鬪を續け遂いに西南戰爭は終りました。

日清戰爭の時は少將として出征し、金州、旅順、臺平、大平山、田庄臺等にて戰功を立てました。

日露戰爭の時は第三軍司令官として難攻不落と言はれたあの名高い旅順を陷落させたのは、世界何人も知る所であります。

殊に南山の戰には長男の中尉乃木勝典を失ひ、次で次男の保典も旅順で花々しく戰死され玆に乃木大將はたつた二人の子を失つてしまつたのであります。部下の將卒は心中を思ひ暗然とせずには居られなかつたが、せめても、と、その死骸をビスケットの空箱に收めやうとすると、夫れを見られた將軍は、「何故私の兒ばかりそう鄭重にするのだ。構はないからそれは捨ててしまへ。」と、之を聞いた部下の將卒は何れも暗涙に咽んで將軍の精神に感服してゐるのだ。

身命を捨てて盡しました。凱旋された時、或人が二人の御令息を失はれた事について悔みを述べました。處が大將は二人の子供が死んで呉れたばかりで、之で私も戰死した遺族の人々に顏が合す事ができる。」と、云はれたそうである。何と言ふ貴い言葉でありませう。我子を失つて嬉し涙を流すものがあるでせうか。此一言でも如何に忠誠であつたかと言う事が知られるのであります。

2、經濟に明るい乃木夫人

‖須　野　信‖

乃木靜子婦人については、先生や其の他の人々によつていろ〳〵お話しになられました。何れも私等のとつて以て模範とすべき德ばかりであります。或は皆さんが本でお讀みになつてお知りであるかも知れませんが、經濟を中心とする夫人と題して本で讀んだ處をお話しいたします。

靜子夫人は安政七年十一月二十七日に鹿兒島新屋敷の湯地氏の七番目に生れられました。

五、六歳の頃早密柑の皮を利用しまして、大人を驚かされました事は皆さんも既に御承知の通りであります。この

お小さい頃から節約利用の道をお考へ遊ばしてゐられたのであります。

乃木家では、毎朝四時半に御起床になり、將軍が庭のお掃除をなさる間に、夫人はたすきがけで拭掃除から炊事

までなさいまして、七時の朝御飯まで不斷のお働きで、晩は十時にお休みになります。お休みになるときは常に

御自身でお床をのべられます。

それで女中は大變樂ですから、同じ將校の家の女中は乃木家の女中を羨しがつたといふ事です。

將軍は聯隊長時代まで何時も木綿の着物に小倉の袴を着用していらつしやいましたが、將軍におなりになつてか

ら殆軍服の身でした。勿論靜子夫人も木綿物を用ひておられました。寢具の如きも粗末な木綿ぶとんをお用ひに

なりました。

或冬の日長男の勝典が夫人に向つて、「母上はさぞお寒いでせう。やはらかいおふとんで暖くお休給ふやう」と言

ひました。夫人は「この木綿のふとんで結構であります。御身等も奢侈に流れぬ樣に心掛けなさい」と諭しまし

た。大正十一年の秋、或人が那須野の乃木神社に參拜して御令弟の大館氏の御優待をうけ、「兄が座つて居た所で

食べてゐた御飯をさし上げます」と、おつしやいますので、喜んで頂戴いたしました處、麥粉の御飯に煮出しの

入らぬ菜葉のお汁に青菜の御漬物でありましたので、その人はびつくりして、「本當に將軍御夫婦はこんな生活を

遊ばしたのですか」と申しますと、「兄や姉の食事としては好い方です。人間は平素から困難缺乏に堪える習慣を

作つて置かねば戰爭の時體力が堪えぬからといつて、ひえの御飯を食べられました。ひえの御飯はとてもお口に

會ひませんから差上ません、豆腐でもと思ひますが停車場まで半里行かぬとありませんから」と申されました。

一代を通じての此御暮し私共のぜい澤が本當にはじられます。

夫人の御炊事は大根のお汁に漬物位です。そして大根も細い處は皆すててしまひますが、夫人は「これも百姓が

難儀して作つたのであるから」と、言つてつけておかれました。すると大根は細いのですから、すぐしほがしみ

込んでお香の物となります。それを御飯の御菜になさつて何時も心安いお客樣がいらつしやいますと、お茶とそ

れをお盆にのせて出されました。誠に濟みませんが、貴方に出しますお菓子代は可愛相な人々を救ふ用に足しま

すから、あなたのなさる慈悲となるのですから」と申されました。そして新聞に哀れな人々の記事が出ますと、

夫人は手紙をそへて二十圓、三十圓と爲替にしておくります。もらつた人は誰方であらうかと思つて見ても名前

が書いてないのです。

實に日本婦人の鏡とも言ふべき靜子夫人は惜しい事には、その明治天皇御大葬の日即ち大正元年九月十三日、

いでまして歸ります日のなしときく

今日の御幸にあふぞ悲しき

といふ歌をおのこしになつて御自害なされました。

その時全國の新聞は筆を揃へて夫人の德をほめたゝへました。

その記事によつてさきにお金を頂いた人々は「それでは、いつぞやいただいたお金は乃木夫人のおくりものであ

つたのか、せめて御存命中葉書の一本もおれいとして差上なかつたのが殘念だつた」と言つて、神佛にろうそく

や線香をたてて涙と共に夫人の冥福を祈つたと言ふ事です。

第二、文に現れたる參考資料

1、赤穗義士と乃木大將

‖横山健堂‖

赤穗義士が復讐の後、四家の大名に分けて預けられた時、各大名は競うて之を優待した。この時、優待を意つたものは武門の恥として世上から嗤はれた。花は櫻木人は武士、人は武士。その武士の中の武士といはれた赤穗義士のお預けといふものは、捕虜となつたのではない。預かつた大名にとつては、稀世の名花が庭に咲いたやうなものである。稀世の名花を預かつたものが、あくまでこれを大切に優待して、永へにその聲香を偲ぶのは人情の當然である。日本武士で義士を崇拜せぬものはないが、乃木大將は義士を預かつた四十一名の中の長府の舊臣である。彼は江戸藩邸で生れたので、その孤々の聲を揚げた處は、即ち義士が切腹した碧血の餘光がまだ殘つてゐる處であつた。彼は少年の時から、深く義士の影響感化を受けたことは疑がない。彼は晩年頻りに義士を崇敬したが、その實は、少年の頃に、彼の父が屢々彼を携へて泉岳寺に參詣し、義士の話を聞かせたのが原因となつてゐる。彼の切腹はいかにも義士の感化を受け、且それと因緣の淺くないことを感嘆させるのである。

長府の藩邸で切腹した義士の話の中には、殊に壯烈なものが少くない。中にも武林唯七は、介錯した侍が刀を武林の顎に切りがけたので前に倒れたが、すぐ起直つて、下から「お靜に」と聲を掛けたと云ふ有名な話がある。これは事實と少しは違つてゐるやうであるが、ともかく義士の最後は崇高沈着であつたことが窺ひ知られる。その他、間新六・村杉喜兵衛などは、ともにあつぱれ見事なものであつた。大將乃木の父は、その子を泉岳寺に連れて參拜した時、此等の壯烈談を話して聞かせたに相違なく、大將乃木は日本武士の眞精神と切腹といふことを少年の時から深く感得してあれだけの大丈夫となつたのだろう。

義士の切腹した長府の藩邸と言うのは、今の麻布の第三聯隊の處である。大將乃木がその附近に住宅を作つてそこで切腹したのも、よく〳〵宿緣の深いことである。この藩邸は明治維新以後暫く空屋敷になつてゐた屋敷の庭園の中に池がある。義士は庭上に式上を設けて切腹した。私は杉浦重剛氏から聞いた事がある。此の青年時代に同志が申合せて、この庭に行つて、池の鯰や鮒を漁り、そこでそれを料理して食べて歸つた事があるさうだ。その意味は、この池の中の魚は武士の流した碧血を吸ひ、その氣を受けたものであるから、此等の魚を嗅ふのは赤穗義士の血脈を受けるためであるといふのであつた。赤穗義士は我が武士道に於てはかやうに崇拜されてゐる。また崇拜すれば崇拜者には必ずそれだけの効果がある。大將乃木は少年時代に、杉浦氏等のやうにこの池の鯰や鮒を漁つて喰べたかどうかは分らぬ。恐らく舊藩の時には、池の魚を取ることは許されなかつたかも知れぬが、義士が鮮血を賤いだ地上に義士を憶ひながら育つたに相違なからう。

2、古武士と乃木大將

‖芳賀矢一‖

乃木大將が古武士の典型、武士道の權化であると云ふことは、大分世間に言囃されて居ります。私は別に乃木大將と交際を願つたことはありませんが、新聞や雜誌などに出た所の乃木大將の平生の言行を讀んで成程世間で言ふ通り、古武士といふものはかやうなものであらうかと考へました。それで一體古武士とはどんなものであらうかと考へて見ました。

道の權化と申すのは尤もであると考へました。それで一體古武士とはどんなものであらうかと考へて見ました。

さて古武士の本場は源平時代でありまして、總べて謠曲なり、演劇なり、小說なりに於て此の時代は武勇談の最も賑やかな時代で、子供の時から我々の頭腦に沁込んで居るのもまた此の時代であります。そこで源平時代はどんな武士であつたかと云ふことを考へて見たいのであります。

尤も此の比較は少し當を失して居りはしないかとも思ひます。何故かと言うと彼の源平時代の武士と言うものは所謂豪族の家の子郎黨で、それが自分の主と頼む人のために働いたと言うだけの事でありまして、その戰爭と言つた處が一の谷の合戰でも宇治川の先陣でも、極めて小さいもので、乃木大將が攻圍軍司令官といふ資格を以て世界の大强國を相手にして戰爭をされたと云ふやうなことは、大變相異しておりますから、此の比較は或は當を失して居るかも知れません。併しながら、世間が乃木大將を稱して、古武士の典型とか、武士道の權化とかいふことを頻りに申しますから、その精神その人格と云ふものを比較して見ることは、別に當を失したことでないか知れないものであります。又一つ斷つて置きたい事があります。私は歷史家ではない。歷史上の事實と言うものは一向知らないのであります。私の知つて居るのは、唯平家物語の樣なものに過ぎません。歷史上の眼から見ると平家物語などは歷史ではないと、本當の歷史ではなくて、實は半分も小說で、即ち日本の長い叙事詩であります。元來私は歷史よりも文學の方がよく國民を理解することが出きると考へて居ります。歷史上の事實を陰索して、日記記錄の樣な一日や二日のことを調べて見た所が本當の事が分るものではありません。日本の國民が本當に分るのはやはり日本の文學の上にあると思ふのであります。歌なり物語りなり昔話と云ふやうなものは、種々後の人が作り換へたり、若しくは作者の想像によつて出來たのもありませうが、その想像と云ふものは、日本人の想像で作り直すのはそれが日本國民の思想に合つたからに相違ありません。であるから、歷史の事實がどうであるか、今日の事柄でさへ新聞紙の記事が毎日間違つてゐるぐらゐであるから、記錄などは餘り信用されるものであります。私は歷史上の詮索よりも、寧ろさういふ國民的傳說・國民文學と云ふものが、大いに日本國民を理解する力のあるものと考へて居ります。そこで、平家物語だけに就て論ずることにいたします。

さて、その一例として、乃木大將の先祖たる所の佐々木四郎高綱について述べませう。佐々木四郎高綱といふ人は、御承知の通り頼朝が範頼義經と云ふ二人の弟を遣して木曾冠者義仲を攻めさした時に、近江の國から馬にのつて、一生懸命に鎌倉へ駈付けて來ました。頼朝は之を怪んで、「お前は一體近江國の者ではないか。今度邪攻の軍があるのになぜ都へ行かないで、鎌倉までやつて來たか」とかういふ問を發しました。所が、高綱が答へて申しますのには、「都上りはたやすいことでありますけれども、久しくお目に懸りませんので、お目に懸つた上に致したう御座います」と答へました。

隨分遠方を馬に乘つて駈けて來た、そこまで盡したと言ふことを頼朝が大いに感心して、池月と云ふ名馬を與へるやうになつたらしいのです。さういふことは中々普常時では出來ない事で、それで高綱が忠實な事であつたと言ふ事が分ります。早く都へ行けばよいのに、態々鎌倉まで走つて來た。その代り馬はいけなくなつた。そこで新しい武士が馬を愛するのは、當然のことでありまして、乃木大將も非常に馬を愛されたさうであります。先祖の高綱は馬を頼朝に貰ひました。乃木大將もステッセルから馬を貰はれたことがあります。さて之を比較しますと、高綱は先づ半分は强いて貰つたのでありますが、自分はどうしても宇治川の先陣を致します。それには馬がなければ働ができません」と、かういふことを言つて頼朝が義經にも範頼にも遣らなかつた馬を强いて貰ひました。所が乃木大將の方は別にくれよとも言はれないのに、向ふからくれたのであります。その時、乃木大將は直ちに貰はれたかと言へば、さうではなくて、「軍律と言うものがあるから、いづれその手段をつくしてから」と、答へられました。この點は露國人も非常に賞讃しました。その馬の貰ひ方も、先祖高綱の方がよろしくないと思ひます。それから、梶原源太景季といふ人がやはり磨墨を貰ひました。景季も池月が欲しかつたのでありますけれど

もどうしても頼朝がくれませんでした。所が高綱が池月にのつて出掛けて行つて、それを景季に見せつけましたので、景季は大いに怒つて、どうも頼朝公は怪しからん。自分が頼んでくれないで、高綱にやられた。一つ高綱と刺違へて死んで了はうといふ權幕で出かけて行きました。然るに、高綱は旨く欺きました。さふいふ譯ではない。此は貰つたのではない。實は盜んで來たのだ」かういつて欺きましたら、景季も納得しました。なるほどその時刺違へて了つた所が詰らぬ話で宥めておいて、兩人とも生きて居つて忠義をつくすのも宜いのであるが、併し、嘘を吐いたと云ふことは免れません。佐々木四郎高綱、即ち乃木大將の先祖は嘘を吐いたと云ふことになります。

それから宇治川の先陣であります。宇治川の先陣と云ふものが、やはり餘り立派な行動でないと思はれます。景季は磨墨に乘つて居る、高綱は池月に乘つて居る。そして第一等の馬に乘つた高綱の方が少しおくれたのであります。そこで「馬の腹帶が緩んで候」と言ひました。景季が馬を止めて腹帶を締直すその暇に乘じて先發したと云ふのでありまして、これも稍欺いたといふことが隨分あつたらうと考へられます。けれども正々堂々たる遣方ではありません。且つはつまり非常に功名を急ぐから起る事で、自分の功名を立てたいと思ふのは武士として當然のことであります。一番振の功名は武士にとつては大事なことであるから、その効名の念に急であつたが爲めであります。併しながら乃木大將はどうでありましだらうか。大將は極めて謙遜な人であります。旅順を攻撃してその要塞を陷れられたのは非常な大功名であります。大難戰をして到頭陷れられたのは世界の歴史に於て特筆すべき事件であります。所が大將は曾て其の功に誇られたことはありません。却つて多くの國民を殺したことを自ら責めて、非常に心配をして居られました。即ち功名の念は少しもなく、さうして自ら謙遜すると言ふ所があります。これは先祖高綱よりもどのくらゐ偉いか知れね、餘程大きな所があると思ひます。それゆゑ乃木大將は先祖よりも遙に偉いのであります。高綱は數百歳の後に自分の子孫に自分より遙に偉い者が出たといふことを喜んで居るだらうと思ひます。かういふ風に詮索しますと、古武士と言つた所が、抽象的の古武士と云ふものはあるけれども、本當の古武士らしい人はありません。どの古武士にも一つ〳〵好い點はあるけれども、全體としては餘り立派な人はありません。所が、乃木大將は其等の武士の好い所を總べて備へて居られました。即ち古武士の美點を集大成して、之を一身に備へて居られました。即ち古武士の集合體であります。さうして、從來武士道の權化と云ふやうな言葉はありますけれども、それは意味の上で言うたので、それが始めて所謂人間となつて現れたのが乃木大將であろうと考へられます。是は單に源平時代が先づ日本の凡べて武士道の本源であるから、源平時代の武士を例にとつてお話したのでありますが、其の後の太平記時代の武士に就て考へて見ても、迚も乃木大將ほどの人格者はありません。大將は武勇があり膽力があり、至誠を以て人を動かし、さうして文學もあり尙學問もありました。色々な書物を澤山讀まれたことは、因より古武士の及ぶ所でありません。人格から申しましても、源平の武士を兩方集めても到底及びません。まして學問などは尙更及ばない譯であります。

私は平家物語を讀んでさう云ふ風に感じたのであります。實に「乃木大將以前乃木大將なし」と申してもよいのであります。

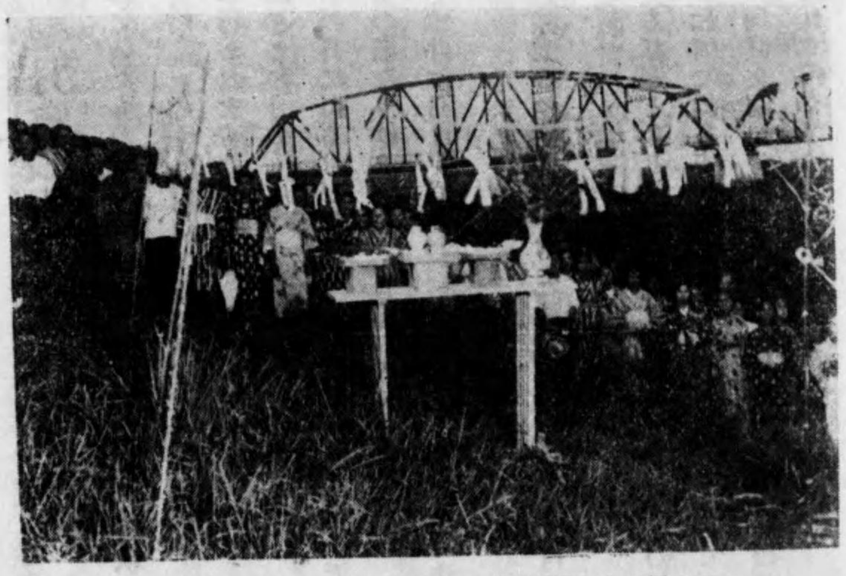
乃木　將は昔から稱して居る武士道とか古武士とか云ふものを本當に實現されたものであつて、其の行たるや萬世に傳へるべきであるし、又その文藻も萬世に傳へるべきであると考へます。

行事教育の實際

即ち我々がいつまでも忘れてならない事であります。今後は平家物語や太平記を讀むと同時に、乃木大將の傳記も讀むがよかろうと存じます。＝筆のまに〳〵＝

第十二章
月祭りと觀月會

【陰曆八月十五日晩】



……月祭りの會のため夕暮れ會場たる吉野川橋畔に集り月の出を待つ五百餘名の女兒童の大集團……

第一節　觀月會の由來

支那にては唐の頃から行われていたものらしい。月見と稱して、この仲秋の月を賞し詩を作り宴を開らいたものである。

我國に於ては貞觀の初年から行われたものである。

月ひとに見る月なれどこの月の
　　こよいの月に似る月ぞなき　（村上天皇）

秋はたゞこよい一度の名なりけり
　　おなじ雲井に月はすめど　（西行法師）

等の歌が殘されている。

我國の國民性の一つとして自然愛好の精神は非常に强い。自然に對して自己の純情を意味づけて觀賞して來たものである。

自然物中雪、月、花などは尤も話題となり詩歌の題材となり精神的慰安の材料とせられたもので月見として地位の高下、都鄙の如何に拘らず隨分年中事として遍く行われて來たものである。

しかし、世移るにしたがい、物質文明の勢力を占めることとなり生活の複雜さを加えるに從つて我國に於ても其美風が漸次すたれて行く事は甚遺憾なことである。

第二節　施設指導上の着眼點

日本人の國民性の一特徴として自然愛好性がある。

自然を愛好すると言う點に於てはその依つて來る處は、いろ〳〵の方面から考察する事ができるであろうが、日本人そのものが純情性に强いからであろう。純情性によつてその對象を求める時自らの自然界に心を寄せる事となるのである。

而してその純情性は美の傾向極めて强く、自然界を美的に意味づけようとするものであつて、山水の美を賞し草花の美を賞し、月星雨雪を賞し虫鳥聲を喜ぶ。

かく自然を藝術の對象として鑑賞するのみならず之を詩歌文章繪畫彫刻等に表現する事を好む處の國民である。

進んでは之を信仰の對象として觀る。鑑賞より一歩踏み込み、要求となり希念となり念願となり祈禱となる。それによつて身を修め、努力を鼓舞し平和幸福を憧憬する。

觀月の行事もその一つの現れである。之を單に一つの迷信的行事と見、有閑日本人をつくる墮落行事だなどと評することはあまりに自然を科學の對象とのみしか觀じ得ないものの虐待である。美しき花を見て、之は植物の生殖器なり。」など言つて科學者振つている類の人々である。

その樣な人々の教育こそまことに偏した「眞」の價値にのみしか生きる事のできない片輪人間をつ

くる。干乾びた人間生活は到底永續しない。己れの發明した毒瓦斯によつて自らも滅亡しなければならぬ合理におかれる今日の日本の教育も、そうした傾向の漸次強くなつて來た事はどうであろうか。教育の目的は、人格陶冶と言つているが、その人格の內容に至つては頗る怪しい。眞美善聖價値の圓滿なる人格であるべき筈である。然るにやはり概念教育が全盛をしめている。本行事は言うまでもなく善良なる國民性としての純情性を伸張せしめんとするものに外ならない。自然界を科學的に考察する以上に藝術的に鑑賞し表現し宗教的に信仰し、共同してその行事を遂行する事によつて道德的訓練特に社會連帶訓練の陶冶に重きを置かんとするものである。本行事は茲に着眼して施設指導しなければならぬ。

第三節　施設指導の計畫

一、場　所　場所は山又は海岸、河口等月見に適した處がよい。大體何處の土地にも月見の場所がある。なるべく一般鄉土人の集合の場所を選擇するがよい。

そうした環境には教育上得てして惡い影響を蒙るの場合も尠くない。しかし、從來の教育はあまりに、そうした事情に恐怖して教室に籠城した結果實際生活に疎い人間を養成したのであつた。今後の教育は、現實の社會を批判するの態度と見識とを養わなければならない。教育を今少し積極的に指導して、現實社會の長短を批判し之が擴張充實を圖るの基調と態度を訓練しなければならない。その意味に於て鄉土人の集合せる場所を凡ての機會に多く學校教育の場所として取り入れるのがよい。

二、日　時　陰曆の八月十五日夜を用うる事は教育經營として正しい方法ではない。しかし、その頃が尤も澄める月を仰ぐ事ができるとすれば、その時期に於ける陽曆の相當日を選擇すればよい。時間は、夕方として、地方によつては聊か異る處があろう。まだ父兄のものが就寢せぬ時間に歸宅せしめる位に時間を決定すればよい。

三、自由觀賞　觀賞は團體を解いて自由に觀賞せしめるがよい。しかし、之が觀賞の態度に就ては學校に於て充分に指導して置かねばならぬ。

學級毎に一團體として觀賞せしめる事もよい。

四、月祭り　高學年になるに從い施設は複雜となつて來なければならぬ。

高學年としては、矢張り月祭りをするのがよい。

幾何かの經費が要するが、やり方によれば左程の心配はいらない。できるだけ簡潔に趣旨の徹底につとめるがよい。

供饌の品物などは次の施設指導の實際例の參照を望む。

環境の如何は矢張りその影響もあるから靑竹を立て注連繩を張り八ツ足机を置き神々しき祭壇を設けることが必要である。

五、歌　謠　月下に於てハーモニカを吹奏し唱歌を歌う事は彼等の月による純情の觸發啓培をしてよりよく良好ならしめるものである。決して安逸を貪り遊惰に耽る惡習慣を誘發するものではない。

六、即　吟　自然に對する感興を詩歌に表現するの趣味は極めて高尚なることであつて、日本人として古來よりの一つの傳統的藝術である。

極端に解して有閑人の閑潰しの仕事の如く考える樣になつて來た事は物質文明の隆盛となつて來た結果であろうが遺憾なことである。

自然を有情視し意義づける處に人情世界が展開される。平素の指導を中心に之が表現につとめしめるがよい。

七、結果の處理　綴方に表現せしめ、又は感想發表會をなし又は所感錄を提出せしめる等結果をおろそかにしない事が肝要である。

八、施設の實際　施設の實際に就ては、よく學年の程度を中心として繁簡よく學年に應ずる事を忘れては不成効に終る。

第四節　施設指導の實際例

1、觀月會實施案　（中學年）

一、目　的　眉山頂上皇陵遙拜所附近に於て宇宙現象の雄大に接せしめ自然の風光を愛し月光を觀賞せしめる。

二、日　時　陰曆八月十五日午後五時より七時半まで。

三、事前の教育

（1）目的を明にし之に關する訓話を行う。

（2）月に對する先人の感想を文書によつて研究せしめる。

（3）觀賞態度を明かならしめる。

四、出　發

（1）午後五時校庭集合出發。

（2）午後六時到着。

五、觀月會

（1）月出默禱

（2）ハーモニカの吹奏

（3）唱　歌

（4）和歌俳句の即吟

（5）月に關するお話

(6) 月に默禱

六、下　山　午後七時半下山八時解散。

七、事後の教育　所感錄提出

2、觀月會の實際　＝低學年＝

一、場　所　吉野川橋

二、時　間　午後五時半學校出發。

三、方　法

(1) 往復學級順

(2) 觀　賞

1、橋畔にて解隊

2、學級別に團欒的に

四、歸　校　午後八時、解散。

3、月祭りと觀月會　＝高學年＝

一、目　的　宇宙大自然の偉大性に感觸して、宗教的情操の觸發と啓培を圖り、天高く氣澄む雰圍氣にとぎすましたる如き月を觀賞し風にそよぐ茅薄の風情を愛し、かねて月祭りを行ひ、純情による神の世界を憧憬せしめ以て圓滿なる人格の陶冶に資せんとするにある。

二、日　時　陰曆八月十五日。

三、場　所　吉野川橋畔堤防。

……月祭りの環境整理と自治會代表者の供饌……

四、方　法

(一) 準　備

1、供　物

(1)秋の七草　(2)だんご　(3)神　酒　(4)栗　(5)里　芋　(6)枝　豆

2、用　具

(1)注連竹四本　(2)注　連　繩　(3)八ッ脚机二脚　(4)花瓶　二個　(5)三　盆　三個

(二) 出　發　午後五時學校出發

(三)　到　着　午後六時
(四)　解散自由鑑賞
(五)　集團會合
(1)開會の辭　代表　(2)默　禱
(3)音　樂　(4)お　話
(5)和歌俳句創作(三十分間)　(6)琵琶歌演奏
(7)優秀作品發表　(3)閉會の辭
(六)　解　散　＝地方自治團別によつて＝

◆參　考

1、會の實際例

(1)開會の辭　(2)音　樂　荒城の月
(3)音　樂　銀の月夜　(4)同　ジョスランの子守歌
(5)同　エヂプトの夕　(6)同　鏡
(7)同　月　(8)朗　誦　月をたたえる譜
(9)お　話　月を見て　(10)お　話　月
(11)琵　琶　楠　公　(12)唱　歌　旅　愁
(13)閉會の辭

2、兒童のお話　月を觀て　＝岡本よし江＝

觀月に好適のこの丘で觀月會の開かれましたことは、まことに嬉しい事であります。とかく汚れがちの私等の心を一瞬間でも清純にしてくれます。

私はじつと月を觀てゐますと、いつとはなしに、醜い人間社會から遠くはなれてゐる月の世界に住んでゐるかの樣な心持になつて來ます。

この遠大であり雄壯であり神秘である仲秋の名月は、私の暗い思や淋しい悲のある時、私を明るいそして晴々したそして賑やかな心持に救つてくれます。

常に私を導いて下さるこの名月の美しさ清らかさは、何と言つて言ひ表はすか、その言葉を知りません。「何とも言はれない」より以上の賞し樣の外持合して居ません。

昔から名月は多くの人の詩歌となり傳說となりその偉大さ神秘さと物語つて居ます。

私は月を見るたびに思ひ出されますベートーベンの月光の曲のことや、昔漢の高祖が月をめでて支那の高原に立つたことや、シエクスピアがまだ青年時代に、胸に苦痛があればきつと高原に登つて月を見、それによつて自分の胸の苦痛を僅かに慰めてゐた事や、圓山應擧が雄大な神秘な月の出を畫くために毎日京都の山に登つた事など思ひ浮べます。月は下界の私等に偉大な影響を投げかけて居ます。私は次の樣な神秘な話を聞きました。それは、親一人子一人で全く佗しい生活をして居る

人がありました。名月があまり美しいので母を連れて戸外に出でしばらく月を眺めて居ました。前の流れに影を落した月の美しさは、或一種のすご味を帶びて居る程でありました。今まで空を眺めてゐた母親が急に半ば不氣味な笑を立てて二三歩前へ無遊病者の樣に歩いて行きました。驚いて後を追つて行つた頃には、もう母の姿は河原の水面に影を落した月の姿の處まで行づて居たのであります。それから母は月を眺めて以前の樣に不氣味な苦笑をしてゐたが遂に死んでしまつた相であります。

その子はその後月を見るたびに月は惡魔だと言つてゐる相です。無理からぬ事だと思ひます。二人とない母親の命をとつたと思へばそうも考えられます。

平素精神に何等の異狀のないものにもさほどの偉大な影響を與えるかと思えばその神秘なことに驚きます。

とり止めもない雜感を申上ました。皆樣の樂しいお心持を汚したことを思ひますと濟まない樣な氣がいたします。

3、兒童の朗誦　月をたゝへる譜

豐饒の田には黃金の波打ち
千草茂る野には虫の音冴えて
秋深む今宵。見よ。玲瓏たる月を。
東一古今人間の憂愁苦悶
種々の思ひをこの月に向つて訴へしは
幾萬回ぞ　幾億回ぞ
秋津島根を遠く幾千里
阿倍仲麿の眺めた廣漠たる
支那の野に照る月かげは
いかに淋しいものであつたか。
思ひ叶ひ望とげおごりに榮へて世の幸は
皆我にのみ集るものと誇りし藤原氏
一門の見た月はさぞや輝かしかりし。
だが罪なきに都を追はれた悲しき流離の
身に聖上の御衣を奉持する菅公涙の
袖にふりそそぎし築紫の月は如何に哀れなりしぞ
英雄ナポレオンが効なり名遂とげて
フランスの王城に仰ぎし月の明るさに反し
偉業空しく砂上にくづれ敗殘

身に青白く照りしセントヘレナの
月は如何に悲しきものであつたか。
見よ。玲瓏たる月を。
天文學者は『月は地球の衛星で全く死んだ冷塊である。』と云ふが
この冷たい月の光に我等人間は如何ほど慰められるか。
月の冴えたる夜都會の動物園では
恐しい虎や獅子がふるさとの大原野の昔を追想して
物すごく天心に向つて吼口するといふ。
晝は猛獸と戰つて血をあびる熱帶の野蠻人ですら
月の夜は椰子の葉かげで歌や踊に終日の勞苦を忘れるとか。
見よ玲瓏たる月の光を。
秋澄みわたる今宵の空に戰ひ爭ひ疲れ惱む地上の人間に
無言の教訓と慰安とを與へて千古の歴史をひめて
靜かに照る無限悠久の月よ。
あゝ永久に偉大なれ神秘なれ
平和なる月の光に照らされる萬物に亦幸多かれ。

4、兒童即席和歌俳句

(1) 大空に清く輝く滿月の
光を浴びて歌ふ聲よし

(2) すゝき原一人滿月眺めおれば
なき妹を思ひ心淋しも

(3) すゝき穂の今宵の月を眺めつゝ
しみ〴〵語る友ぞうれしき

(4) 仰ぎ見る月の光の尊さは
たゞひし〳〵と身にぞしみける

(5) 十五夜の月の光を眺めては
過去のあしきを忍びあひぬる

(6) 虫の聲一きは冴えて月高し

(7) 滿月にすすき輝く吉野川

(8) すすき原乙女の唄に月のほゝえむ

(9) 滿月や民の平和をてらすらし

(10) 滿月や冷たき姿川に落つ

5、參考名歌

（1）名月や舌を帆にまく三笠山
（2）名月や疊にうつる松のかげ
（3）名月をとつてくれろと泣く子哉
（4）名月や灰吹すてるかげもなし
（5）名月や竹を定むるむら雀

6、新聞記事

月祭りと觀月會　＝德島日日新聞所載＝

壯觀なる吉野川橋と靜かに秋風そよぐ茅薄の原を背景に女子全體は月祭と觀月會が催された。先づ水面から浮びでる月を眺めんとして五時二十分には既に六百の女兒童の席は定められた。淨められた場所に笹の四本が立てられ嚴かに注連繩が張られた。お月樣には、自治會長副會長の手によつて、徐ろに神酒、七草、團子、芋、栗、枝豆などが供へられる。

月は出た。時刻は過ぎた。十五夜の月は幸あれかしと金色に照らされた。人工的壯觀東洋第一の吉野川橋と、自然的壯觀の滿月とを背景に豫定の獨唱樂が次ぎ〳〵にくり出された。

あたりの靜けさ淸く高く朗らかに歌うとぎれに拍手の聲鳴り止まず。この人間界を離れた神の世界人の心を純淸に導く。時に午後八時惜しき會を閉ぢて各地方自治團に編成をなし引き上げたのは八時二十分だつた。

第五節　參考資料

一、講和資料

1、講話　＝堀賢雄＝

月は四季折々賞せられないことはないが、秋の空の澄み渡つて、光が殊に爽やかなるは、春夏冬に比して一段の趣きがある。

されば古來秋の夜の月を賞することが流行した。秋の夜でも、

夕月（三日―十日頃）　十五夜の月
十六夜の月　立待月（十七夜）
居待月（十夜）　臥待月（十九日）
二十日月　十三夜月

いづれ哀を語らぬものはないが、古來八月十五夜及九月十三夜を觀月の好期節とする。文人墨客月下に淸宴を張つて詩宴を張つて詩歌を詠んだものである。

十五夜の月は、秋九十日の最中なる故中秋の月とも云ふ。また、三五夜月、芋名月と稱する。月下に詩宴を催す民間にては、月見團子十五個その他、芋、枝豆、栗、神酒、芒及秋草などを祭り男女老若打集ひ樂しき物語りに興ずる。

今宵月をつるには、十五歳の女兒を主人公として其夜明月ならば幸運なりといひつたへ、又赤兒は此月光に針を通し得ば裁縫に上達するといひ、又此夜に搾り取りし糸瓜の水は嗄の藥として妙なりまた化粧水として尤もよろしきものとせられた。

我邦にては貞觀の初年より行われた樣である。

猶九月十三日の夜の月を「後の月」又は「栗名月」などともいふ。十三才の女子を主人公としてまつり、特に豆腐に紅をつけて月に供ふれば女の病氣又は長病を治すとも言ひ傳へられてゐる。日本に於ける月の名所としては須磨、明石、芳野、初瀬、嵐山、石山、姥捨山、松島など特に名高い。

2、觀　月　會

■小學校の年中行事■

今日はお月見の晩であります。考へて見ます。月は我達のすむ世界の夜を限りなく美しくかざる、大自然の照明燈のやうに思へます。その銀の矢のやうにさす、そして何となく淋しい光は、太陽の光の樣に必ずしも私達の生命を保つてゆく上に大事此上もないものではありませんか、がもし月の光がなかつたら、地球の表面、そしてその上に於ける我達の生活は如何に淋しいみじめなものでありませう。

はげしい一日の仕事に、疲れてかへる山路の空に月がなかつたら。

或は長い〳〵たいくつな夜、窓をおしひらいても山のはしに月がかゝつてゐなかつたら。

又、こぼれなく里を照き入つても草むらを水色にうかび出させる月がなかつたら。

かゝ思つて來ると、月は私達のやゝともすれば、がさづいて、ひからびた枯葉のやうに、なりやすい心の部屋にあるおちつきと、なぐさめとを送つてくれる天使の樣に思はれます。

ことに、この頃仰ぐ秋の月は見るからに、神々しい光と姿とを持つて、おのづと人々の心に詩を歌はせ、歌を作らせます。

天の原ふりさけ見れば春日なる
　三笠の山にいでし月かも

阿部の仲麿は異郷にあつて、かく自らの切ない情を月によせました。

この世をば吾が世と思ふもち月の
　かげたる月のなしと思へば

藤原道長は、美しい宮殿に、かく歌つて自らの榮達と滿足とを滿月の月にたとへました。

我が心なぐさめかねつ更科や
　おはすて山にてる月を見つ

源實朝は長い旅路に、かく歌つて、自らの心の惱みを秋空のかなた、さして月に訴へて自らを慰めた。

皆さんは小さい時から、

お月さんいくつ　十三七つ
まだ年若いな　また年若いよ

さう歌つて、月をよい友にして來ました。ほんとに銀色の舟にのつて、水色の空をしろしめす月こそ、私達の靜かなやさしい心のおのづと流れゆく宮殿でもあります。今夜こそはその月見の夜……

家へ歸つたら秋の草花を飾り、秋の果物を供へ、すべての人が、月の光　すんだ心を一段とみがき、一方、秋の夜の月の美感に見入りつゝ、あはただしい生活の中に、しばしの心の休息を呼ぶことと致しませう。

二、文に現れたる參考資料

1、月　雪　花

‖帝國新讀本‖

春はハナミ、夏はスゞミ、秋はツキミ、冬はユキミ、夏のミだけが、月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼は又格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一大歡樂である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、一般國民的の雅興である。「お月樣いくつ」の俚歌「雪よふれふれ」の童謠、月雪花の風流は子供の時から敎へられて、我等の頭にしみこんで居るのである。

月雪花を見て感ずるのは、歴史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は、唐人も高麗人も美しいといふに違ないが、彼等の感するところと我が國民の感ずるところには大きな逕庭がある。米國人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味ももつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で敎育せられた。月雪花を弄ぶといふ詩的敎育を受けて來たのである。

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて活動社會を離れることは隱遁者の所行であるが、少くとも皎々たる明月、皚々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對してこれを眺めて居る間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の効用は美術と同じく、人を高尚にし、人を溫雅にするのである。

我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。「月に叢雲花に風」月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跌や死去に譬へる。さうして繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべてこの譬喩法を用ひて居る。

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々な美德を附加する。無情の物を有情化した上、更にこれを有德化するのである。月は公平無私、寸毫も汚のないものとして、光風霽月などと熟語せられて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲はその光明を掩ふものとして、小人邪會の徒になぞらへられる。又雪は氷潔一點の塵のないことから冷たい嚴肅なところを見て、潔白な精神や節操の動かないことを聯想する。花は爛漫たる美しさの忽ち風に散行くのを惜しんで、節義の士が身命を拋つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、これ等の德を備へて居るやうに感ずるのである。古人がかく感じ來つたそのまゝを我等は承繼いで我等もさう感ずるのである。

月雪花を鑑賞し得る我等は幸福である。盲人の學者塙保己一の逸事として傳はつて居る話に、或時月明に對して花ならば探りても見んけふの月

といひ、また京都に上つた時御所の南殿の櫻の花盛と聞いて、

目に見ねばせめて
なでんの櫻かな

と戲れたさうである。東海道で富士山の下を通る時には、

言の葉のおよばぬ身には目に見ぬも
なか〳〵よしや雪のふじのね

といつた。

月雪花の眺を恋にすることの出來ない民族は不幸である。月雪花があつても、これに附加せられた傳說のない國民も亦人生の興味は少い。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を思ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出來る。月雪花を通じて、我が國民の歷史は髣髴として眼前に浮かぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見なかつたが心眼を以ての月雲花は眺め得たのである。

2、月の出

‖木下李太郎‖

眞黑な椎の繁みか、
ぼんやりと黃ばむのは何であらうぞ。
またお聞きそらあのやうに
さはがしい溪流の音にまぎれぬ、
あのさらさらと云ふ聲は何處でするのか。
もう秋になつたのね。
山の湯はいつも寂しく、
いつ夏が去つたのかわからぬけれど、
きれぎれに蟋蟀がなく——
こほろこほろ、こほろ、ころころ、
あれ、御覽滿月よ。
なんと靜かに昇ること、大きな月が。
しづしづと……まんまろく……
椎の木の梢なのぼる。……
丁度、小さい鯉魚が
水の上まで浮いて來て、
ぴた〳〵水を吸ふやうに
雨で濡れた椎の葉の
深い繁みを拔けてきた、
ふるへるやうな滿月が
暗い湯壺へさし込んだ。
湯壺の中のたをや女の
肩のあたりにああたつた。
波か黃金か、きいらきら。

7、密情託興

‖現代日本特選‖

‖瀧精一‖

自然物に對して、その形相、色彩、及びその他形而下の關係を以て、これを觀る以外に觀る者の側に於いて、その物に就きて種々なる聯想を伴はしむるときは、その觀照は、甚だ含蓄深きものとなるべし。邦人の自然に對してその樂を得るや、眞にその聯想を喜ぶもの多く、時としてはその形色の美をも問はざらんとする事なきに非ず。

彼の三十一字の短歌を以て、能く物の深遠なる趣を言ひ現すといふも、畢竟そが人をして所要の聯想を起さしむるに恰好なることを言ひあはせて歌となすが故なるべし。我が邦古來の美術に於いても、亦それと同樣なる事あり。形相は極めて簡單なれども、趣味含蓄の大なるもの、往々にしてこれあるを見る。又近世に至りては、我が文學に於いて、短歌の外に更に、十七字の俳句なるもの行はれ、それに隨ひて美術上にもまた俳句に似たる趣味を以て自然物を輕妙に且味深く寫せるもの起れり。

されば、彼の日本の美術が、自然に關するもの多きが故に客觀的なりといふ者は、これ未だ、日本人の文學美術に於ける自然趣味の性質を十分に理解せざるものの言のみ。若し、美術を論ずるに主としてその題目の品類より分ちていふ時は、日本の美術は或は、客觀的なりといふも可ならん。されど若しこれを他の見解、即ち美術を作る側より見れば前記の反對に西歐の美術の方が客觀的にして日本の美術の方が主觀的なりともいひ得らるべし。その故如何とならば前記の如く、主として人間を寫して、これを主觀的なりといふは、元來、人間には精神の實存するによりこれを寫す上に於いても、主觀的なりといふものなるべきも、若しこれを技術家の美術を作る上より見んか。人間の肉體と、それに內存する精神も、その對象としては俱に客觀的なるものならずや。

さはあれ、人間以外の自然物には、內存の精神なしとしても、これを表現するに當りては、作者が自身の空想を働かしあて、特にこれを精神的に意味あるものとして現すこと能はざるにあらず。而して、眞に美術の優秀なるものは、必ずかくあらざるべからざるなり。工藝的美術品の極めて簡單なるものに於いては、自然の形色を標示して事足りぬべき場合もあらんが、それも、その少しく高尙なるものに至りては、單に自然の形色をあらはしたるのみにては十分ならず。必ずや、これを想化することあらん。況や、工藝的美術品以上の純美術に至りては、いふ迄もなきなり。而して日本の美術に於いては、人間以外の自然物を對象として、その客觀的存在に於いては精神なきものも、特に空想を用ゐてこれを想化すること甚だ巧なり。這般の想化は、支那人の語を藉りていはば寄情託興は擬人法とは異なり。これは自然を自然の通りに寫して、その著想、乃至技巧の工夫によりて、現に表るゝ事物以外に多くの聯想を喚起さしむるやうにすることなり。この十分に行はれたものは、假令自然物をのみ寫したりとするも、なほ主觀的なりといひ得らるべし。蓋し、日本の美術に於いては、作者の主觀を働かしむる結果として、これを觀る者の方にも、また自ら主觀を生ぜしむることあるべし。又ある場合に於いては、作者は唯簡單なる暗示を與ふるに止り、觀者に於いて自ら興趣を引き出さざるを得ざることなきにあらず。かゝる場合に於いては作者よりも觀者の方に、却つて多くの負擔を生ずべし。その程度如何は則ち作家の意を用ゐるべき所なり。

これを要するに、日本人が深く自然を愛するの性質を有する結果として、自然物を寫すもの多きは、これ、その美術に於ける著明なる特色にして、またその題目の如何に係らず、恰もその自然を寫す場合に必要なるが如く、一般の著想に於いても主觀的又は空想的分子を交ふるもの多きこと、及び建築の如く、自然の模倣を離るゝ性質のものに於いても、自然と相交渉して空想的の設計をなすもの多きことも、併せて日本の美術に於ける重大な事項ならずんばあらず。それをしも深く思はずして、日本の美術は自然趣味と大いなる關係あるが故に、概して客觀的なるべし、或は寫實的なるべしなどいふものあらば、これ眞に一を知りて二を知らざる近眼者流の說なりと謂ふべし。

三、兒童生徒の感想

1、觀月會

須藤　信

夕燒の空の色がだん〳〵消えて夜の幕がはるか彼方に薄墨色に眠るが如く夕やみに包まれた頃、阿讃の連山は靜かに横たはつてゐる。折からに吹きくる心よい風にすゝきのほがやさしくゆれてゐる。

「あゝいゝ夜だな」

私の心はえも言はれぬ感で一ぱいになる。皆のがや〳〵騒ぐのが腹立たしい。

やがて雲の間から晴やかな明月がやさしいしかも偉大な光を地上になげながら東の空に上りかけると、今までの皆のさわぎが靜かになつた。その神秘をひめる月の光よ！

わたしは月光の曲を思ひ出した。あの時のベートーベンの心持は？　足柄山で義光が時秋に秘曲をゆづつた夜半の月は？　此宵のやうなのだつたか？　此の月の光と德によつて盗賊を善人たらしめたといふのも最もである……とそれからそれへと想像した。

あゝ月と大自然の偉大さよ

「禮」大氣をふるはす樣な壯嚴そのものの聲に私は此の美しい月の光に包まれた幸福を感謝しつゝ心から月を拜して默禱を續けた。

ふと見上げると大阪の姉樣のお顏がすんだ空の月の中にはつきりえがき出された。姉樣もあの川端のお家でこの明月を眺めてゐる事だらう……月は思出をそゝるかのやうにいよ〳〵すみきつてくる。

人里はなれた吉野川をひかへた月の草原の中に私達は一同面白く愉快に音樂の世界の中に醉ひながら……夜は次第に更けて行く。そして夜露はしつとりと足元をぬらし夜冷は次第に身體にせまる。そこで觀月會を終へて足音輕く家路についた。

2、月を眺めて

森八重子

十月六日――觀月會の日であつた。去年は足を痛めて行けなかつた。今年始めてだ。いろ〳〵空想を描いた。五時頃學校を出發した。もう日は暮れて電燈がついてゐた。目的の吉野川へ着いた頃には日はとつぷり暮れて人の顏もはつきりしないやうになつてゐた。

海面から美しい光をなげつゝ上りはじめた。月は日と變り何だか優しい所がある。月を見てゐると自分の心も自ら柔いで別天地へ引かれて行くやうに思はれる。父や母の亡き人が星を見て種々感じるやうに私はこの溫和な月を眺めてゐながらも知らず〳〵の中に亡き妹の在りし日の事が電の樣に閃いてくる。私にとつては悲しい〳〵忘れ難い妹の死が……。

發表會が催された。大方唱歌だつた。今夜の發表會も無事に終を遂げた。その後で皆思ひ〳〵に俳句や和歌を作つた。次は後藤先生の琵琶だつた。私など琵琶の事について知らないけれども聞いてゐると淋しい感じがした。

月の下に立つと今迄した行や反省が電光の樣に現れる。自分の反省や日誌を誰も知る者はないと思ふのに月獨りが知つてゐるかのやうに思ふ。そして自分の反省が一層省みられる。今迄の事を月の下で恥じてゐると月は何も彼も知つてゐるといふ樣にその圓い〳〵顏で優しく見下してゐるやうだ。これによつて私の反省は次から次へ頭の中に現れる。自分の心もこの月の如く何時も圓滿で寛大な心がけがなければならぬ。寛大な心があれば人と爭をする樣な事はない。私は寛大な心が乏しいから時々喧嘩をするのだ。寛大な心があれば圓滿に暮す事が出來や

う。少し位の事で腹を立てたり、泣いたりするのは最もよくない。反省しなければならぬ事だ。

この觀月會によつていろ〳〵それからそれへ反省させた點がすくなかつた。

3、觀月會感想

＝吉藤　仲＝

古の狂歌に「月月に月見る月は多けれど月見る月は此の月の月」とある樣に、私等は今日の月を觀んと、秋酣の吉野川畔のすすきが原に立つた。長い橋をへだてて夕燒の空が赤く〳〵燃えて、たそがれこむる頃、東の空を見るといつの間に出て來たのか、清らかな、丸い冷朧たる月が、雲の間よりその敬虔な姿を覗かせてゐた。皆の視線は一齊に月にそそがれて讃嘆の聲止まない。私は何とも言い得ない深い思ひに魅せられて神秘な月の姿をじつと仰いだ。其の中に始まつた獨唱や朗誦がすすむにつれて月の光はいよ〳〵冴えて來た。

草はそれぞれ夜つゆをいただいて月の光はどの葉末にも輝いてゐる。月が高くのぼると、夜風がひや〳〵と流れて月光に濡れた身體はうす寒く身ぶるひする。

湧然とわく詩的情調を歌にし、進んで琵琶曲を聞く中に夜も深くなつた。歸る道々振り返ると、月はます〳〵皎々と輝いて河原一面のすすきが眞白にゆれてゐた。

家に歸たが、何んだか此のまゝ床に就くのが惜いやうな感じがしてならない。家族の人々とも一度最後の月をおがんで床についた。

私等も此の月のやうに清新にして純白な心を身に持ちたいとの念が强く〳〵私を動かした。

4、十五夜の月

＝太田　こなみ＝

青く物凄いまでに澄んだ月。そして聖女の瞳のやうな星。其の美しさ！　それはこの宇宙にあるものゝ中で、最も美しいものだと私は思ふ。

舊曆の八月十五日即ち今日、私達學校の寮生一同は吉野河畔にこの自然の美しさに接するためお月見に行つた、尊い二三時間を費して——。

壯嚴な夕燒の空には、ほのかに月が浮んで居る。全く秋の空は澄んでゐる。そして月も。

お月見もこの秋空の樣に、そして月の樣に一點の汚濁もない心に、月を眺めてゐる間だけでも持ちたいと云ふ所から出たのであると言ふことである。この青白い月光は何處から生れて來たのであらうか。この清い月光の中に溶け込んで、自我を沒入して名利を忘れてしまふ程、月は人に清淨な心を與へる。

自然の美の中に抱かれて月を眺めた時、貧に喘ぐ者はしばらく貧を忘れ、病患に泣く者は病患を忘れ、そして惡に浸り切つてゐる者は、しばらく惡の世界を解脫して、一瞬なりとも善の世界に入る事が出來るであらう。

やはらかな綠の傾斜には、もう露が星の精の涙の樣にしつとりと置いてゐた。西には秋の夕陽が彼方のかすむ四國山脈の山端に沈んで、その餘光を受けた波と東の方に靜々と浮び出た月輪の光を受けた波は、河面で神秘的なさゝやきを互に交はしてゐる。其の美は私達の樣な凡人の筆では到底書くことは出來ない。唯恍惚として自然の美に打たれ、美しいと云ふより外はなかつたのであ。月見草が冷たいけど優しい月の慈光を受けて、大きい瞳をぱつちり上げた。

舟人が默々と、ぎい〳〵といふ櫓のひびきをさせてこの美しい河面をすべる樣に行つた。

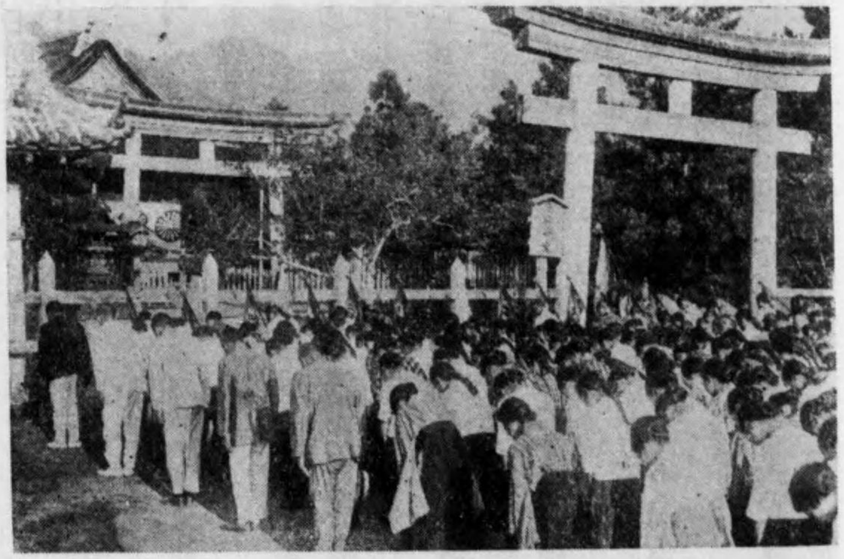
塵埃とそして焦燥とにまみれてゐる大都會の人に、美しい吉野川畔の風景に接しさせたいと思ふ。十五夜の月地球の何事も知らぬ樣に皇々冴え渡り次第に昇つて行く。

もう八時半になつた。私達は美しさに打たれ默つて歸途についた。

第十三章

氏神祭り

【産土神祭日】



……神社團體參拜……

第一節　氏神祭りの由來

氏は家々の系統に隨つて、一族子孫相傳えて稱する號にして、上古よりあるは大伴物部蘇我等である。別に朝廷より賜はれるは源、平、藤、橘などである。之等の子孫が延蔓するに從い別に、北條足利、織田、德川及、地名などを採り稱へたものもある。

之等の子孫のものが氏の先祖を神として祭りしものが氏神である。たとえば藤原氏が其祖、天兒屋根命を春日の神に祀るが如きその一例である。而して氏子は產土神の擁護を受くる地に生れたる民を稱するものである。

氏神はもと〳〵氏族を守護する神即氏神として祀られたものであるが、今日に至りては人の生れたる土地を守護する神即產土神として祀られるに至つたのである。

兒生るれば百日目には產土神祭りと稱して神祭をなし將來の幸福を祈り、村に惡疫流行すれば祈り旱天打ち續けば雨を乞う。豐かに實れば賑々しく神を祭る。

神社は村の中心であり鄕土の中心である。而して人の信仰の中心である。鄕土人はこの神社によつて統一され、協同され、相助されてゆく。

その根本精神は言うまでもなく、我國民性の特質たる祖先崇拜に外ならぬものである。

斯くの如く民心を支配することの偉大なる長所を持つことがやがては一面に缺陷として相異れる氏神の氏子相互の間には、一種の敵視態度が醸成さるゝに至つたのである。かくては國家の發展、產土神、及報本反始の趣旨に反するものなるを以て、一村一社の趣旨を以て神社の併合を圖り、神社の形式內容を充實し祭祀を厚うするの方法を採るに至つたのである。

第二節　施設指導の着眼點

既に述べたる如く神社は、子孫の祖先崇拜の念の實現されたものであつて日本の一大特徵である。吾々子孫のものが祖先を追慕しその祀を絕たない事は、換言すれば忠孝の道をつくしている事に外ならない。しかして、特別な儀式をあげ、供物を献じて禮拜することは、祖先の靈の實在を認めて神在す處に報本反始の人情を具體化するに外ならないものである。

されば、單に一定の祭日に祭を厚うし禮拜を重くすると言うに止まらず、常に神社を中心として鄕土の繁榮發展が圖られなければならぬ。天下の模範村と言わるゝほどの經營はすべて神社中心なる事によつても知る事ができる。

殊に小學校教育がこの神社教育を重んじ祖先の神靈先賢の精魂の加護を祈念し、自己の奮勵自展の誓禱を爲さしむべきである。

入學卒業の報告をなし、常に神社を崇敬し、美化し、崇嚴化し森嚴の地たらしむる樣つとめなければならぬ。

第三節　施設指導の計畫

一、平素の計畫

(一) 神社の崇敬
常に神社の崇敬について指導、神社に對する禮拜を怠らしめないこと。

(二) 美化作業
毎月一回又は二回學年により又は地方自治團により、自發的にまたは順番的に爲さしめる。

(三) 報告祭
入學卒業に際しては必ず報告祭を行うこと。

(四) 神社參拜
毎月一回學校行事として團體參拜をなす。

(五) 成績品奉納
毎年新しきものを取替える事として學校代表として優良成績品を毎年奉納する。

(六) 記念植樹
入學卒業の報告祭と同時に記念のため植樹をなすこと。

二、産土神祭の際の計畫

……大祭前の大美化作業……

(一) 祭日前の大美化作業
何處の神社の祭りにしても、數日前から境内は特に一大美化される。田舍へゆけば村民總出や又は部落別に當番として實行される。
この際、學校側としても高學年の兒童を奉仕せしめて鄉土人に入り交り教師とも〳〵作業に從わしめる。
村人の居ない時に、美化作業を行うこともよいが、また、鄉土人と協同して、その一部分を分擔しての參加も、學校側から眺めてもまた鄉土人側から眺めても意義が深い。
教育の社會化とか鄉土化とかはかくして始めて意義があるのでなかろうか。而かも、その中心眼目は日本教育からの根本理想から出たものであるべきは言うまでもない。

(二) 供物の供進

學校園の草花、供饌園の果實、野菜等を是非供進したい。

計畫的に春から準備して、これが培養にあたらしめるがよい、勿論、神官の好意を求めて種蒔式移植式等までできるだけ計畫的に勞作的に敬虔的にする事が肝要である。

之が實習に就ても、できるだけ精神的に指導してその精神的報本反始の精神を高調して體得せしめるがよい。

(三) 當日の團體參拜

これは全國的に實行することになつているので改めて述べるまでもない。お祭りは子供の樂しいものの一つであるから、あまりに團體參拜に長時間をとる事はよくない。

(四) 神事の供奉

當日の神事の供奉員は、習慣があつて大抵は有志が交代でする樣になつているが、學校の兒童の代表者も是非之に加わる樣したいものである。學校としても常に學校代表者を一般行事の中に取り入れて貰う事を積極的に要求する。また一般鄉土人側からも兒童の教育の上に要求や理解を持つ樣になつてこなければならぬ。鄉土教育とは單に材料を鄉土から求めたり、または、鄉土の事實に連絡して取扱うと言う位では眞の鄉土教育ではない。

(五) 成績品展覽會

できるだけ簡單な方法で實施するがよい。父兄を集める事も必要であるが、集まつて居る時に成績品を持つて行つて見て貰う事もよい事である。

掛軸式にしておいて、一寸の機會にでも展開して觀覽せしめるがよい。同じものを何度見て貰つてもよい。當日一般に見るに都合のよい處に展覽する。

從來の教育はあまりに大仕掛けな事を好み過ぎはしないか。而かもただ一目通す位に止まつていた。徹底的に見て貰う方法が大切ではあるまいか。

(六) 文字書奉納

處によると行燈を紙張りとして、それに書畫を認め宵祭の晩から奉納している處もある。誠に結構な事である。

經驗から申せば福岡縣嘉穗郡飯塚町にある天神社の宵祭の晩の文字献燈は實に見事なものである

德島縣三好郡畫間町の出雲教會所の宵祭、同郡辻町にある今宮神社の宵祭に於ける連板文字書奉納は自分もその指導にあたつて來たのであるが神の心を慰める上にも良い事だと信じている。

第四節　施設指導の實際

第一　産土神祭參拜式

＝拙著「私の學校訓育」による

毎年の例祭には、各地とも既に參拜を行つて居ります。然るにとかくこの參拜が不徹底に終り勝ちであります。

その原因はいくらもある事でありましようが、第一その祭式が宗教的儀式であるか、道德的儀式であるかが指導者に徹底していないからでないかと思われます。

宗教的儀式の如く考へ、申譯的に參拜するのではないかと疑はれるのを見ます。眞に我國體を知り我國の歷史を知り神社の由來を知るときには到底今日の樣な參拜では滿足できない筈であります。

第一先づ教師が充分なる自覺と敬虔の念を養う事であります。神社の前で拜禮する事を、何だかくすぐつたい樣な感じがして、あたりに人の有無を見廻すと言ふ樣では、兒童を引卒して參拜しても何等の效がありません。

第二は、前日又は當日――現地訓話が尤もよろしい――神社の起源、產土神の由來、皇室の神宮神社御尊崇、鄕土の人々の崇敬、祭式の所以、參拜の形式、之が精神、平素の心得等を訓話し、神社に關する一切の知識を明瞭にし、一切敬虔の情を高潮せしめねばなりません。

第三、參拜は教師引卒して參拜するがよろしい。之は一面敬虔的情操の陶冶でありますから、第一は共鳴さすと言うことが尤も徹底した方法であります。先づ教師が敬虔の情操に溢れてそれより發動する言語動作は直ちに兒童が精神的に形式的に共鳴するのであります。學校によつては、隨意に參拜せしめる樣になつている處もありますが、之では、眞に情操陶冶は困難であると思います。

當日出發に際しては必ず清水にて含嗽をさせ、神社に到着すれば、何隊かに別れて必ず手を洗わしめる事であります。之が準備は豫め學校から用意するか、又は神社總代、祭典係などと談合の上設備して貰つてもよろしい。

身を清める事は、卽心を清める事であります。身を清める事によつて、雜念を去つて一意專心神に對して至情をあらわす準備であります。之を教育上から見れば、情操陶冶の一の手段であります自我の成長をはかる一つの仕事であります。それが、また、直ちに神への奉仕の準備であります。勿論祓がありまして、もろ〳〵の汚れが除かれる譯ではありますが、それよりも先づ、自進的に自らが自らを淨める方法をとらす事が大切であります。

神前に整列終れば、敬禮に引續いて清祓を受けます。次に校長又は神官によつて祝詞を捧讀します。この間最敬禮をします。職員總代兒童總代玉串奉奠して式を終ります。

供物を兒童に分配される處があります。之は、結構な事と思います。儀式が道德的儀式であると同時に、この供物とその意味でありたいと思ひます。受取つた後、又は持歸つた後、卽兒童の方に於て宗教的に信仰する事は自由であるべきであります。

參拜はなるべく祭式の前後にするのがよろしい。當日は、神官の方にも非常に多忙でありますから、學校の方へ十分な手をつくして貰ふ事が不可能であります。此意味に於て學校によつては前日に參拜する處もありますが、矢張り當日が尤も感情陶冶に適します。

中には、兒童も祭式に參列する樣になつて居りますが、祭式が隨分長時間に亘りますから、低學年には不適當であります。それで各學年から總代を出して參列するのがよいと思ひます。

第二　祈年祭、新嘗祭參拜

この儀式の當日も參拜いたしますが、產土神祭のときと同樣でありますから省略します。なほ當校は國幣中社忌都神社の例祭にも參拜することになつて居ります。

第三　入學、卒業奉告祭

一、目　的

入學、卒業は、兒童にとつては一大事であります。之を神明に奉告し、奮鬪努力して神明の意志に副わん事を誓わしめるのであります。兒童の自我をして神の自我と握手せしめ其の情操と意志の奮起を促進せしめんが爲めであります。

二、方　法

入學式、卒業式終了後學校長及擔當教員同列にて產土神を參拜します。

神前拜殿に整列し、神官の學式の辭について、

修　祓

神官奉告文朗讀

神官拜禮

學校長拜禮

兒童總代拜禮

神官の挨拶によつて、式を終ります。此際兒童にも奉告文を朗讀さすこともよい事であります。神官の厚意により、兒童一同に對して一場の講話が願へれば猶更結構であります。之等に就ての詳細は奉仕生活の處に讓ることにして茲には省略して置きます。

第四　文字書奉納

甲　連板文字書奉納

敬神の念を養う一方法でありますが、之は從來あまり行われていないもので、ある地方には盛にやつている處もあります。

連板に文字を書きしものを奉納するのでありますが、之には相等經費がかゝるのであります。

連小屋は奉納する連板の數によつてその大きさが定まる譯であります。

丸木柱の五寸徑高さ一丈位のもつを柱として一間おきにほりたて上下二ヶ處に貫を通し、棟木で固め柱毎に二尺位の梁木を渡して板又は亞鉛板を以て屋根をふきます。棟木には連板を掛けるべく曲釘を配置します。

之が經費は寄附によるが尤も適當であります、學校の經費では支出の道がない處もあります。建設なり跡仕末は學校の方で兒童の手によつていたします。

連板は幅六七寸、厚さ五分長さ四尺乃至四尺五寸のものを用います。之は、奉納せんとする兒童の負擔とします。修了後は自宅に持歸り床に掛けて置く必要上その方が取扱いやすく、又効果も多いのであります。

連板には清書せしものを貼りつけるのであります。之を清書する際は、手を清め口を嗽ぎ、筆硯を洗い清め、清き水を入れ墨を磨り至誠以て淨書します。淨書すべき文字文句は兒童之を選擇し教師に相談の上決定します。なるべく神に關係したるものがよろしい。

至誠神に通ず
神明八絃に輝く
少年老いやすく學なりがたし
朝な〳〵みやの神にいのるかな
わがくにたみを守りたまへと
常しへに民安かれと祈るなる
わが世をまもれ伊勢のおほかみ
天つちの中にみちたる草木まで
神のすがたと見つゝ畏れよ
目に見へぬ神の心に通ふこそ
ひとのこゝろのまことなりけれ
敬神　崇祖
忠孝　一致
忠君愛國の權化
神人接觸同交
懿德功績偉績崇敬

奉納は、宵祭と當日と二日いたします。奉納者は拜殿に參列し奉告祭をします。終つて之を連小屋に掲げます。二日間奉納する事によつて、一方父兄をして之を觀覽せしめて父兄の向學心をすゝめます。一方兒童は敬神の念が向上することは勿論、これによつて、一面精神統一ができて、性格に一轉換が行はれる兒童があります。非常に不勉强であつたものが勉强したり粗暴なる兒童が非常に溫順になつたり、輕卒なるものが沈着になる等、精神轉換が行はれます。

終了後は、家庭に持歸り、柱かけとして一ヶ年清淨な處にかけ置きます。時々反省の資料とします。父兄も之を利用して、敬神の念、勉學品行の向上を圖ります。たしかに效果のあるものである體驗を持つて居ります。

乙　文字書行燈奉納

之は、地方の小學校に於て適當であります。地方に於ては宵祭りに數百の行燈を奉納する樣になつて居ります。この行燈に文字書をして奉納するのであります。その一般的取扱に於ては、前者と同樣でありますから省略します。

すべて、之等は、精神的のものでありますから、要は指導者にあります。單なる形式に流れて成績をとらうと言ふ樣な事に止まつてはなりません。飽くまで敬神の趣旨にそう樣指導せたければなりません。

第五　毎月神社參拜

毎月一回神社參拜を爲す事も大切であります。兒童數の少き處では學校に集合の上、一同が參拜するのがよろしい、兒童が非常に多い處や各地別に適當な神社があれば地方別に參拜するのも、一つの方法であります。

當校は各地別から兒童が集合してゐる關係なり且つは兒童數非常に多數にて、到底一時に參拜できないので、産土祭以外の毎月一回の神社參拜は、各地方自治團の事業として數回に分れて實行して居ります。その方法は、今迄述べ來つたものと大差ありませんから省略して置きます。

第六　國幣中社忌部神社神社淨石奉納計畫案

一、目　的

當校兒童永遠の記念を勞力奉仕を以て建設し、報本反始、敬神崇祖の本義を體驗せしむることにより敬虔感謝の精神を涵養せんことを以て目的とす。

二、方　法

甲　豫定計劃

一、事業　忌部神社本殿瑞垣内を兒童の手により純白の淨石を以て塡め美化せんとする。

二、敷込面積　九十三坪五合

三、石材　徑二寸丸形、純白

四、所要個數　八萬四千個

五、奉仕兒童數　男子七百名、女子五百名

六、一人割個數　男子八拾個、女子六拾個

七、奉仕回數　男子一回拾五個、女子拾個として約六回

八、採集場　名東郡加茂名町上鮎喰川

九、所用時間　本校より往復約二時間半、石材採集三十分、課外作業奉仕とする

乙　實施方案

一、奉納淨石假置場清秡式　本校玄關前右側に設け四圍に齋竹を張り棚及門を設け内部を莚敷とす當日忌部神社より出張清秡式擧行、全兒童參列

二、奉納淨石採集地清秡式　鮎喰川所定地域に齋竹を圍らす、當日忌部神社より出張、兒童全員參

列

三、採集奉仕　本校學友會全員奉仕を毎月二回土曜日放課後採集之を定日とし、其他、學年奉仕、學級奉仕、地方自治團奉仕の特別奉仕により其の進行を圖る、採集せしものは本校に持歸り假置場に納む、學友會としての全員出動には學級順に校旗を先頭とし、學級毎に學級旗を先頭とす、當日は心身の淨化につとめ輕裝を以て嚴肅の中に行ふこと、風呂敷又は雜囊の準備をなすこと

四、採集期間　本年十一月より明年三月中旬までとす

五、敷石奉仕　數回に分ち三月中に敷石し終るものとす

六、奉告祭典　忌部神社と協議の上擧行す

第五節　參考資料

一、講和資料

1、產土神祭　‖講話‖

本日は氏神樣の祭日であります、即一年に二度とない目出たい御祭り日であります。今宮神社は本町の鎭守の神樣を御祭して有りまして常に我町の人々の身の上に就て守つて下さるのであります。即ち人々に病氣等もなき樣、作物等も澤山とれる樣、この村が益々榮える樣に守つて下さるのであります。で有りますから私等は生れると男は二十一日、女は二十三日目には第一に其土地の氏神樣へ御參詣をして各々の身の上の幸福を祈ります。又他へ旅立などするときには、必ず氏神の社に參詣して御庭の砂を戴いて旅立し途中の無事を祈ります。又歸つたならば御禮詣りを致します。

この樣に氏神樣は其土地の人民を御　り下さる神樣で、我等は毎日この神樣の御加護を受けつゝあるのであります。この樣に吾々は氏神樣より加護を受けつゝあるのでありますからして常に尊敬せねばなりません。

天照大御神樣初め其ほか澤山の我國の神樣たちは、皆々この日本の國が出來上るのに就て、又出來上つたのが順々と進んで參りまして、今日日本が世界の一等國の內に這入つて我々が大肩を張ることが出來る樣に御骨折りして下さつたのであります、でありますからして吾々子孫臣民は昔の神樣たちを禮拜することは、やがて忠君愛國の道に協ふのであります。

又祖先の墓や位牌を鄭重に敬拜することはやがて孝行の基となるのであります。この樣に何れの方面から見ましても氏神樣を禮拜することは大切なることであります。

當村の氏神の祭神は伊弉諾尊でありまして副神として伊弉冉尊及神武天皇を御祭りしてあるのであります。いつ頃からあの御社があつたかと申しますと昔のことは詳かでありませんが既に延喜時代にあつたと云ふことは明かであります。そうで御座いますからしてこの土地の臣民を守つて下さると云ふ上又、我國の未だ國が出來て居なかつたのを御拵へ下さつたと云ふ何れの點から申しましても吾々は常に禮拜することに注意せねばなりません。天皇陛下が常に神樣を御尊敬なされますことは私等の疾りやら承る處でありますが日本國の氏神樣と稱してもよい伊勢大神宮を特に御尊敬遊ばさるゝのであります。

皇室の出來事、皇位、婚嫁、誕生及び國家に大事のある場合などは、親しく御參拜あらせられて御告げになりま

す。又時々勅使を御遣しになつて御祭典の式を擧げられます。

この樣に天皇陛下は常に神樣を御禮拜にならせられまして我々臣民に手本を示されて居ります。我々臣民はたゞぼんやりとして居ることが出來ませうか、我々はよく注意して神樣を禮拜せねばなりません、で學校に於きましても本日皆さんを集めて今日の御祭りに當つて禮拜することにしました。

禮拜をするに就て注意せねばならぬことは、禮拜すると云ふ精神の中には眞心より尊敬すると云ふことが第一であります。たゞ形計りよいと云ふことはいつはりであつて却つて不敬であります。たゞ、米を投げたり御辭儀をしただけでは禮拜にはなりません、皆さんの本日參拜するに就ても眞心こめて禮拜すると云ふことが第一であります。

いくら一方にお米を投げたり御辭儀をしたりしても常に神前を通るときに禮拜をせず、又拜殿で不作法なことをしたり、樂書をしたり神苑の中の樹木をいためなどするのは神樣を禮拜すると云ふ本を忘れた人々であります、神を敬ふこと眞の譯を知らぬ人であります。皆さんはこの樣な點に就ては常に注意をして居らねばなりません。

玆に一つ注意をせねばならぬことは迷信と云ふことと敬神と云ふことであります、これはよく間違ひ易いので困るのであります。

吾々は常に尊敬すべき理由のある處を十分知らねばなりません。たゞなんでもかでも拜むと云ふのはよろしくない、又禮拜するのに就ても、只自己の慾望、安全を祈るため神樣を道具に使ふのはいけません、又神樣に祈つてさへ置けば自分は何等の努力をしないでも必ず加護を受けることが出來ると云ふ樣なのは迷信であります。即、遲なのまず看護をせずたゞ信神をすればよいとか、働かず居つても信神さへすれば米も澤山とれる、金も澤山出來ると云ふが如き、勉强せずしても神樣を信仰すれば成績がよくなると云ふ樣なのは大に誤つて居るのであります。一方に神の助も必要でありますが、何等の努力しないものには神も加護を與へぬのであります。よく發生し、よく勉め其の上神明の加護を待たねばなりません。

凡ての神樣は昔我國を統治し若くは之を佐けた偉人でありまして、今日我國がこの樣に盛んになつたのもこの神々の力によることであります。之を思つて崇拜禮敬すべきことを忘れてはなりません。

本日は氏神樣の由來及我々が禮拜すべき譯を御話してこれより禮拜に參ることに致します。

2、氏神祭り講話

(一)　氏神の由來

敬神の道は昔から明かである、伊弉諾尊の時分には既に禊祓といつて肉體の汚れを祓ひ淸める事が行はれた、又天照大神の時には盡鳴尊の粗暴のあつたとき罪惡を祓ふ事が行はれたり、又神式天皇が大和の鳥見の山中にみたまやを立てゝ皇祖天神をお祭りなされた。

神武天皇は此祭りをして「大孝を申ふ」と仰せられてある、即大なる孝行であるとせられてある、孝道の模範を示されたのである、實に此孝行の道は日本の風習の尤も世界に誇るべき立派な處でありました。

村々にある氏神の起源も此御手本によつて出來たものである、即吾々祖先の孝心の結果である。即昔は孝心から祖先の神靈を鎭め祀つて氏神としたのである。

例へば春日神社は藤原氏の氏神、梅宮神社は橘氏の氏神と云ふ樣に各自の祖先を敬つて毎年春秋の御祭祀をするのが日本の風習であります。

昔は氏神制といつて國民各自が其氏々で部下を治めて行く樣な自治制も行はれた。長者とか大氏とか小氏とか神農とか云ふのがあつて順々に隷屬して居つた後世になつて源氏藤原氏は大に發達した氏長者である。

一、朝廷の詔を知らす。
二、徵兵に應ずる。
三、大儀に參列。
四、氏神祭り。

春秋二季の氏神祭りの時には各氏の氏人神農迄が氏の上に從うて參り、チン〳〵トン〳〵と鐘や太鼓で踊り、もし歡もして鄭重に神事を行ひ、而して古き事を語らひなどし一族互に相親しみ之によりて益々其氏の親交を温め其氏の團結力を堅め、次の精神を養ふを得たのである。

勤王心、服從心、家名尊重、正義心、祖先を尊ぶ精神、敬神思想。

今でも之等に關するものの言葉が殘つて居る。

氏の長者は總領　今は　長男總領　氏子　……氏。

昔は氏と言ふものに氏神がついて居つたものであるが、後には此氏の制が變つて來たから從つて氏神も氏につかず幾度か變遷して今の如くなつたのである。今の氏の異なるものでも一の氏神を拜する事になつたのである。又村が異つて居るのに幾分か昔の名殘りを止めて居るのもあつて、今は大體に於て、氏に非ず村とか部落とか言ふ事になつて居る。

色々變つて居るが、兎に角外國には此樣なものがないのである。我國の特徵である。我國孝道の發揮した結果である。

（二）祖先崇拜と敬神

日本には昔からよい風俗がある祖先を尊び敬ふと云ふことである。之れに依つて日本の國がかたまり合つて外國に强い譯の一つとなつて居る。この祖先を尊び敬ふと云ふこと三つある。家に於ける祖先を尊び敬ふものと村の人々が共々に敬ひ尊ぶもの即氏神樣を敬ひ尊ぶこと、國の人々が共々敬ひ尊ぶもの、伊勢大廟、靖國神社の如きものである。

何れも我國の神樣たちは皆々この日本の國が出來上るのに就て、これ迄發達せしに就て御骨折り下さつたのでありますから、吾々子孫臣民は昔の神樣たちを禮拜せねばならぬ。氏神を敬尊せねばならぬ。之等はやがて忠君愛國の道に協ふのであります。

何れの神樣でも常に加護をして居ると云ふことであります。

1、それであるから人生るれば直に參拜して各自の加護を受くるのであります。生れたことを奉告します。

2、又他所へ旅立なさるときにも氏神に參拜なして旅立つことを奉告し加護を受けかへれば直に御禮參りと云つて歸つたことを奉告します。

3、病人が出來れば奉告して加護をうける、この前明治天皇御病平癒の祈禱をせられたでせう。その樣に個人であつても吉事であれ凶事であれ凡て奉告して加護を受けます。それは祖先を尊敬して出來事を奉告するのであり一面に於ては其加護を受くるのであります。

天照大御神は神を敬ふこと先祖に孝行をすることとの大元を開かれました。

即御自分の御姿をお寫しなされた八咫の御鏡を其皇孫にお授けなされ「この鏡を見ること大神と思へ然してお前に齋れ」と仰せられて敬神がやがて孝行となる大元を開かれました。

代々の天皇は夜おやすみになるにも決して天照大神の御座の方へは御足をお伸しにならぬ。毎朝必ず禮拜せらる。

る少しも怠りなく祭祀をなさる。

又國家の政治始めをなさるにも神樣のことを一番さきになさる。

又昔は知事となると最初府縣にある神社を巡つて拜禮してから事務をとる。

その樣に吉事も凶事も凡て國に何事か出來る時にはきつと奉告なされる、そして神の加護をうけるそれで日露戰爭の始まつたときにも陛下は先づ伊勢に勅使をお立てになつて其趣を御奉告なされ次に各府縣の神社へも勅使をお遣しになつて御奉告遊され、戰爭が終つた時には　陛下自ら伊勢に行幸あらせられて其始終を御奉告があつたのであります。

その樣に歴代の天皇陛下は日本の國のために日本國民のため神樣をお敬ひ遊ばして御奉告をなされ又加護を受けます。

この樣に澤山の神樣は吾々及び日本の國を加護されて居ります。殊に氏神は吾々の身上村の事萬事加護され居るのでありますから何處迄も尊敬せねばなりません。敬尊せねばならぬことはそれでほゞ分つたかと思ひます。

敬神は何處迄も正しき道でなくてはならぬのであります。よく神に頼んで徴兵がはづれる樣にとか、働かないで費つてもお金のよく溜る樣にとか、怠けて居て優等をとることが出來る樣にとか、養生をせずして病氣のなほる樣にとか、願をかける人がもしあつたら大なる間違であります。

日本の神樣は皆國家と國民と離る可からざる關係ある人々でありますから、吾人の道理ある祈願には必ず感應があるべき筈であります。

日本の神樣は皇祖皇宗の祖先吾々の祖先でありませう、故に血統の上、肉體の上、精神の上に感應すべき所以がありませう。

故に道理あら祈願はしてもよろしいが道理にもとつた祈願は勿論宜敷くない。

かゝる祈願の聲きかれたら、定めて自分の臣民にも意氣地のない哀な心になつたことを情なく思召されるであらう少しもお喜びなさらぬ、即敬神にはならない。

如何にすれば敬神となるか。子供ならば神に誓つて能く父母に仕へ、神樣に誓つてよく勉强し學問技藝を進め、立派な人になることが大切であります。

二、施設指導資料

1、鎮守祭　宇都次郎吉

敬神崇祖は我國民道德の根本精神である。敬神と崇祖とは言はば二つであるが詮じつめると意義は一つである。

近頃國民道德がぐらついて來たといふが、要するに敬神崇祖の念が薄くなつたのではあるまいか。修身教授に於て敬神崇祖を懇切に說いて聞かせる。鎮守の祭りには神前に拜させる。常の言葉にも日本は神國であると言つてをる。而してこれ等の訓育がどれだけ徹底してをる事であろうか餘程怪しいのである。第一訓育する教師にどれだけの敬神崇祖の信念があるか頗る疑しい。都會の教師の家庭には佛檀も神棚も用意がないのは珍らしくない。

田舍にはそんな家庭がないであらう。あるにしても窮屈な戸棚の中に神樣や佛樣を祭りこめておくのでは何等の意味はなさない。

「先生は我々を引率して參詣なさつたときに限つて、戰々兢々と最敬禮をなさるが、間の日には鳥居の前を御通りになつても帽子もとらないで、そのまゝ素通りをなさる」といふ兒童があつた。これは事實である。この事實を强られておつては訓練もむづかしい。

神社に參拜する意味が兒童に分つているか。ただ神前で拍手して叩頭するだけの參拜ならば、殆んど無意味である。參拜といふことは神と我々の交際である。平たく言へば神社を訪問するのである。知己を訪問した時には、御無沙汰したとか神樣お變りはございませんかとか、此の間は珍らしい品をいただきましてとか、夫々相當な挨拶や世間話をする。それが交際である。神樣に對しても何とか挨拶をしなければ參拜の意味を爲さぬ。必ずしも祝詞を上げる樣聲を上げねばならぬことはない。

我が國の敬神家の中には聲高に、挨拶をして居るものもある。併し挨拶の內容を見ると、通例實に多慾主義である。家內安全息災延命商業繁昌を祈つてゐる。經濟不如意の家庭が親戚知己の內へ行つて、お世辭を並べたり注意を言つたりして頭をぺこ〳〵金の無心をする。その姿である。神樣も數多い氏子の方々からそんに無心を言はれても應じ切れるものでもなし、又應じる義務も責任も無いのである。

一般に敬神と云ふ言葉が用ひられてゐるが、敬は畏敬或は敬虔の意味が多くて愛と言う親しみが薄い。敬神もその意味によつて人と神との打解けた親しい情愛が缺けて居る樣に思われる。一般家庭の神柳には敬遠主義が表れてゐる。昔から「さはらぬ神に崇なし」と言つてゐる樣に、畏るべき神との心が深く泌み込んでゐる。

我が國の神といふのは佛敎や耶蘇敎のいふ神や佛とは違ふ。我々の親しむべき祖先である。我々の感謝すべき恩惠者である。我々は此恩惠者たる神に對し衷心から誠意を捧げて感謝の意を表する之が參拜の意味である。

「何事のおはしますかは知らねども忝けなさに涙こぼるゝ」と西行が詠んだ。これが本當に神に仕へる道である。涙がこぼれる程に有難く感じた時の西行の心は神の心に一致したのである。一致は誠意の届いた結果である。神に僞りなし即ち神は誠である。誠は淸淨である。我が邪念を拂ひ我を淸淨にすることによつて神の誠が我が誠と合致することができる。昔の高僧は「人皆佛心あり」と言つた。祖先の血の流れを受けた我々は神の靈を宿してゐるのである。即ち「我々は皆神心あり」と言ふべきである。

「人事をつくして天命を待つ」人事をつくすといふのは誠意を以て力の限りつくす事である。かくて待つべき所の天命には天祐が下る。然るに世の中には人事をつくさずして天祐を祈るものがある。之を迷信といふ。かゝる天祐が下るどころか天刑が下る。過般の大震災には東京市民は人事をつくさずして天刑をうけたのである。

2、鎭守祭と敎育　‖講話資料‖

殖民地たる都會には、兎角協同一致の念が乏しい。田舍の町村には今日もこの美習の持續せられてゐるものが少くない。この美習を馴致した源因は色々あるであらうが鎭守の祭りの如きはその中の有力なるものであろう。ワッショ〳〵と神輿を擔いでねり廻るのを、猥りに舊來の陋習だなどゝ笑ふのは止めよ。無邪氣なるワッショ〳〵の中に協同一致が馴致せられた事を忘れるな。隣町村の鄕黨の親戚知己を案內して大根なますの手料理で酒興を助けるのを以て猥りに浪費蹔習だと當世ぶることを止めよ。誠意のこもれる手料理で隔意なき酒興の中に鄕黨の情誼や趣味が得られるのである。東京の花見は實に盛であるが、一寸見ると實に詰らない蹔風のやうだけれども、